江戸名所図會

十八

ル 4
5105
18

門ル4
號5105
巻18

昭41年12月20日
原安三郎氏寄贈

41 9563

江戸名所圖會巻之七

榊光之部目録

富賀岡八幡宮
洲崎弁天社
海福寺
本誓寺
本松
六間堂神明宮
田向院
猿江泉養寺蓮
日光社
三師堂
大王風
持明院
龍田社
頌宮林社
八月十八日祭礼
歴代紀世表
永代橋
渡船場
遊宴の所
清澄庵
法禅寺
霊雲院
延寿稲荷社
源八幡宮
安産祈願
一言観音
阿弥陀仏観音
同妙寺の所
一蝶寺
採茶庵蕎麦
砂村元八幡宮
境内拓戸雷中
三十三間堂
陽嶽寺
英伝説の巻
六地蔵社
霊巌寺
愛宕院
芭蕉庵舊址
一之橋
雑紋天神
百羅漢寺
佛殿
羅漢堂内相之所
光明
田楽
友橋
江戸天満宮
鳥居
三月廿五日
無洲辺
牛中
嶽社
淵
蓮沈
蓮
三師堂
大王風
持明院
頌宮林社
八月十八日祭礼
歴代紀世表

東覚寺 不動堂　香取太神宮　寶蓮寺　常光寺 六阿弥陀 六番目 神木桐生楠
妙枝松　慈光院　吾嬬権現社 吾嬬の森 神宝古器 連理の松　押上最教寺
聖徳太子堂　萩寺庭中の図　柳嶋妙見堂 七面堂　大法寺 番神社 樹板碑
蒙古退治日持丸旗曼荼羅縁起並図　法恩寺 番神堂　中の郷尾通の図
霊山寺 釈迦堂 蓄堂 法華王 御廟　第六天祠　多田薬師堂
業平天神社　中郷八幡宮　本久寺　さらし井
遠州秋葉山□寺 寺中 在　牛嶋神明宮　太子堂
妙源寺　最勝寺　牛嶋若王子権現社 法華経千部供養碑 古文書　寺嶋蓮華寺 太子堂
大川橋の図　三囲稲荷社　弘福寺 仏殿 本尊 同山堂 食堂 座禅堂 天王殿 経蔵
長命寺 牛嶋弁才天 延寿の祖　長命水 自在庵旧址 ■■樹
穂積 渡 文 漢門 天柱石　請地秋葉権現千代世稲荷社 松　隅田河堤 堤春
白鬚明神社　隅田河　須田の河原
隅田の宿　都鳥　木母寺 梅若山王権現社　梅若丸塚 同縁起

石の枡 水神社 若宮　鳥門　浅茅載畑　丹頂が池
庵崎　関屋の里　綾瀬川　鐘が淵
牛田薬師堂　若宮八幡宮　関屋天満宮 元天祥　葛西花見の図
渋江福光寺　清重稲荷社　木下川薬師之旧跡　古製山葵掛の図
木下川薬師堂 不動堂 熊野祠 白髭明神祠 毘沙門 太神宮 浄行社
平井聖天宮 平井の渡　毘沙門堂 山王宮 二王門　立石 南藏院 無量寺天神 木食上人 法寿院　中川 同釣魚の図
普賢寺　葛西六郎墳墓　善通寺　熊野権現祠
一の江妙音寺 寛政□□ 盧舎那　二の江妙勝寺 水神 宮　浄興寺 琴弾松　小松川鴨狩の図
今井渡　鎌田妙福寺 記鷲上人 袈裟掛松　東大寺 記鷲上人 浄行堂　宗文村帝釈天社
新宿渡口　夕顔観音堂　猿が股　和銅寺廃址
半田稲荷社　松戸の津　松戸堤　桐塚
小岩曹子墓　行徳船場　離戦天祠 和光宮　善照寺什寶古絵 閻魔堂
行徳八幡宮　神明宮　金剛院廃址　徳願寺

行徳塩濱　同塩竈圖　甲宮　圓光大師遺跡

長嶋湊　新利根川　迦羅嶋起瀬　市川渡し

市河城址　根本橋　総寧寺　鐘ヶ淵

國府臺　羅漢井　石棺　古墳　同古戦場

下総府城址　金光明寺

鏡石　持法坂　同

真間浦　真間濱　真間入江　真間於須比

真間継橋　真間手児名旧跡　真間の井　梨園

葛飾八幡宮　八幡不知森　曽谷妙見堂　高石明神社

安房須明神社　正中山法華経寺　若宮八幡宮

久遠塔　仁王門　番神社　中山日祐上人墓　宗門最初法輪旧地　奥の院　祖師堂　宝庫　開山墓

妙正池　妙正大明神祠　葛飾明神社　葛の井　宝珠石

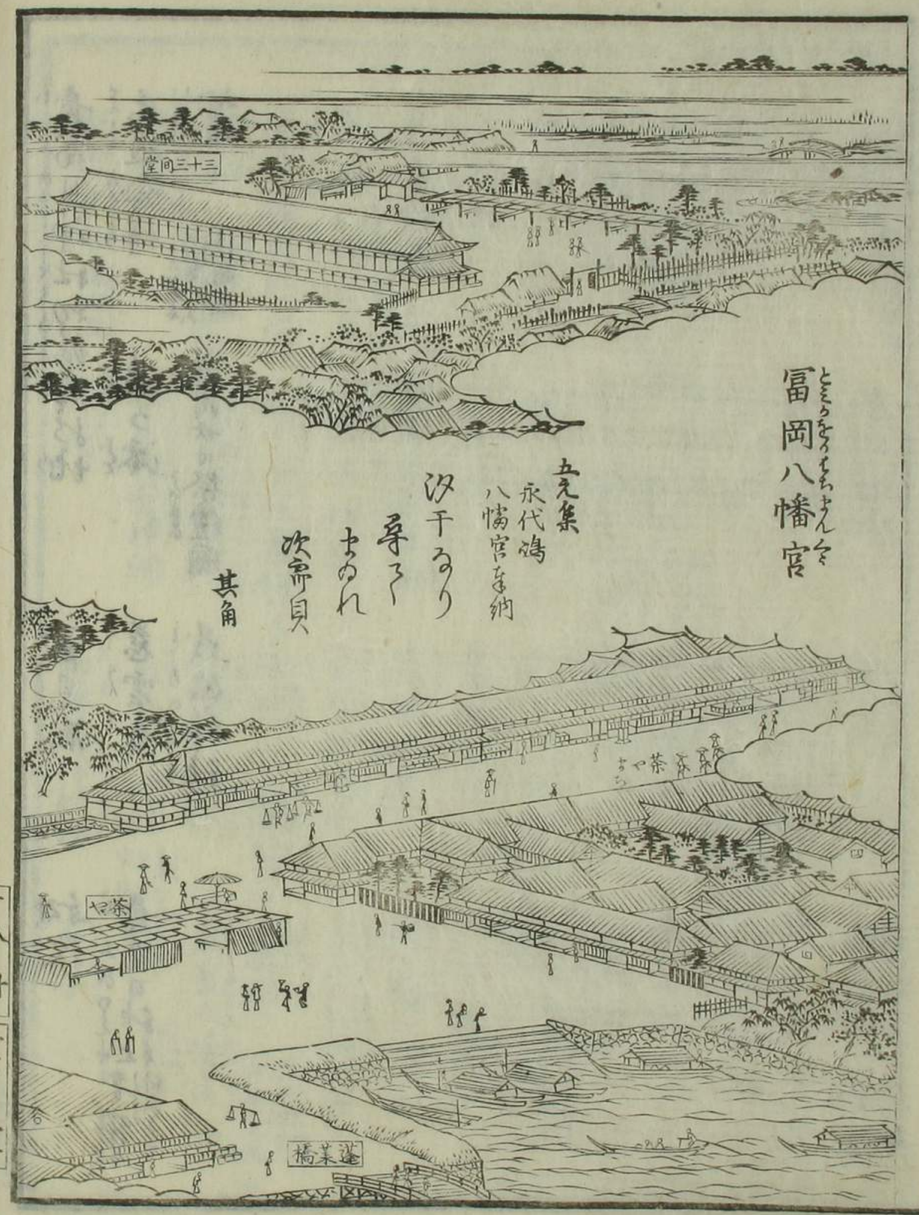
勝間田池　熊野宮　洗川　阿須波明神社　石芋

意富日神社初祭座旧地　夏見厨

天道念仏　遠ヶ澤　慈雲寺

九月廿日祭禮圖　茂侶神社

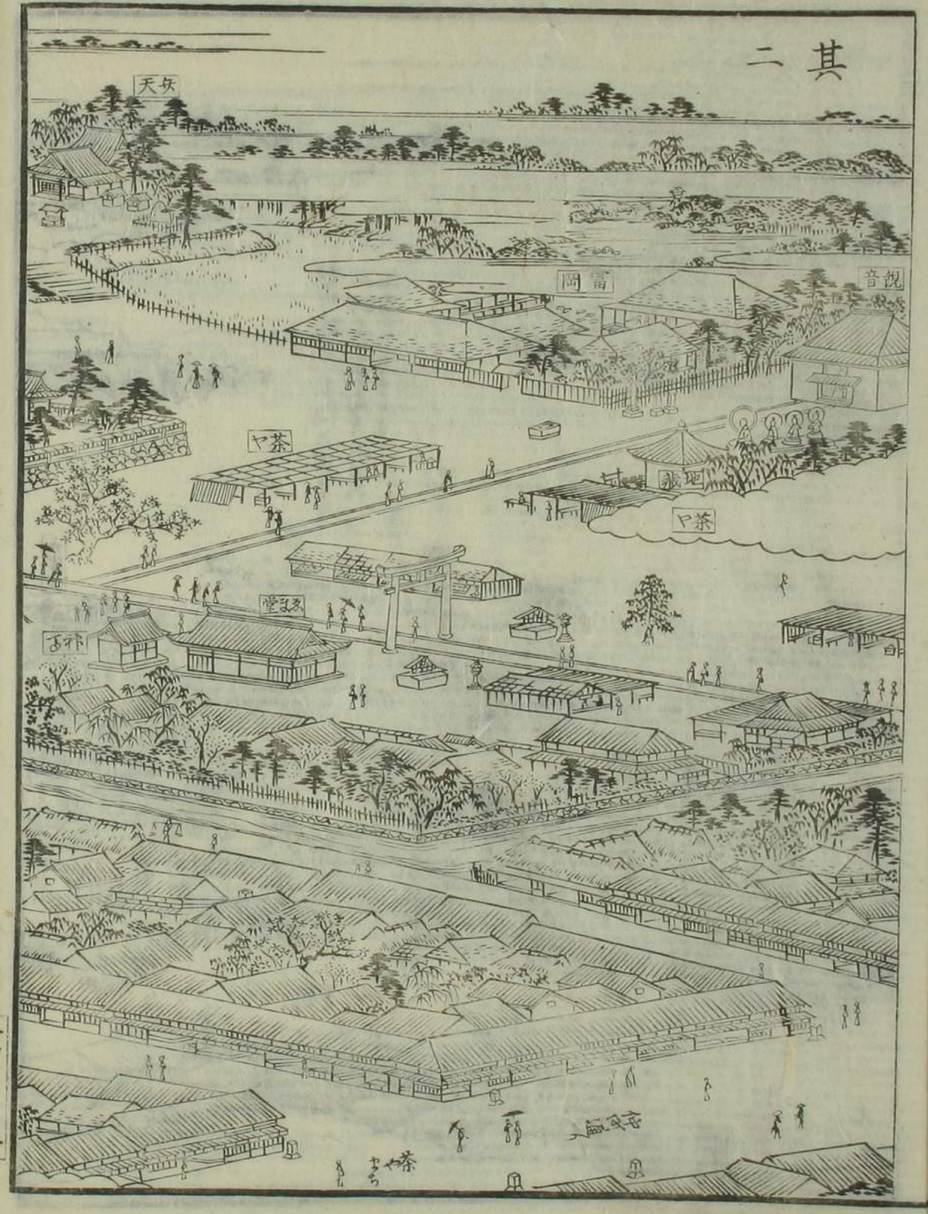
船橋　意富日神社



富岡八幡宮

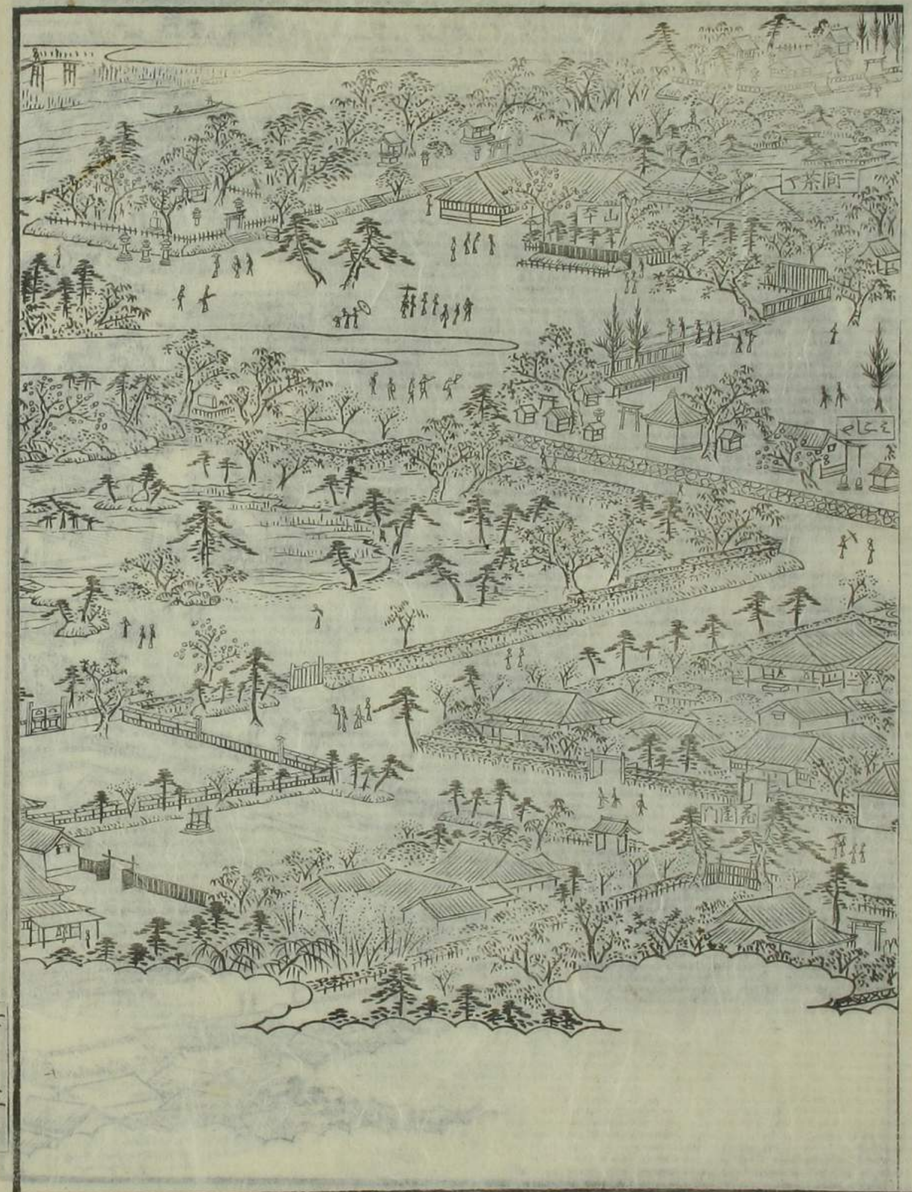
五元集
永代鴻
八幡宮奉納
汐干のり
尋ぬる
ちゆれ
次第貝
其角

松宇
やぢい
一間茶や
本社
内供所
右子
不動
やぢい
小動
大二
寿門
天宇


其二
妖天
富岡
観音
茶や
茶や
茶や
茶や

立ぬくとかとたえのまろも
いろそくと
をさまる御代ハ
ゆるき代の
ちら

仁和寺宮



富岡八幡宮　深川永代嶋にあり別當は真言宗にして大栄山金剛
神院永代寺と號す（江戸名所記に寛永五年の夏弘法大師の靈示あるまうつり高野山の両門主碩學其外東國一流の衲僧此永代嶋に集會一夏九旬の間法席あり列に弘法大師の御影堂を建て真言三密の秘蹟を講ぜられう以後神前に龍燈のあるまうありと云云）

本社　桑神　應神天皇（神影は菅神作）相殿右　天照大神宮　左　八幡大明神　三座

相傳往古源三位頼政當社八幡宮の神像を尊信し其後千葉家及び足利將軍尊氏公鎌倉の公方基氏又宮領上杉等の家々に伝へ太田道灌崇敬殊に厚あり〻〻の道灌没すれの後は神像の所在も定あらはなし〻寛永年間長盛法印靈示によりて感得せ（今尚社より十二町ばかり）東の方砂村の海濱に元八幡宮と稱せしる宮居あり尚社の旧地といふ依此地に當社を創建せしとのいまさ華構の餝はなはだ唯茅茨の堂をなすのみ然るに大和國生駒山の麓基寶山師正保三年丙戌永代寺周光阿闍梨の法夢によりて寛文四年の頃靈夢を感じ宮社を経營せんとはかりをしてく落成し結搆備はるにあらずして以降神光日々に新まるく河東第一の宮居と

なるまうて當社の額に八幡宮と書したるは青蓮院宮尊證法親王の真蹟なるを社内末社多く依悉く是を畧せ

當社四隅鎮守　艮隅　蛭子宮　巽隅　荒神宮（宮川町の川筋にあり）

坤隅　摩利支天宮（永代寺門前仲町の南にあり）　乾隅　大勝金剛宮（同所三丁目にあり）

園女塚（永代寺林泉のうちにあり宝徳年間園女とのひとり俳諸を好める婦人これを植たりと赤井得水のまうあり其文左のごとし）

二葉表銘　並序

冨賀岡八幡神祠石葉維著雍敦牂之歳都下人某某等拾渠名戮力率錢建冨岡八幡祠苛石葉表凡厥高壹丈伍尺左右中間稱焉石以代木備不朽也厥石取諸相之土肥山馬蓋此舉也欽祈國家旁及自禱云廼具狀來諏鳳卿以文之鳳卿聞之采慈采蘋可薦於亀神忠信由中也而況於不朽周之所歸風之所自於是乎觀人載上之心矣神之歆可知也因叙厥載勒右柱銘以繫左柱亦其所需也

銘云

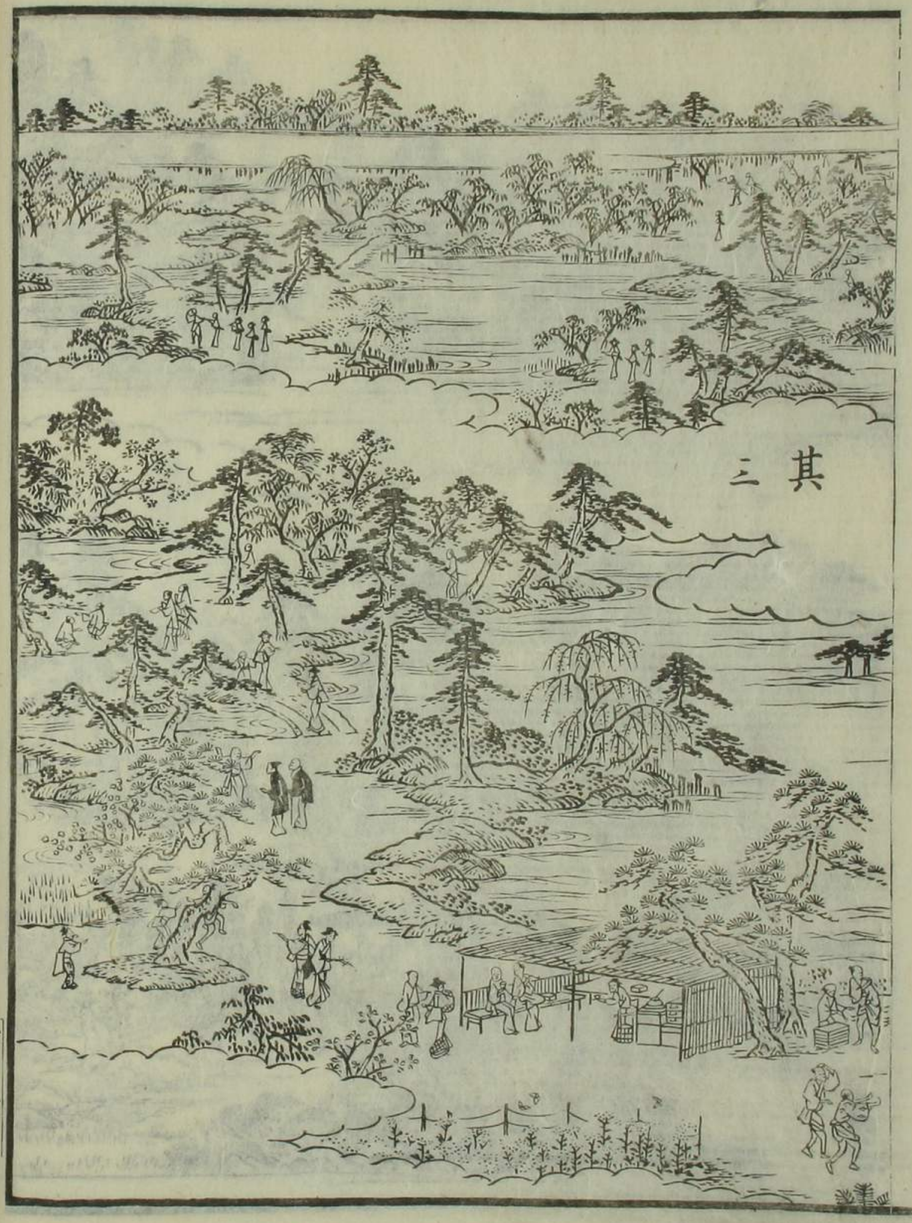
繫昔應神　帝惠恤天　蔑跡于豊　男山之遷
威霑顯赫　奕世且千　邀矣東海　齋祠壹公
惟石之柱　磐之祠前　懇祈皷壑　私禱相延
敦忠祗肅　神監昭然　幽宮陰隲　福聲永年

山岡　毎年三月廿一日弘法大師の御影供を修行と此日より同廿八日まで尚社別當永代寺の林泉をひらき諸人に見物をゆるす俗に此日を君手集まと大ぶ君手集まの祭禮開年八月十九日より執行と此日神輿三基本所一の橋の南藏舟浦の前なる行列へ神幸同日帰輿ところの祭祀寛永二十年癸未八月十九日初て執行あり吃食鶴岡八幡宮の法式を摸し江戸名所記に云ふ慶安四年の秋天下暴雨の為相州藤倉鶴岡八幡宮の法式を摸し尚社より流鏑馬をうむたちより假屋掛數をとりまへて是を見物と貴賤市をなすは同書に云ふ後平よりうり後草の三十三間堂をこゝに迁さんとしるも其流鏑馬の餘風なるべしらん歟

當社門前一華表より内三四町より間に両側茶肆酒肉店軒を並へて常小絃哥の声絶さ殊に社頭に二軒茶屋と称する貨食屋抔あり遊客絶さ牡蠣蜆花蛤鰻鱺魚の類ひを此地の名産とせり

三十三間堂　同所二町ばかり東の方にあり相傳寛永年間或人云ふ元年大江戸の弓師備後といふる者射術誓願寺の落京師蓮華王院を摸して三十三間堂を創立せん事を乞依淺草に於て地を賜ひ諸家に勧進して建立の功を募るとか於て同十九年壬午十月普請落成を淺草清水寺

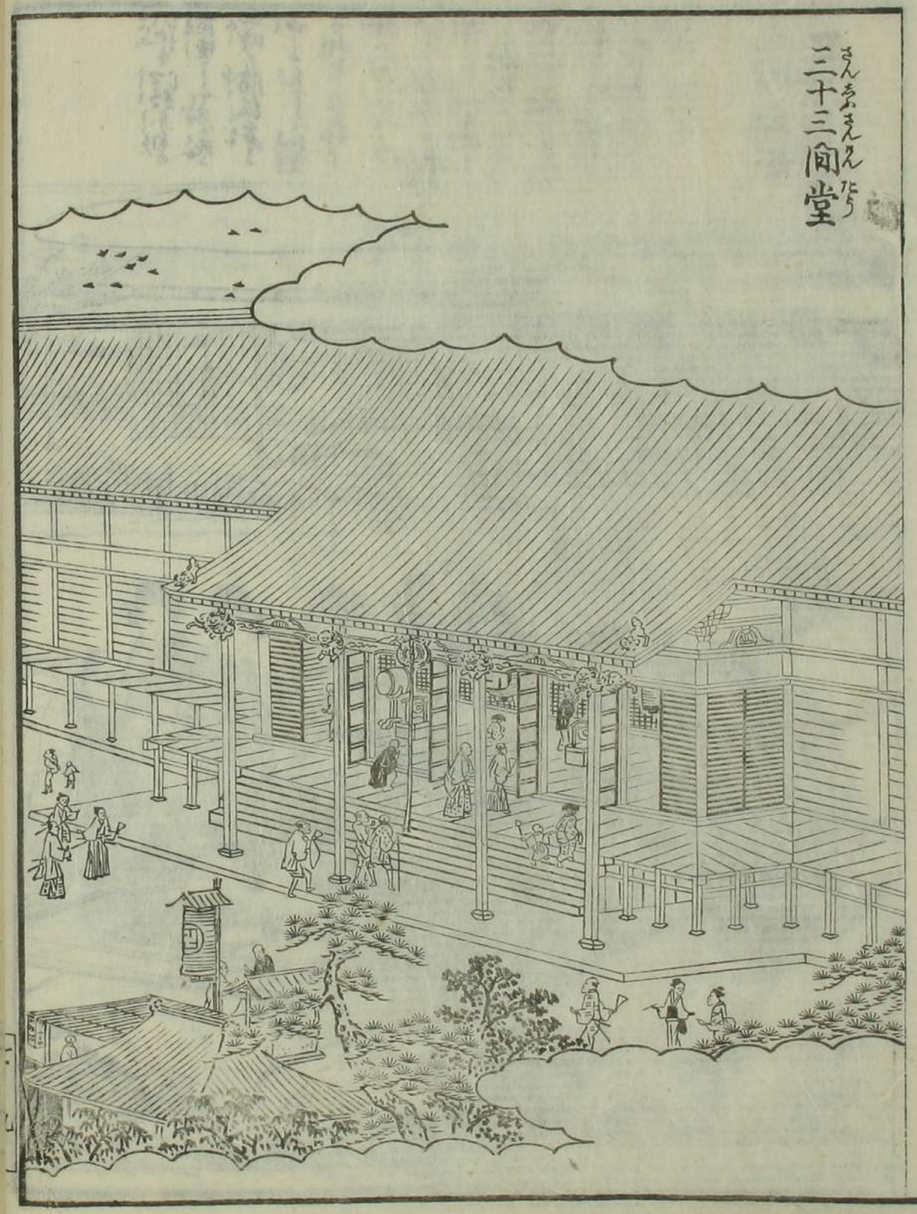
其二



其三

の四方を今矢崎と字もとるハ三十三間堂の旧地なり
今ハ所称とるれを俗間堂前と唱へるも三十三間堂の端と云ふ略説也
田緑の色に耀て灰燼ものハ其後今の地に移されたりとなを
江戸三十三間堂矢数帳ハ慈眼大師の發起なりしとあり又一説に曰ふ
流の武士られを建立て江戸祈願の達人根崎と称すと云ふ
崎辨財天社　同所東の方洲崎にあり列當を吉祥院と号す本尊
辨財天女の像ハ弘法大師の作とのハ相傳元禄年間深津氏正隆
台命を奉て八幡宮を東の方の海濱を築立て陸地とし依同
十三年庚辰護持院の大僧正隆光河辺氏字榮春此地に天女の宮居を建立
なり
此地ハ海岸にて佳景なり殊更弥生の潮盡ハ都下の貴賤袖を連
て真砂の文蛤を拾ひ又ハ桜船を浮へて妓婦の絃歌に興を催
さもあり〳〵む春色を添るの一奇観たり又冬月千鳥ハ名を汐くう
長光山陽嶽寺　深川富岡橋の北結横小路にあり妙心寺派の禅宗に
て本尊観音大士の像ハ惠心僧都の作なりと云向井氏忠勝開

二軒茶屋
雪中遊宴之図

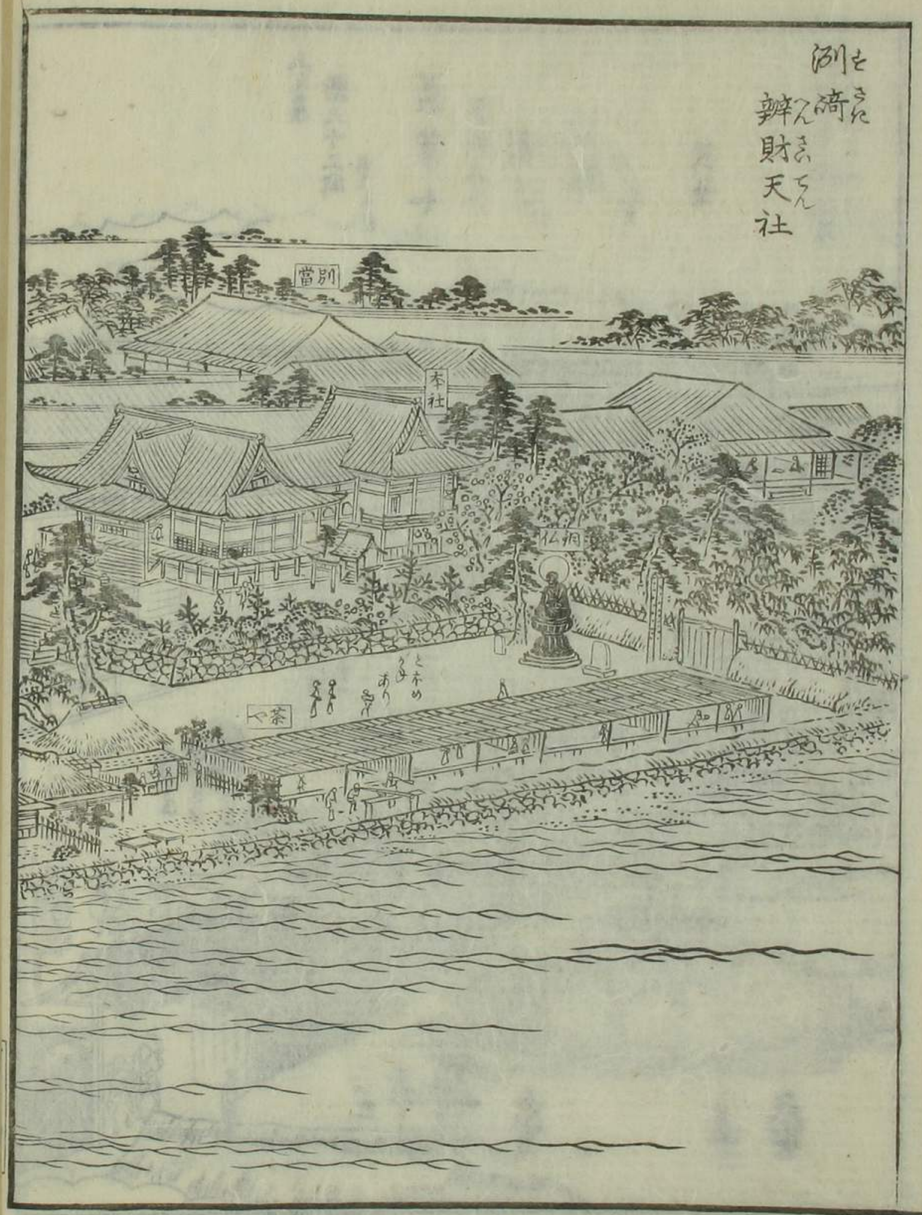


三十三間堂

五文集
新三十三間堂そ

若草や
きのふの
紫そ
も
木綿
うそ

其角



河内国
弁財天社

砂村

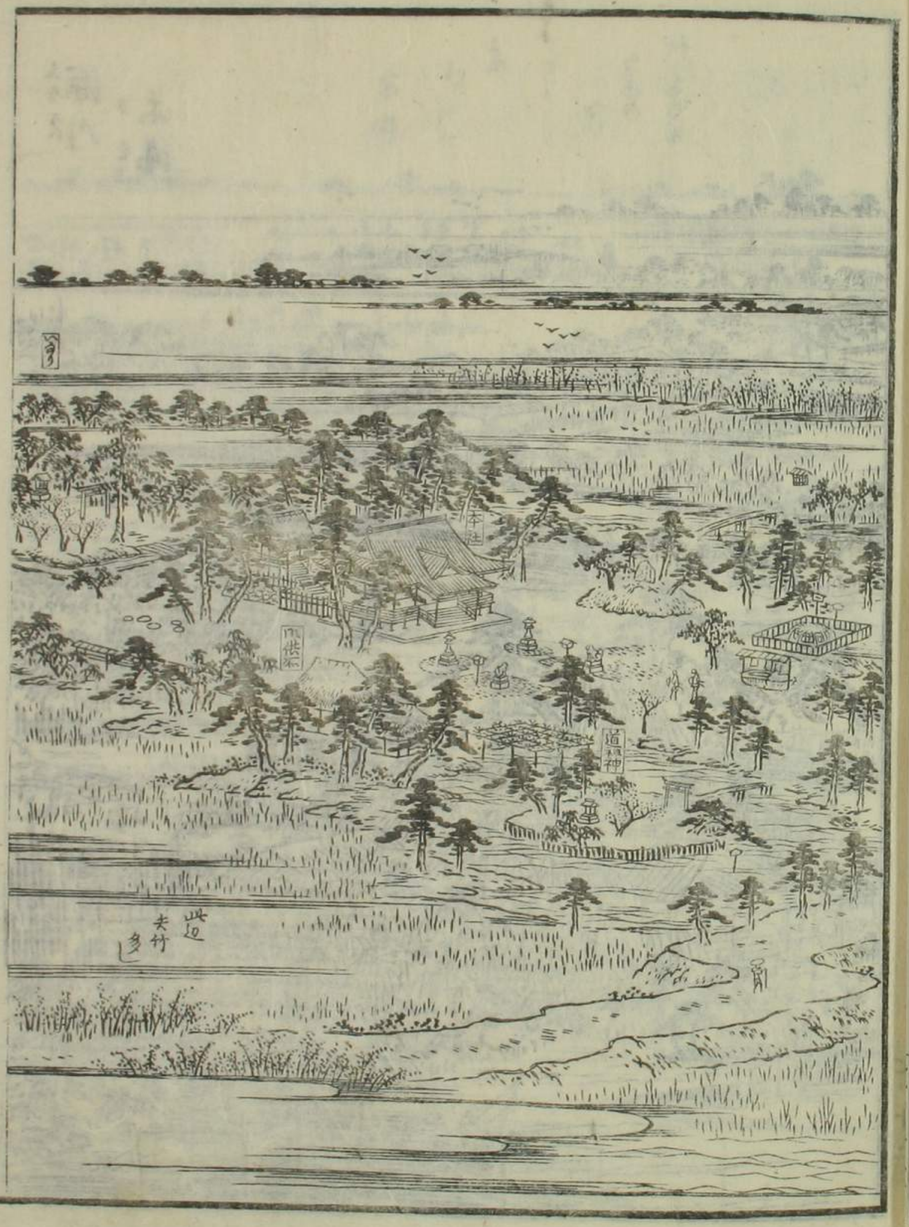
冨岡元八幡宮

例祭 弁天

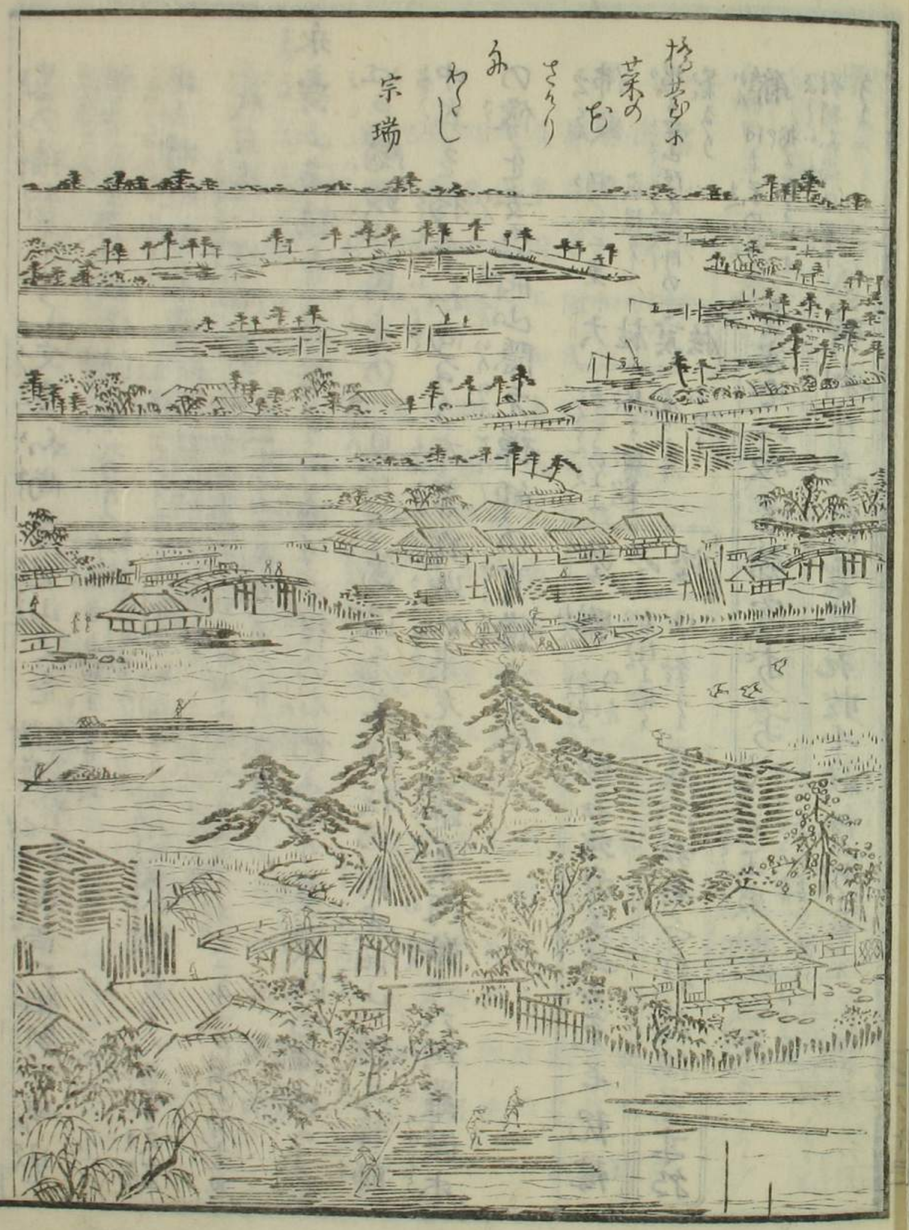
十八丁あまりを東の海濱よりあるく

深川八幡宮の

同北のうしろ



ふかゝ
深川
きた
木場


柳芽ゆ
葉の
色
さくり
み
わし
宗瑞

基の精舎をつくり文室和尚を屍山とす　陽嶽い向井氏の法号なり　和尚い相州三崎見
桃寺白室和尚の法弟なり　見桃寺も領主向井氏　布金の道場なりといふ
出山釋迦如来像　立像二尺ばかりあり極て幼作なり　坪内大隅四郎といふる人当寺文室和尚の需よりえ彫刻せしまま記よ
二代目英一蝶墳墓　当寺卵塔の中にあり碑面に槐外道輪信士元文三年丁巳閏十一月十日と記してあり通称い長八名い信勝といふ
永壽山海福寺　同所寺町通り中程の右側にあり黄檗派の禅林なり
江戸鶴頭二箇寺の一員たり萬治元年戊戌の創建開山い隱元禅師
中興き獨本和尚なり本尊釋迦如来左右に迦葉阿難十六阿羅漢ホ
の像を安き開山隱元禅師の肖像もあり

佛殿　額い二重　家根に掲る開山隱元禅師の筆なり

大雄寶殿　掲る額筆者うしなれ

聯　掲る尚る七言對句和尚の筆なり

聯　ほし和の掲る

妙如端坐美丈玉毫光現瑞
益門弘願千秋後海長東流

聯　左右の掲る

法國衣氏風高高石澗吹
鐘樓　天王殿の右にあり大鳴和尚の筆なり

天王殿　内陣関帝像を安き額い二隱の斬にあり

金剛力六娑婆弥陀如来
天王殿

禪刹中興法霖振起於千秋

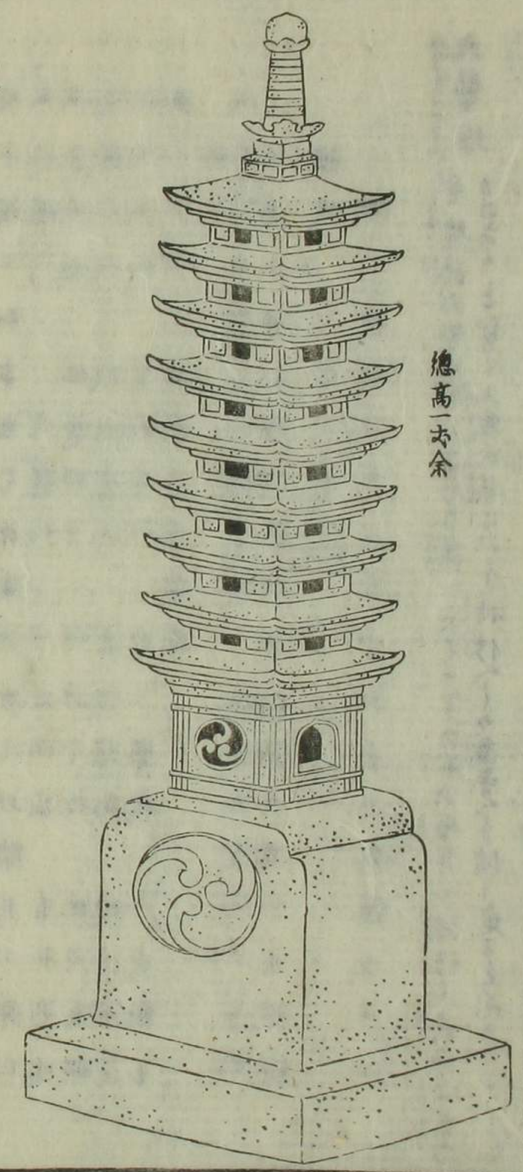
聯　左右の掲る

大鳴の筆

鐘樓　花鯨の彫文い隱元禅師撰なり和尚の筆なり

當山洪鐘者覓文壬子年石川政勝本住居士捐之
爲大福田因請銘乎　開山隱老和尚永令垂不朽
也時天和二年壬戌之冬刻火戒起炎燎殿宇巨器
等茲者同氏思失先亡之本願忻然鳩金重新造焉
及乎竣工知事來乞銘遂再舉此以鐫其上銘曰
洪音嘹喨醒覺群生　禪林令振地府業輕
返聞自性寂寂惺惺　壽源綿衍福海澄清
大化爐内一火鑄成
化風永扇家國昇平　覺王聲教大矣難名
開山八十一翁隱元琦謹題
右
天和三年癸亥小陽吉日　臨濟正宗三十三世
永壽山海福禪寺住持沙門獨本源和南謹識
檀主　石川氏正之正茂
治工武州江戸居住中村喜兵衛藤原正次

九層塔　寺境池のほとりにあり高一丈の石の塔なり相傳ふ武田信玄の
ものなりとなり　土屋氏某これを持伝へしの為寺へうけ建るといふ



總高一丈余

採茶庵舊蹟　同所平野町より俳諧師枳風子の庵室なり枳風本國は
參州なり枳山氏なり鯉屋と唱へ大江戸の小田原町に住て奥售たり
後隱栖して一元と号し　裏翁裏村の号あり常に俳諧を好み擅林風を慕ひ
のち芭蕉翁式師とす此延に遊ぶ寛元六十年翁常に奥せられ
ゑ云く去来は西三十三箇國枳風は東三十三箇國の俳諧奉行なり

と　次の芭蕉翁の句碑に詳なり享保十七年壬子六月十三日八十六歳にて没せり西本願寺の中興塔頭

枳風句集　予閑居採茶庵それかの花後より
秋萩をうゑしうゑて初秋の風のうるはしさ
まのあたりうたるゆめへ

白雪もとけぬ萩乃うゑ株
ちのめそれにひらきて

萩うゑてひとりうゑうらの
時雨　枳風

深川は月も時雨るる萩の
海川にうつれる　枳風

川の音萩の起臥とくとくと
法苑山浄心寺　同じ通り西覺寺橋より北の方右側にあり日蓮宗甲斐
國身延山に属せり乃身延山の弘通所と称せり萬治元年戊成創建の
寺院なり開山は通遠院日義上人と号し中興は覺成院日念上人
なり本尊は釋迦如来の像を安置

海福寺
武田信玄の
持つて来たると
云石の塔
壹基
堂前池の
傍ら
佛殿
本堂
石門
天王殿
鐘楼
僧林院
九重塔

祖師堂（本堂の左にあり日蓮上人の像を安置）　七面堂（日蓮堂前にあり）（当寺の鎮守とあり此七面天当寺より延山奥の院の七面と同作なりと）

相傳当寺は浄心院殿妙秀大姉の菩提を吊はせあらんとなる処に御建立あり〳〵精舍なりと当時浄心尼は小堀正一入道宗甫の妾なりと

寛永十八年辛巳　大樹　御誕生あり　頃正一入道の忠心を御乳母となり

補ふの一分に備んと春日の局に勧て大樹を育〳〵なる故に浄心尼率するの後も猶生前の勤労を思召出され萬治元年戊戌当寺境内若干の地を封〳〵賜ひ又堂舎経営の料として大に資財を喜捨〳〵ぬひ日義上人をして当寺開山たらしむ乃浄心尼の遺廟を建又香燭の料として同二年庚子寺産を附せらるる

道本山霊巌寺　は〳〵北に隣る浄土宗関東十八檀林の一室にして宏壮の梵刹なり本尊は阿弥陀如来開山は霊巌和尚なり

（尚寺の境内に阿弥陀仏殿日宗大姉の墓あり）

（和尚諱は松風檀蓮社雄誉と号し浄土高僧傳に姓は里見氏南総小糸の産なり十三歳にして縣青龍寺の秀岩阿の室に入剃髪し其性明敏にして寛永檀林の英たり寛永十八年九月一日化寂し壽八十三歳又浄土傳燈系譜に南総天羽郡佐貫の人或云後列侯中の老姓は今川氏沼津浄運院尼の法嗣なりと和尚開創の精舎牧留まあり牧峯より牧留の墓あり）

寺産を附せらる寮舎僧坊甍を連ねて巍然たり正え坊を造立せ〳〵銅像の地蔵尊は大江戸六地蔵の一負ひ〳〵総門の内正面に對し毎年四月朔日より同十日まで阿弥陀経千部讀誦修行あるべしと道俗群詣せり

（台旨によりて）

相傳寛永年間当寺開山霊巌和尚或日大江戸の東渚を顧て侍者に謂て云く我大盤を此地に建む侍者の云く江潮浪高く鉢盂底空〳〵爭巨楹碩梁を架せん師笑云く俟夫日あらん於是師化疏を筆〳〵諸檀家を勧励し一貫毎に十念して脈譜に結縁する故に四輩競廉廣汀日あらしむ〳〵陸地となる（今霊巌嶋と称する地是なり）其地早く成て梵刹を開創〳〵霊巌寺と号し学に資五十石を賜ふ爾法幢盛に起て五百の義龍頂に蟠る岩に阿山和尚の世（尚寺第二世仏蓮社大誉）

頑魯これを
泉州堺の人に　明暦丁酉の回録に羅を悉灰燼とするの後今の地に移
さるとあり其頃い今の地も海濱にして輒寺院構営もなりがたし
なり成阿頑和尚　阿山和尚の才ありて
奥澤九品佛の宅基に　十方に勧進して地を築固め諸
堂成建立せらるとあり

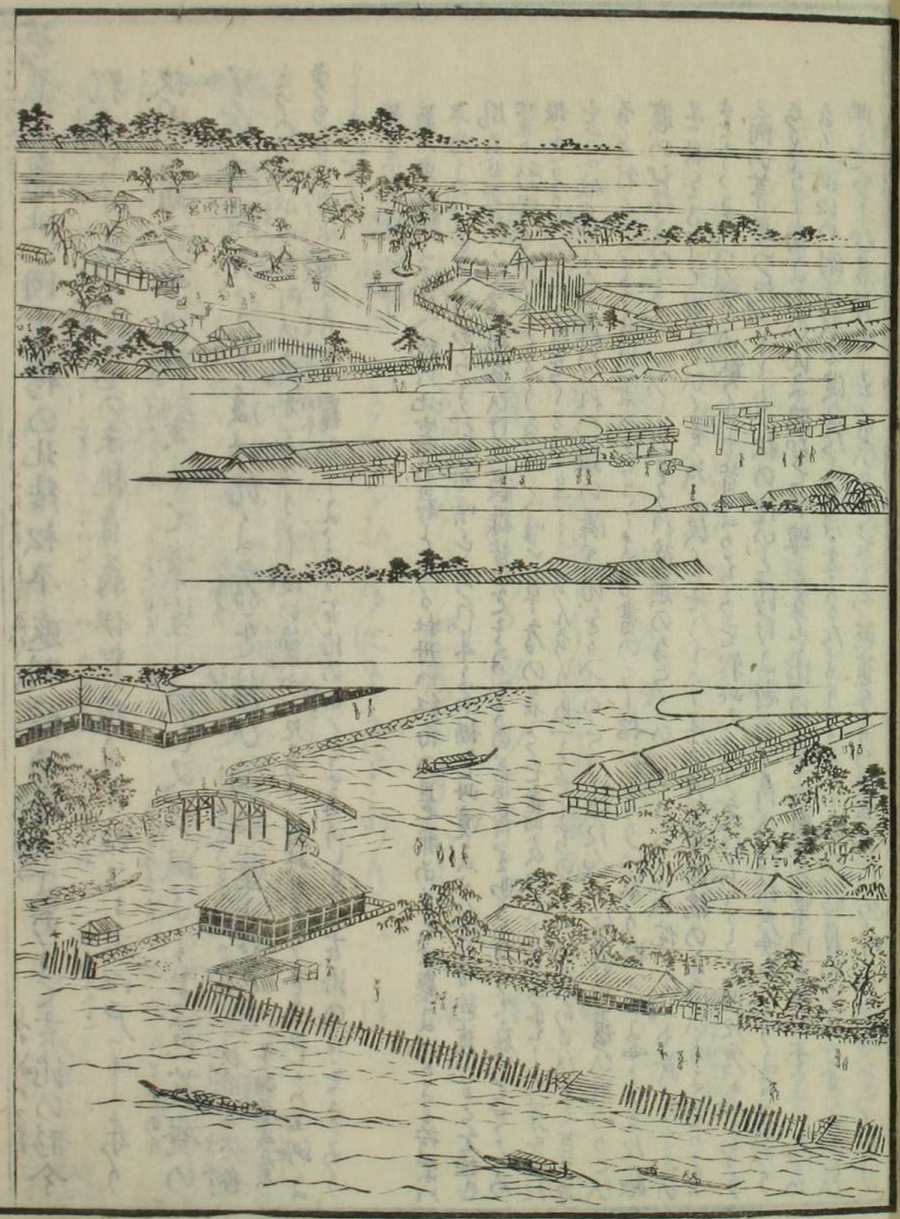
當知山本誓寺　重願院と号を同通りの向例にあり浄土宗江戸四
箇寺の一員たり　京都知恩院に属す　唐佛の阿弥陀如来を本尊とす
相傳此本尊い相州小田原の漁者　其名をきよまつ　詳にせず　魚網を沈して彼地の海中
小得て後霊示に依て當寺に安置するといつて当寺往古い小田原に
ありて傳蓮社曜誉酉岡和尚　酉岡師い北総飯沼弘経寺の第三世　創建し藤枝氏両基の
浄舎なりしを文禄四年丁未　厳命に依寺を大江戸に移す　其地
地い今の御廓内　昆布御門の辺なり　貞蓮社大誉上人文賀和尚中興の開祖とする　傳燈系譜に念誉と
あり俗姓い田中氏相州小田原の人なり亜欧の
頑学にして門りに名僧たりしとつたへり　其後馬喰町の辺に地を賜ひしに
水戸中納言頼房卿の御母堂英勝院殿當寺を復造なり　當寺もと馬喰町に

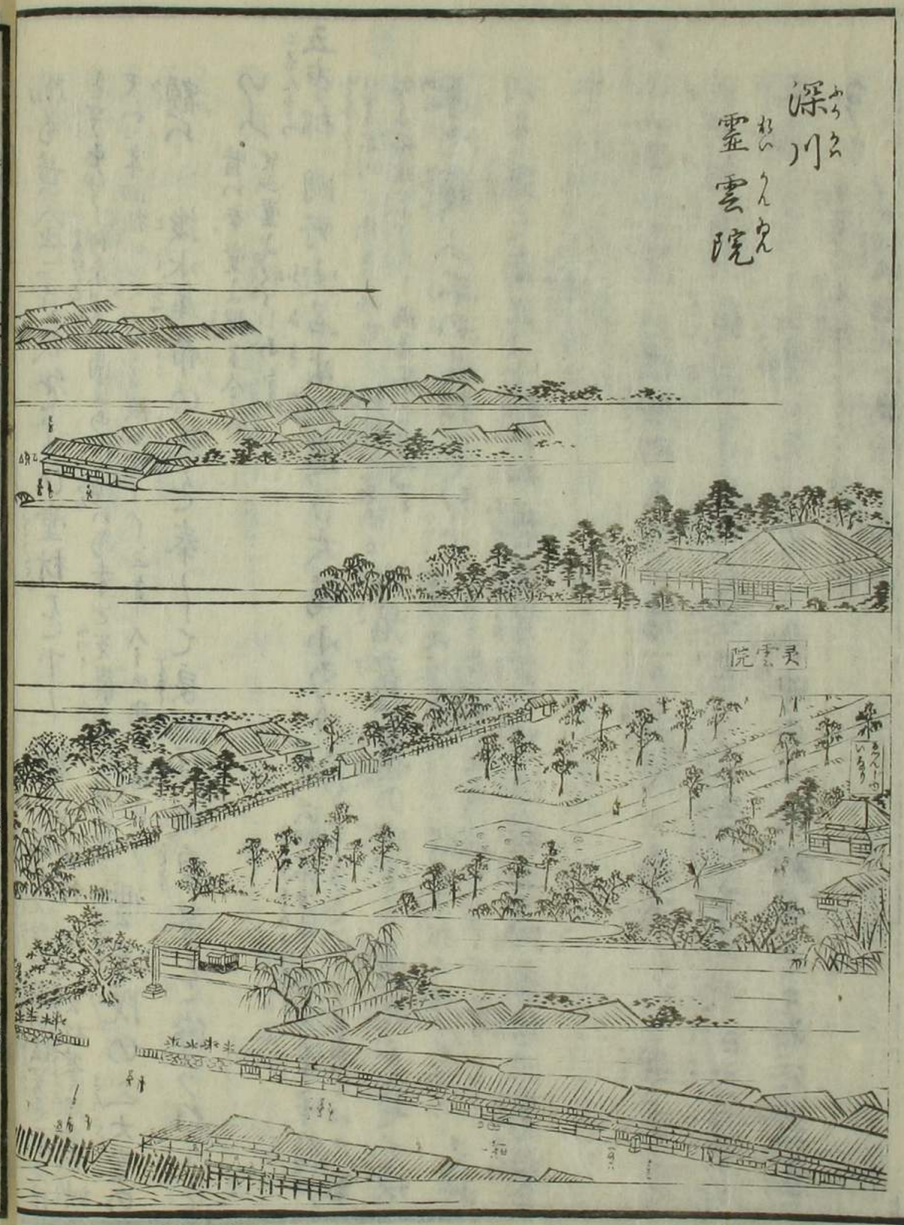
鮮の三使来聘のこたびの鴻臚館なり天和二年回録の後今の地にうつりしとあり
東本願寺をはじめ朝鮮人の接待に定め絶ゆ　いま卵塔の中にあり人の印の石あり　享保のはじめ
地蔵尊石像　尚寺境内に安置せしを方丈の群集ちとあり今一宇の香堂を建てこれを安置せり
霊験ありとて
別に祈霊所
いちろうとつて

一蝶寺　同所東の方海辺新田藪の内にあり京師妙心寺流の禅
宗蓍龍山宣雲寺と号せ元禄七年甲戌創建の林九園にして卓禅
和尚開山たり英一蝶翁曾當寺に寓居せ其頃の遊とて佛殿僧房
等の屏障悉く翁の畫なり故に世俗一蝶寺と字せ　一蝶の伝い第三巻に見へたり
日照山法禅寺　同所南の小路にあり浄土宗にして京師知恩院に属せ
本尊阿弥陀如来の像い佛工安阿弥の作なり　世に海中出現の霊像と称せ　左右二十五
菩薩の像い雲中に羅列して常に行者を護念し　傷ハ和の解説
を摸擬せ　奥院と称せるもの　極楽上品上生の解相なりて　開山い長蓮社英誉心
荘厳なることなる美を尽せり故に世俗極楽寺と字せ　慶長七年九月廿二日に化寂せ　濃州恵那郡粕塚の住人俗性い伊賀氏
門上人と号せ
小にて三郎五郎則俊と号く　伊賀左衛門佐則吉の三男なり後伊賀を小改せ　弘治元年乙卯粕塚に

一城を築て江田の郷と号けめしより居住せ
ある後世家して駿河に至て中嶋と云ひ又雨居をあ面へ多良庵
と号け雲碩と改めて浄業を修行しるる孫に信長の
御打入の頃道徳殊勝の僧へある故以大江戸より召れ品川よりひと寺
境を湯の（今品川の海禅寺）其後文禄二年癸巳道三河岸へ移され又柳生へ
地を賜はりたりし孫に天和三年に至りて今の地に移りぬ
（所城辺にあり一説に正月三日の間いてあり鉦鼓を鳴さるとの事）
龍徳山雲光院　光巖教寺と号を同所西に隣る浄土宗江戸四箇
寺の一にて本尊阿弥陀如来の像は京師東山獅子谷忍徴上人
の作と云ふ開山は遷蓮社往誉上人　瀬呑和尚と号を
（観智国師の法嗣にて黒谷住の名僧）
（甲州武田家の臣飯田氏後裔の孫同久左衛門某の妹にて
後に後列今川氏義元の士神尾孫兵衛久宗の室となる）
本願は門茶局なり
（同刑部少輔の守世の母にて
女御入内の時供奉の功によりて後一位に叙せらる）
局は　大将軍家泥近の侍女にして元和六年庚午

御も黄金二枚をたまひ堂材を下し湯の
と号せり（柳糸堤の南にあり）頃は尚寺を光巖寺と号せり
天和二年田禄の沙汰にあるに依おのれ二年八月の比
額は　後水尾帝の勅を奉りて良恕法親皇筆を染られしと
（昔は本堂に掲る今は
尼山堂に収めてあり）　雲光院の三大なる
五本松　同所小名木川通り大嶋小名の
（或人云四名女木三谷なりと古江戸
の影ようるき沢とも書て江戸誌
小名木川は作る又世に渦道の意ある
なり俗間宗しるし渦屋敷とも云へり）
面を覆ふの石の古松をいふ　九鬼家の構の中より道路を越て水
（昔は此川筋に同じ様の古松数株ありしが
枯て今は此松樹のみ今猶蒼々たり）
川を隔て南岸の地は知恩院宮尊空法親皇御幽棲の舊跡な
り　（月巻本和霊山寺の
系図を合せ考るべし）
天王山霊雲院　清澄町大川の端百年橋の南詰にあり禅宗にて
（雲光院は局の法号にて雲光院
殿後一位尼公松樹周堂大姉
と号せり）
武別城主の龍穏寺に属し本尊は観世音開山は放光時東明
和尚と号す宝暦七年丁巳　台命により依創建せる石の菊若
（開基の年歴久しくあらざるを
りて世俗深川の新寺と称す）




深川
霊雲院
霊雲院

芭蕉庵舊址　同し橋の北結松平遠州候の庭中にありて古池の形今猶存せりといふ延宝の末桃青翁伊賀国より始て大江戸に来り杉風か家に入後剃髪して素宣と改む又杉風子より芭蕉庵の号を譲請夫より後此地に庵を結ひ泊船堂と号せ（杉風子俗称を鯉屋藤左衛門といふ江戸小田原町の魚牙子たりし頃の簗中にありしより後此芭蕉をもとりしかれ生洲に魚をあつめ自水面にあり草覆ひしによりありしにも古池の如くなりし古池のにこちさありしといへり）

芭蕉を移す詞

菊は東籬にさかへ竹は北窓の君となる牡丹は紅白の是非ありて世塵にけかさる荷葉は平地にたゝす水清からされは花咲す何れの年にや栖を此境にうつす時芭蕉一もとを植ゆ風土芭蕉の心にやかなひけん数株茎をそなへ其葉茂りかさなりて庭をせはめ萱か軒端もかくるはかりなり人呼て草庵の名とす旧友門人ともに愛して芽をかき根をわかちて処々におくる事年々になんなりぬ一とせみちのくの行脚おもひ立て芭蕉庵すてに破れんとすれはかれは籬の隣に地をかへてあたりの人々に霜の覆ひ風のかこひなとかへすかへす頼おきてはかなき筆のすさみにも書のこし松はひとりになりぬへきにやと遠き旅寝の胸にたゝまり人々の別れ芭蕉のなこりひとかたならぬわひしさもつひに五とせの春秋を過して再ひ芭蕉に涙をそゝく今年五月の半花橘のにほひもさすかに遠からされは人々の契りも昔にかはらすなほ此あたりえ立さらて旧き庵もやゝちかう三間の茅屋つきつきしう杉の柱いと清けに削なし竹の枝折戸やすらかに葭垣あつくしわたして南に向ひ池に臨みて水楼となす地は富士に対して柴門景をすゝめてなゝめなり浙江の潮三股の淀にたゝへて月を見るたよりよろしけれは初月の夕より雲をいとひ雨をくるしむ名月のよそほひにとてまつ芭蕉をうつすその葉七尺あまり或は半吹折て鳳鳥の尾を痛しめ青扇やふれて風をかなしむたまたま花咲ても花やかならす茎太けれとも斧にあたらすかの山中不材の類木にたくへてその性たふとし僧懐素は是に筆をはしらしめ張横渠は新葉を見て修学の力とせしとなり予その二つをとらすたゝその陰にあそひて風雨に破れやすきを愛するのみ　以上

古池や蛙とひこむ水乃おと　はせを

花の雲鐘は上野か浅草か　同

芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉　同

名月や門へさしくる汐かしら　同

名月や池をめくりて夜もすから　同

初雪やさいはひ庵にまかりある　同

いつれも此地にありし頃の吟詠なり

翁は伊賀国上野の産俗姓は松尾氏宗房といふ通称は忠右衛門或は甚七郎とも号すこそ実に中興の俳仙にして一家の祖たり業を拾穂軒季吟に受けて風月の才に長し西行宗祇の跡を追慕するの志ありて家を風雲にまかせ生涯を旅を旨とし吉沢新田の花にあそふうかれ更科越路の月雪にさまよひ終に元禄七年十月十二日難波の偶居にして身まかるゆゑに其角かあらはせる芭蕉翁終焉の記にくはしく見えたり

神明宮　同所森下町にあり猿江の泉養寺別當たり　天台宗東叡山に属せし寺

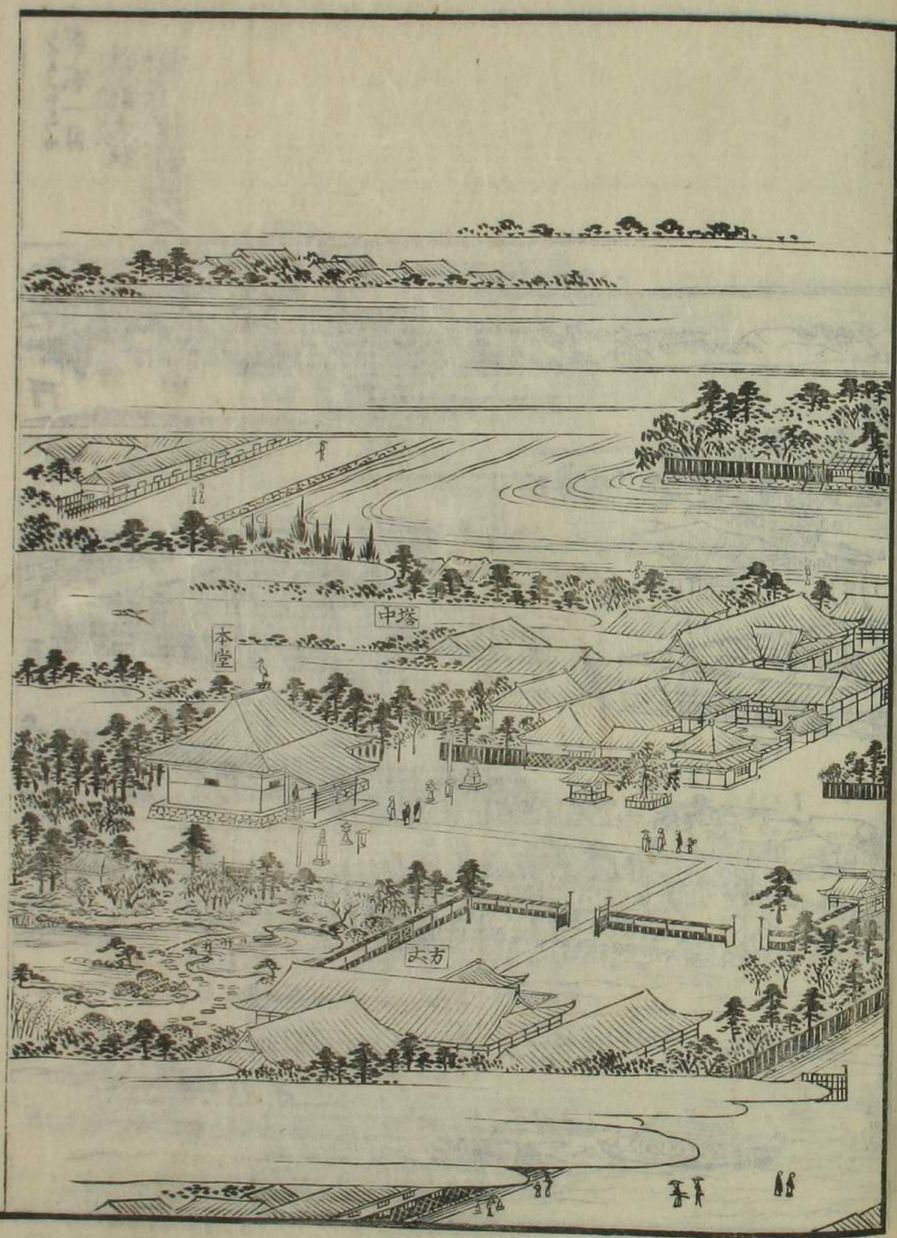
芭蕉庵

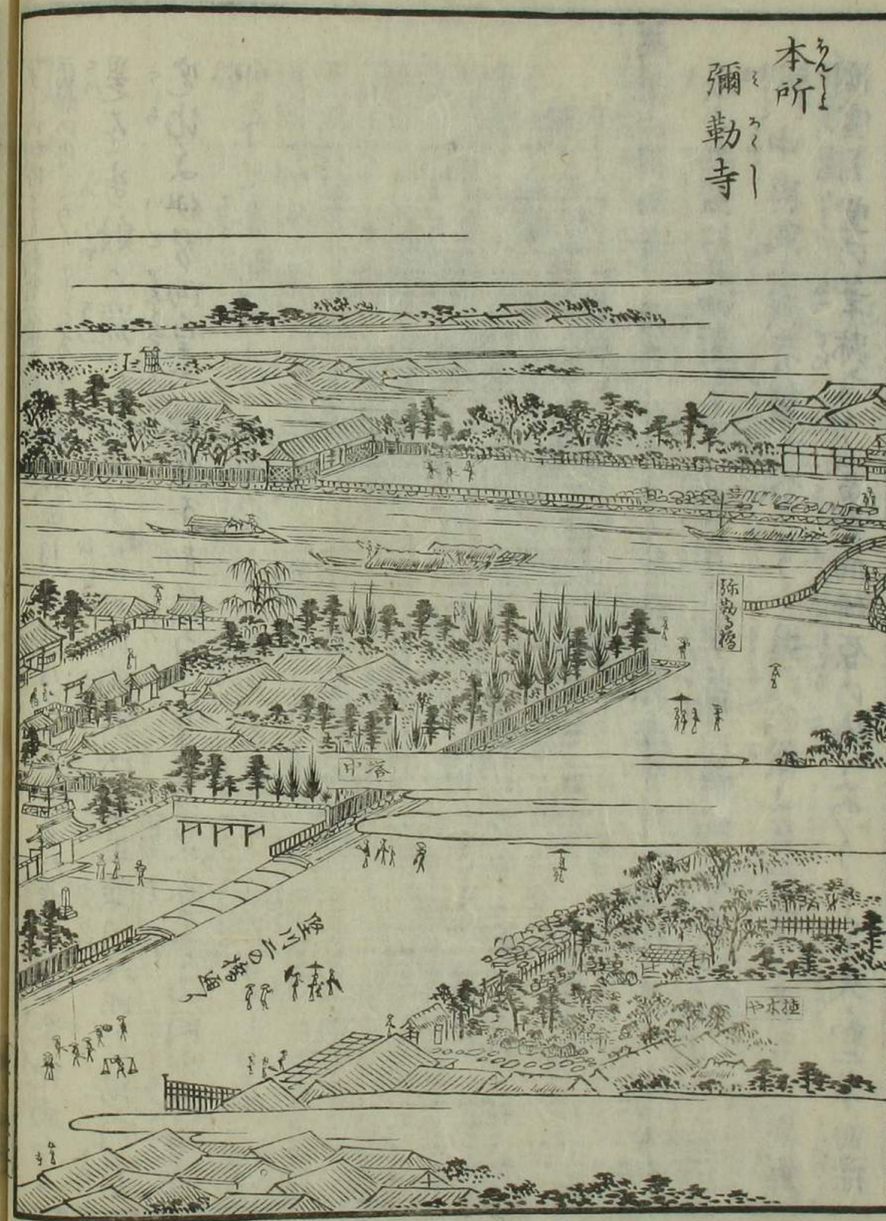
古池や
蛙
飛
こむ
水の
音

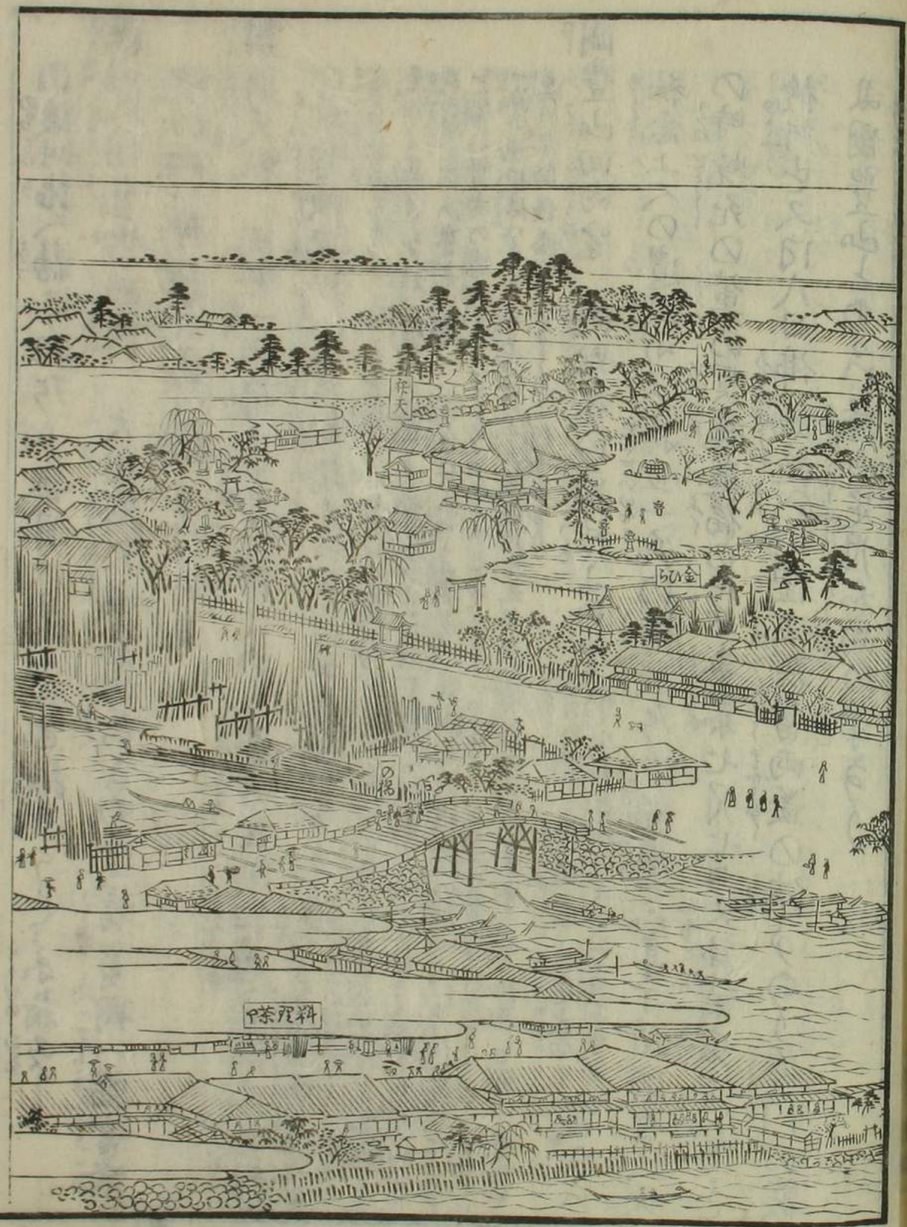
桃青

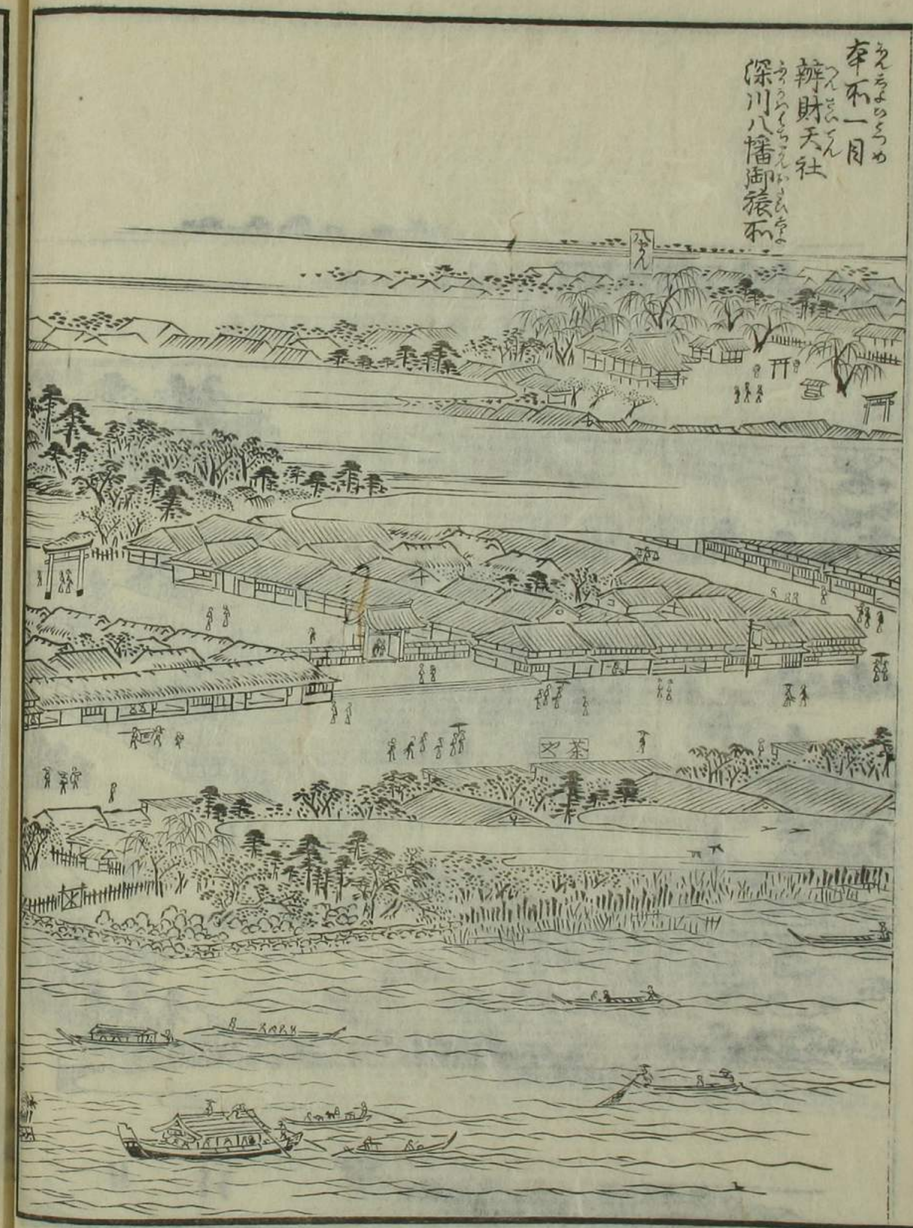
社地より南今の井上氏
清郎の地よりうしとまり毎歳正月と九月の十三日より舊式の祭祀あり
是を歩射と號く相傳へ昔此地開創の里正深川八郎右衛門某
宅地より伊勢両皇太神宮を勧請すり泉養寺の開山秀須法
印をして奉祀せしむるといふ此地い深川氏宅地の内なりとい
泉養寺記録より深川の起立のるの実を載其畧に云く深川の地往古の廣くたる原野なりし
其頃摂州の老人あり深川八郎右衛門と稱する人ありしこの地に居住を移すと慶長元年丙申
あり住人もなく荒廣の地なれい此地名を問せたまひしに同じく此八郎右衛門
深川の文字のを地名より唱へ来りしと答へ奉らく此地を開創し苗字
る縁故世に住して里正たりしこの宝暦の頃故ありて其地新絶せりされと泉養寺の八郎右衛門
香花院るるより今も狂泉氏累世の墳墓なせりは呼称村新田の東より八郎右衛門新田と称る耕地
めるも此人開發せし故の名なり今土俗宅地を四十丁村と云つり
関より元の泉養寺の地より重鎖紅花の蓮あり花形牡丹より髣髴たり故より寺花の附を移せしこと
のそのかおらと寛延十年の頃夏初て此花開生せり今よりより年くたりて奇観とせり

萬徳山彌勒寺　月所二丁ばかりを隔て弥勒寺橋の北詰より真言新
義の觸頭江戸四箇寺の一室なり本尊薬師如来世に上薬師と称ず
由を中興開山戒肯鏡上人と号と徳門の額より弥勒寺と書せり朝鮮
國雪月堂の筆跡なり當寺旧栖原の地よりしを天和二年田禄


中塔
本堂
六方


本所
彌勒寺
中塔
中木橋


料理茶屋


辨財天社
深川八幡

の後此地へ移されたり毎月八日十二日を縁日として参詣多し

深川八幡宮御旧所　大川端大船倉の前より富賀岡八幡宮参

禮の砌い神輿此地へ渡らせらる

辨財天社　同所一の橋の南の詰より参所相別江鴨より同し　えん禄

の始惣検校杉山氏勧請と已已の日参詣多し　相伴て杉山検校い奥別の

志天に名をのさんとうを欲し三七日の間飲食を断て相別江鴨より天女屋に参詣し

至心より願を祈請せしに果て霊験あるを以て竟に滅御よ始を以て立に祠して

杉山流しの慶安の頃　台命を蒙り盲者の總帰とあさしめられ京師に集会して琵琶を弾し平曲を

を傷ひ聾者の總帰とあさしめられ京師に集会して琵琶を弾し平曲を

一流の規矩倣ひまつり毎年二月十六日六月十九日あ、聾者宝前に集会して琵琶を弾し平曲を

奏し京師検校会ひまつり行ふ例なり

回豊山同向院　両国橋の東詰より

称念上人の遺風ゆゑ捨世一汎の佛域たり明暦三年丁酉の春大火

の時焼死の輩の冥魂追福のため毎年七月七日大施餓鬼法會を

執行ひ又同八日佛飯施入の檀主現當両益の法りあり總門の額

に回豊山とあるい縁山定月和尚の筆なり

本堂　本尊阿弥陀如来座像壹丈許あり　えん禄十六年のあく尚る画像の

絹の阿弥陀仏坐像なり尚ふるい今の本尊を造ると堂をのみ存する

不の銅像の坐像をもて本尊とす　観誉上人祐海和尚ふるい今の本尊を造ると堂をのみ存する

第三世喚霊和尚今の　備中千體阿弥陀如来　本尊長一尺一寸　恵心僧都の作なり

ゆゑ堂を建られたりとい　後堂に安置す俗称して奥の院とい

黒本尊と同體なりとい　縁山二十三世の貫首遵誉貴屋上人念仏弘通して明暦の大火に焼死

溺死せる不の十萬八千餘人の亡者を回向あるべき旨　命ぜられ其頃　官府より假の佛堂を造営

ぜしめたまひしかの霊像を本尊とす　本堂の右より弥陀釈迦大日

等の三尊を安置せる堂い

宰死刑死の者の幽魂追福のため　官府より建立　堂内の石塔婆い其前越べを

勝付られ　佛餉を捧ぐ　小石川の市街を巡行し

一言観音　沈の像　南都拓提寺より迎ひ

責しく　辨財天祠　日本よりせる藁畏天と称せる故に霊應の著を念じ其祈願一言ずつ成就

しく仏法大師の作なるを推知し新に佛鉢を　馬頭観世音

同刻して小祠を営み尚まの護法神とあがめ

たるを縁しあられまたすひ尚まの護法神とあがめ

台命ありしかの完山上人の仏教を

拾女某のをつまをつねて作りたまへ　圓光大師堂　回光大師播州室津の

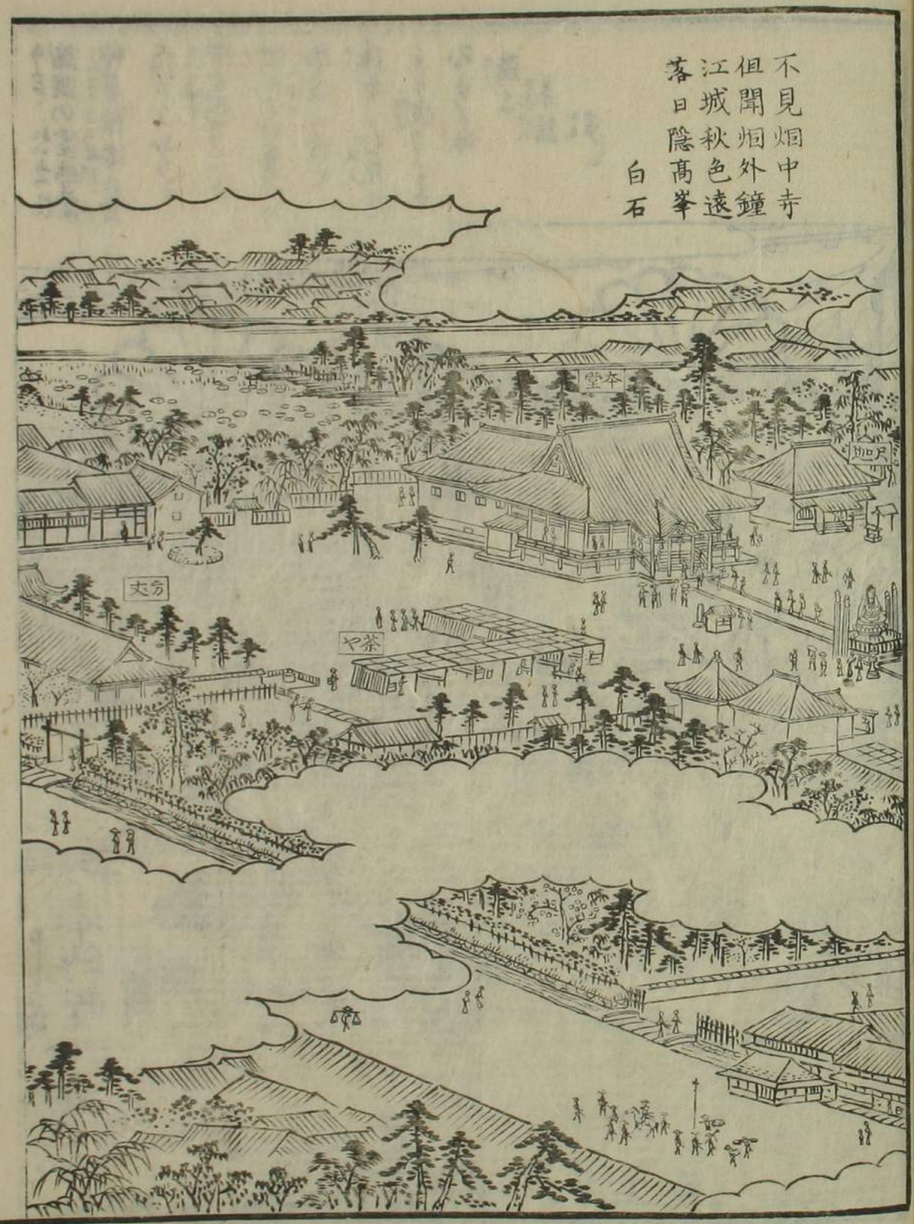
おをつくねて全身を造りてとうり拾女い尼とうり　念仏三昧ありて孫に七十五歳にして大往生

を図たり　蓮池　信誉上人常に蓮実を蒔て念珠に代て孫名に其蓮実の積るゆゑ二十五石に

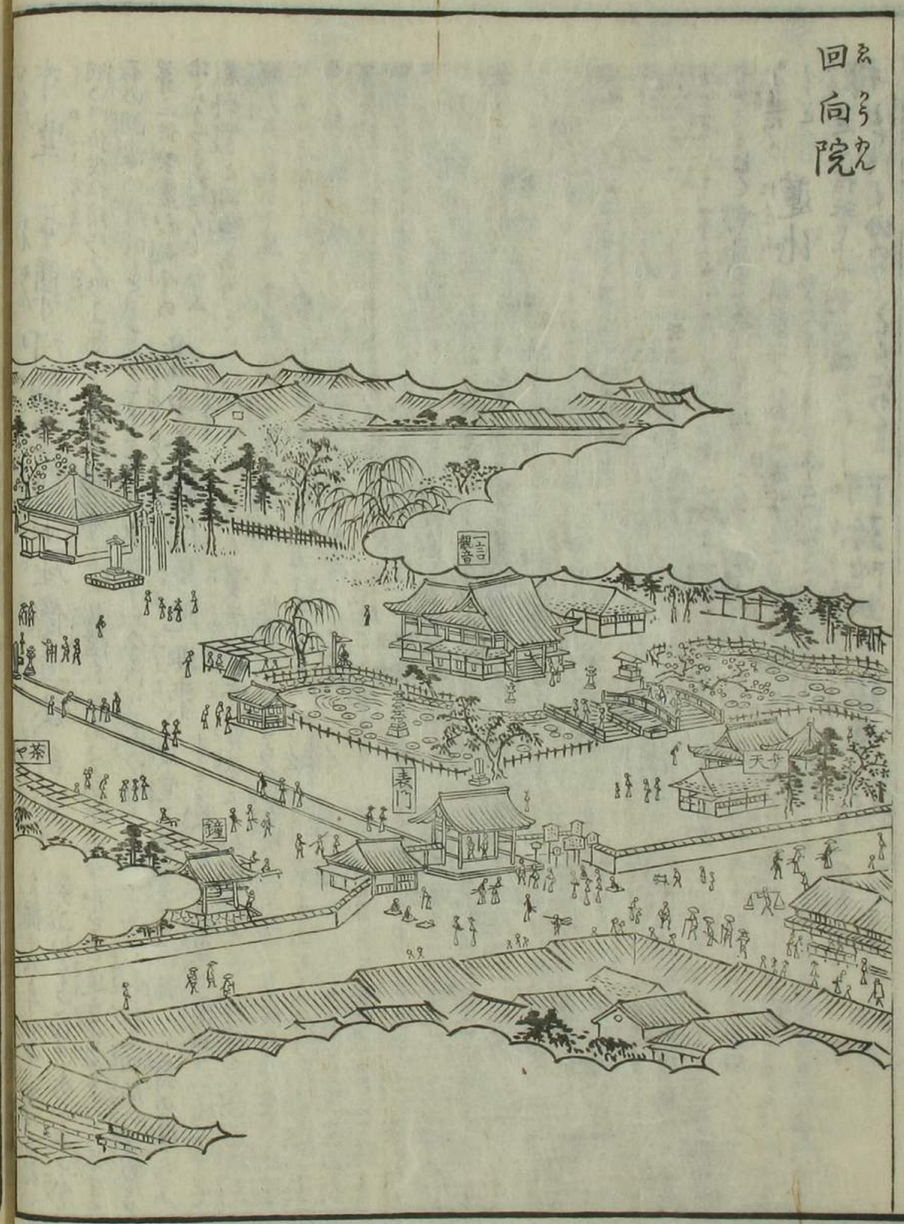
しと　是も信誉上人手自植られしかの沈に生ずる蓮ハこの種より生ずるところありとい

樽　とは一沈のうちにあり　阿弥陀如来銅像　本堂の四面にあり

坐像一丈六尺あり



不見烟中寺
但聞烟外鐘
江城秋色遠
落日隱高峯
白石



回向院

諸国の霊仏霊神等結縁の為
大江戸より出て
啓金扎せんと
欲るもの多くい
尚院より於て
結せむ依方
より便りらき
ひるる故
殊に
糸諸
多し

回向院開帳条

相傳明暦三年丁酉の春正月十八日十九日大江戸大火に仍て焼死する者凡
十萬八千餘人なり時に
詩歩のひと件の焼死骸を埋藏し上に一堆の塚を築き號けて淵澤
園と唱へ乃亡魂追福の為増上寺第二十三世貴屋大和尚紙一
一字の梵刹を創基せしめらる當寺是なり（黄の諸宗山縁寺といふとそ
いふる冊子　諸宗の僧を集め一七日の間塚の所に於千部の経を讀誦せしめ
大法會修行ありされとも住持なりしに其頃小石川智香寺の信
誓自心上人道光世に隱れなきに當寺に移住せしめ第二世にて
岡山と称したまへる依上人彼塚上小堂宇を建営し長く迷魂の冥
福を助むる為不断念佛の道場とせらるる
（刻に髪髭たり當院に安置する所の佛像の悪く此上人の彫造なりとつり
天恩山五百大阿羅漢禪寺　本所五目竪川より南にあり黄檗派の
禪林にて河東第一の名藍なり岡山の嶽眼禪師中興の象先和尚又
（因に云信誓上人佛像を造る
ふあるを得て恵心僧都の彫

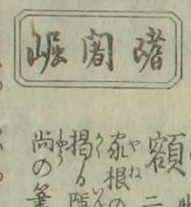
猿江泉源寺の池に生ずるところの蓮花い
重瓣紅花にして花敢
牡丹に髣髴たり故に
奇観とも寛政
九年の晩夏
この花を
愛しうり
今に至り
年々に
ちり

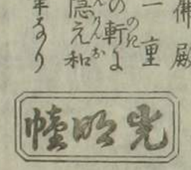
松雲禪師を以開基の大祖と称す

佛殿 本尊 釋迦牟尼佛 拈華像 長一丈六尺 下に巨石を畳て坐を做く 脇士 文殊 普賢 各高八尺 阿難 迦葉 各高九尺 左右の階壇小列する所の五百阿羅漢の像は各等身にして共小松雲禪師彫刻する処なり

額 本尊の上に掲る黄檗隠元老人の筆なり

額 同堂内の正面に掲る黄檗即非の筆なり

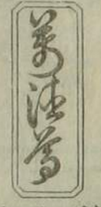


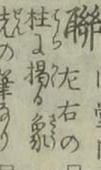


聯 同堂内柱に掲る先の筆なり

左右の

額 佛殿 二重 亦根の軒に掲る隠元和尚の筆なり





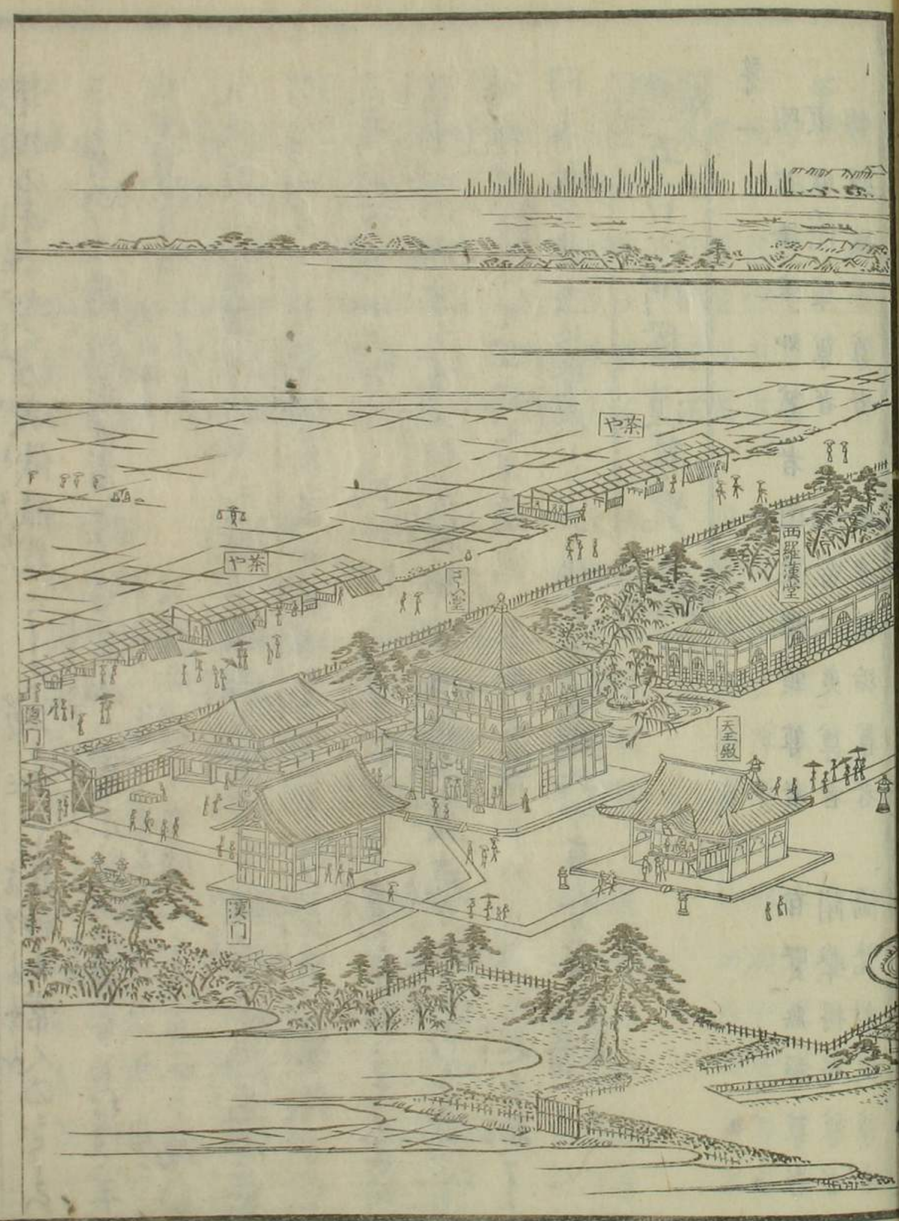
五百羅漢造立之来由

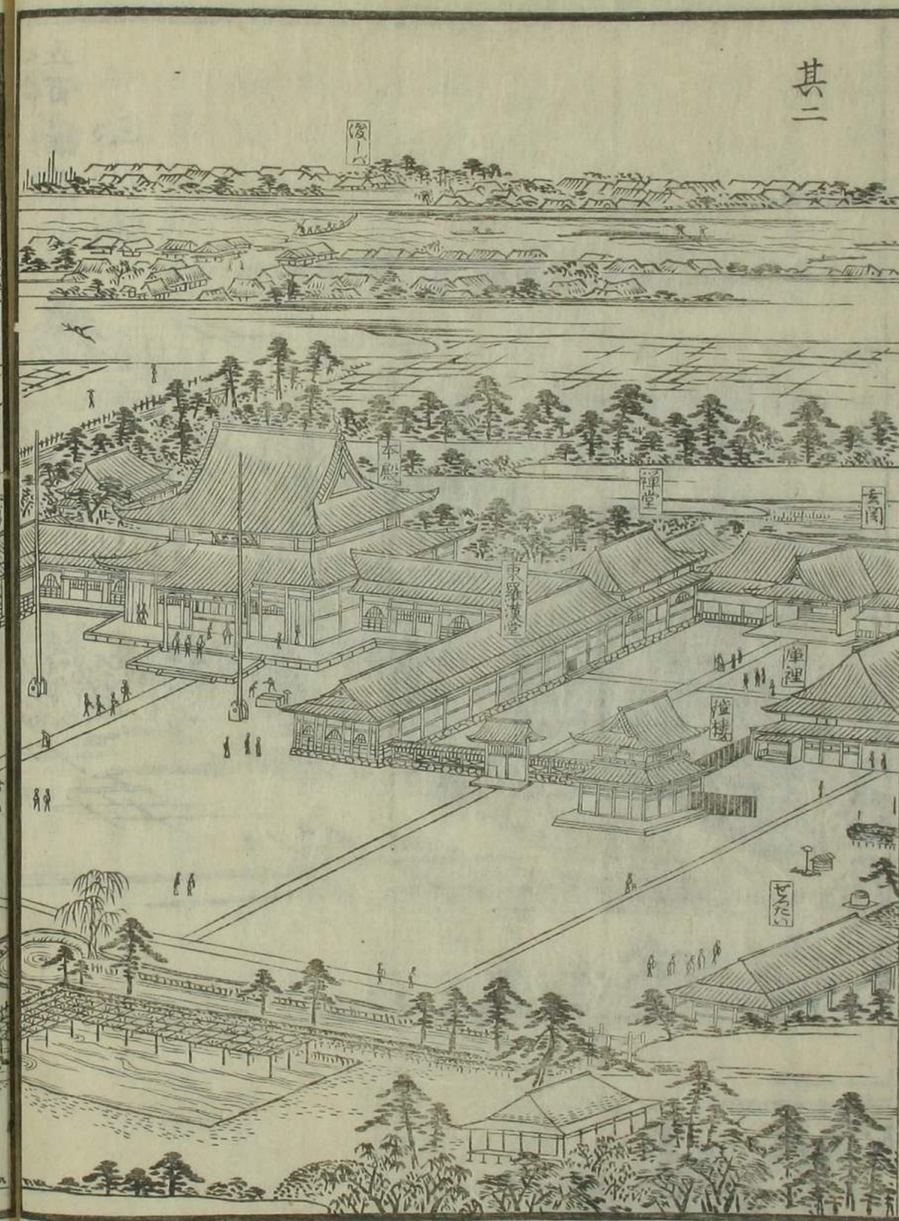
松雲禪師は京兆の人寛雄にして正信を具す 或人云く松雲禪師始は俗姓を寛文九年己酉歳十二 摂の端龍精舎に入て鐵眼禪師に隨ひ薙髪して僧となる後游方の懐あるより師の許を辭して

をるきうの
小名木川
五本松
深川の末
五本松とのふ
夕ゝ船を
さして
川上を
とゝの
ふをしもや

月の
女
芭蕉

海西小飄歴〻豊前國羅漢寺小至り唐土天台山の逆流並に賢順とのゝる二僧一夜に造立せしといへる五百聖者の石像を瞻禮し恭敬日く小厚く其後潛に五百羅漢の像を手彫せんとするの意あり歸省の日鐵眼禅師果して其命あるを以遂に貞享年間江戸小耒りえ禄辛未始て浅草寺の境内壽松院に就て假屋を設け衆人をそゝめ羅漢の木像を彫刻し弘福寺の鐵牛和尚衣資を喜捨し一尊を刻まゝむるといへとも時至らずして施あるの微くこてに歳月を歴たるを惟る小同壬申の年大倉前一十六負の道俗結盟輔佐し癸酉孟春に至り五十尊成甲戌三月朔日御國母桂昌一位尼公金を揚て佛像造立の資とるゝ此時十尊既彫営せるのみしに縁化響の感せるる如く施財日〻小多く竟に一十餘霜を経て完く本尊丈六の釋迦佛及ひ阿羅漢等とくて五百三千有餘躰の佛像縹緲として現し其


茶や
茶や
西堂漢学堂
天王殿
漢門


其二
本殿
禪堂
東堂漢学堂
庫理
僧堂
ちゃや

梵相の奇古坐立の威儀儼然として生ける如く其妙手常人のをよ
ぶべからず瞻禮する者をして霊山一會未散の嘆あらしむ
乙亥夏五月七月十八日鏡の銘より
又天恩山羅漢寺の号を湯の依假の堂宇を造立して佛像を遷
せり同年八月黄檗高泉和尚偶東行あり遂て點眼の導師とせ
又先師鐵眼和尚をして開山祖とせり是其原を貴むの故なり又其時
黄檗山の未寺とする松雲禪師其頃既伽藍建立の企ありしも
時縁到らずして宝永七年庚寅一旦疾よ羅漢月を越て起を絶て
同年秋七月十日奄然として化せり時よ歳六十有二なり法臘四十二年

五百大阿羅漢尊號

第一
阿若憍陳如尊者　阿泥樓頭尊者　有賢無垢尊者
須跋陀羅尊者　迦留陀夷尊者　聞聲得果尊者
栴檀藏王尊者　施憧無垢尊者　憍梵般授尊者
因陀得慧尊者

第十一
迦那行那尊者　婆蘇槃豆尊者　法眼四樂尊者
優樓頻螺尊者　佛陀密多尊者　那提迦葉尊者
那延羅目尊者　佛陀難提尊者　末田底迦尊者
難陀多化尊者

第二十一
優波毱多尊者　僧迦耶舎尊者　教説常住尊者
商那和修尊者　達磨婆羅尊者　迦耶伽葉尊者
定果德業尊者　莊嚴無憂尊者　憶持因縁尊者
迦那提婆尊者

第三十一
破耶神通尊者　堅持三字尊者　阿冕樓默尊者
鳩摩羅多尊者　毒龍敢依尊者　同聲誓首尊者
毘羅昭子尊者　伐蘇密多尊者　闍提首那尊者
僧法耶舎尊者

第四十一
悲密世間尊者　獻花提記尊者　眼光定力尊者
伽耶舎那尊者　莎底苾蒭尊者　婆闍提婆尊者
解空無垢尊者　伏陀密多尊者　富那夜舎尊者
伽耶天眼尊者

第五十一
不著世間尊者　解空第一尊者　羅度無盡尊者
金剛破魔尊者　顯護世間尊者　無憂禪定尊者
無作慧善尊者　十劫慧善尊者　栴檀德香尊者
金山覺意尊者

第六十一
無葉宿盡尊者　摩訶利尊者　無量本行尊者
一念解空尊者　觀身無常尊者　千劫悲願尊者
瞿羅那含尊者　解空定空尊者　成就因緣尊者
堅通精進尊者

第七十一
薩陀波崙尊者　乾陀訶利尊者　解空自在尊者
摩訶注那尊者　見人飛騰尊者　不空不有尊者
周利槃特尊者　瞿沙比丘尊者　師子比丘尊者
修行不著尊者

第八十一
畢陵伽蹉尊者　摩利佛提尊者　三昧甘露尊者
解空無名尊者　七難尊者　金剛精進尊者
方便法藏尊者　觀行月輪尊者　阿那邠提尊者

第九十一
摩訶俱絺尊者　辟支轉智尊者　山項龍聚尊者
羅網思惟尊者　切賓覆藏尊者　神通億貝尊者
貝壽俱提尊者　法王菩提尊者　一衆　法藏永切尊者

第百一
除憂尊者　無憂自在尊者
妙懼尊者　金髻尊者
善注尊者　香象尊者

第百十一
雷德尊者　馬頭尊者　雷音尊者

第百二十一
馬勝尊者　金首尊者　敬首尊者
境界尊者　辨德尊者　屠提尊者
恰達尊者　法燈尊者　離垢尊者
明首尊者　衆首尊者

第百三十一
自淨尊者　天不動尊者　無勝尊者
調達尊者　善光尊者　休息尊者
寶幢尊者　善眼尊者　智積尊者

第百四十一
善慧尊者　慧積尊者　勇寶尊者
寶見尊者　寶勝尊者　慧持尊者
明網尊者　道仙尊者　帝網尊者

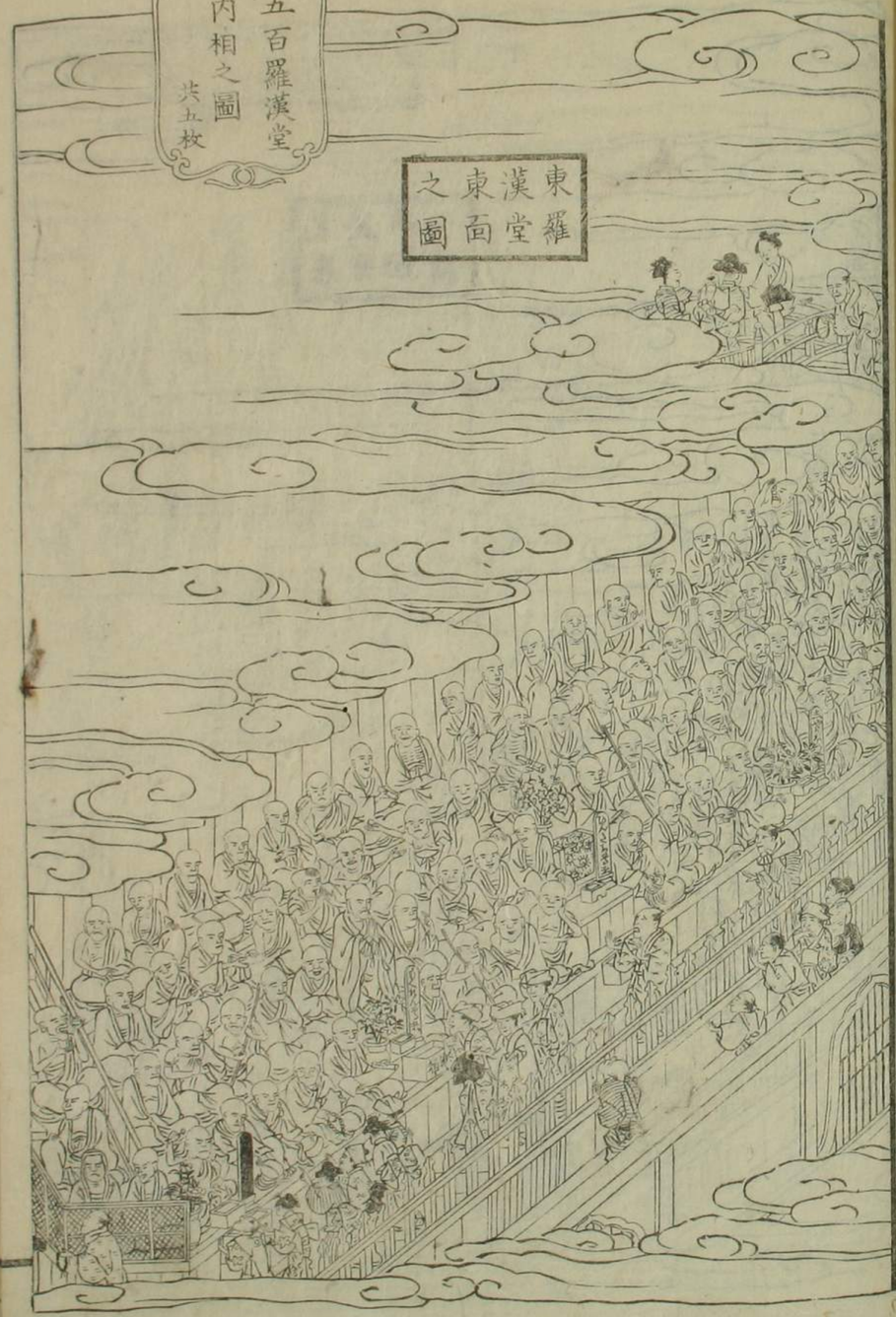
第百五十一
寶光尊者　善調尊者　奮迅尊者
修道尊者　大相尊者　善住尊者
持世尊者　光英尊者　權教尊者
善思尊者

第百六十一
法眼尊者　梵勝尊者　光曜尊者
直意尊者　摩帝尊者　慧寬尊者
無勝尊者　曇摩尊者　歡喜尊者
遊戲尊者

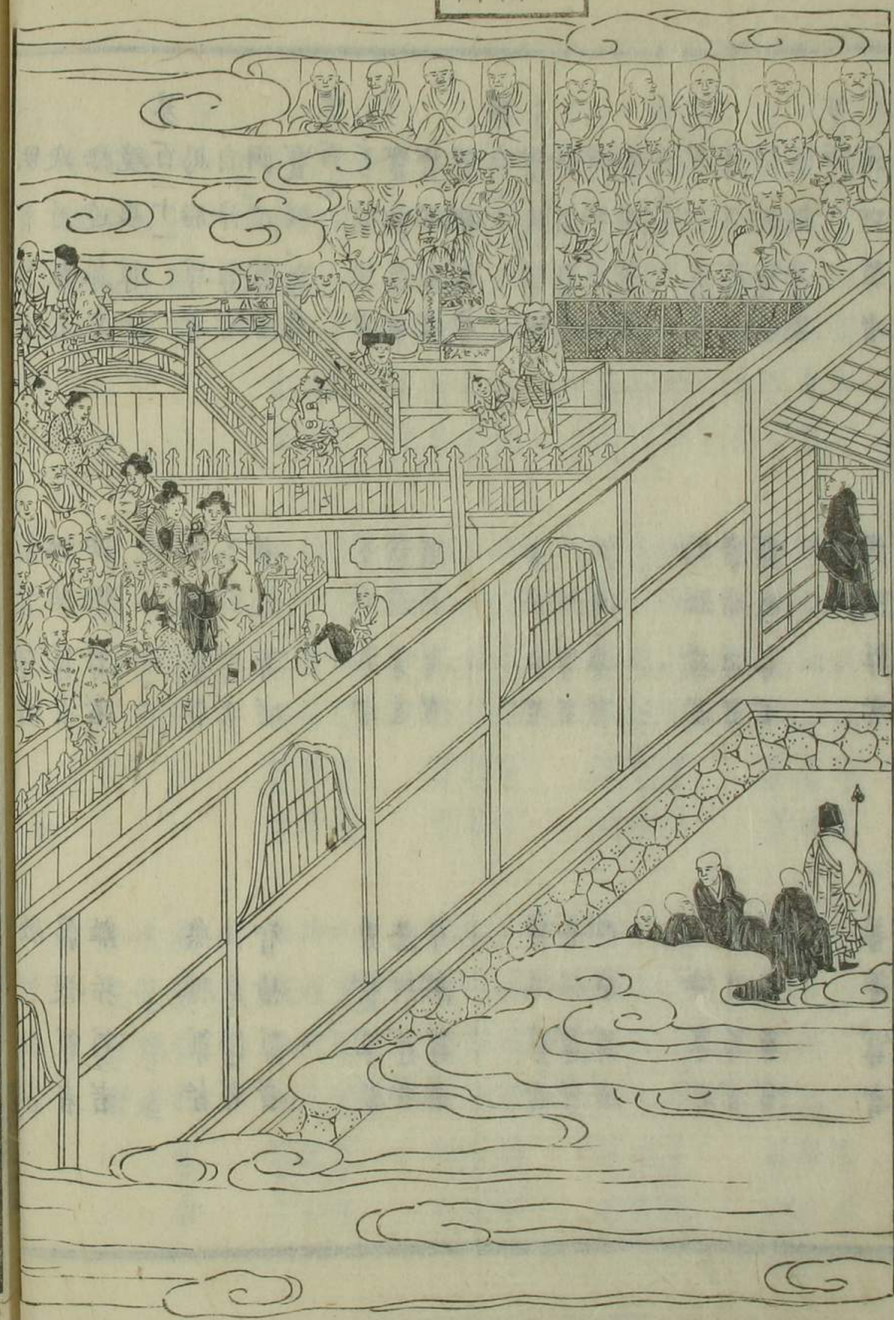
第百六十一
道世尊者　明照尊者　普等尊者

五百羅漢堂
内相之圖
共五枚

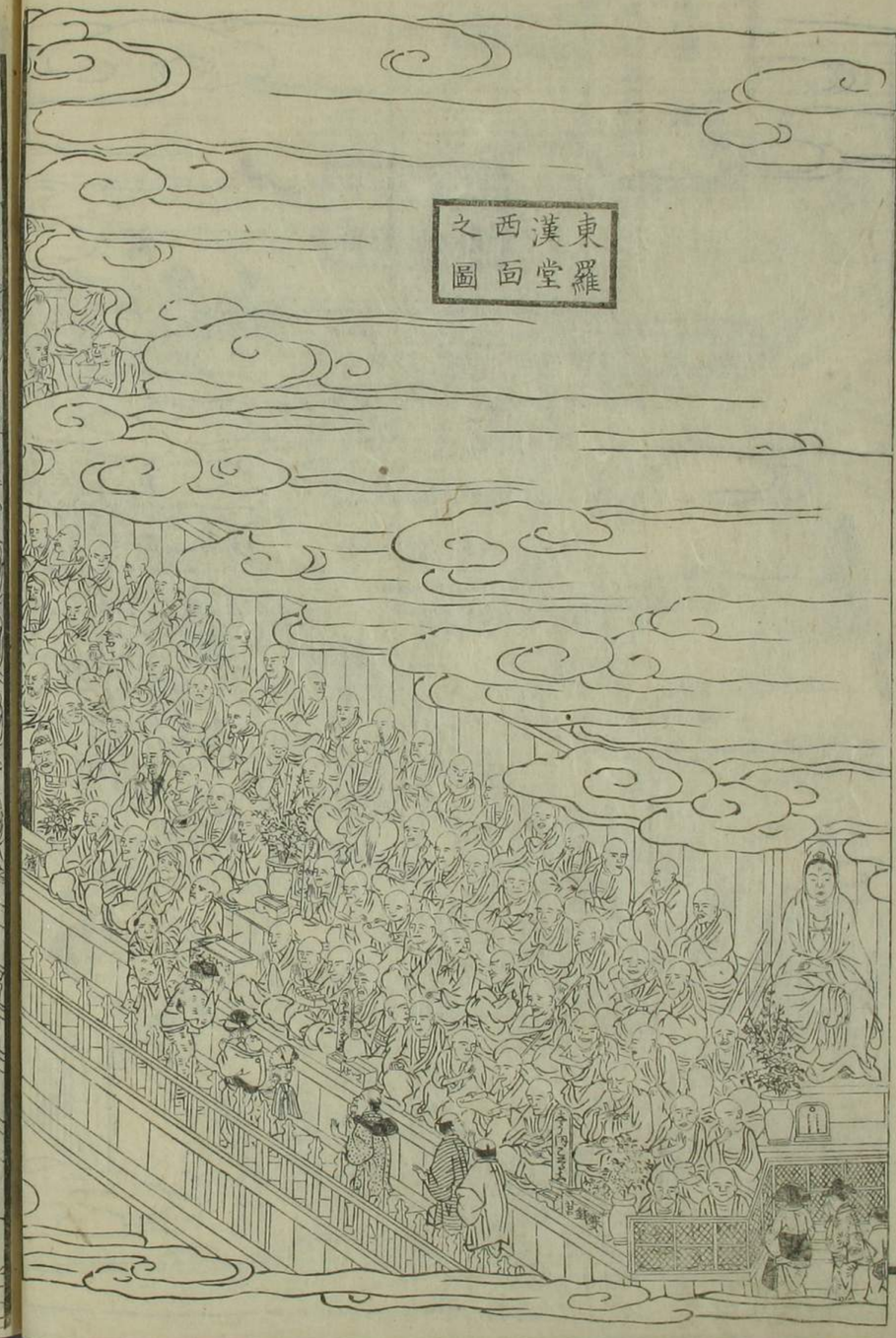
東羅漢堂東面之圖



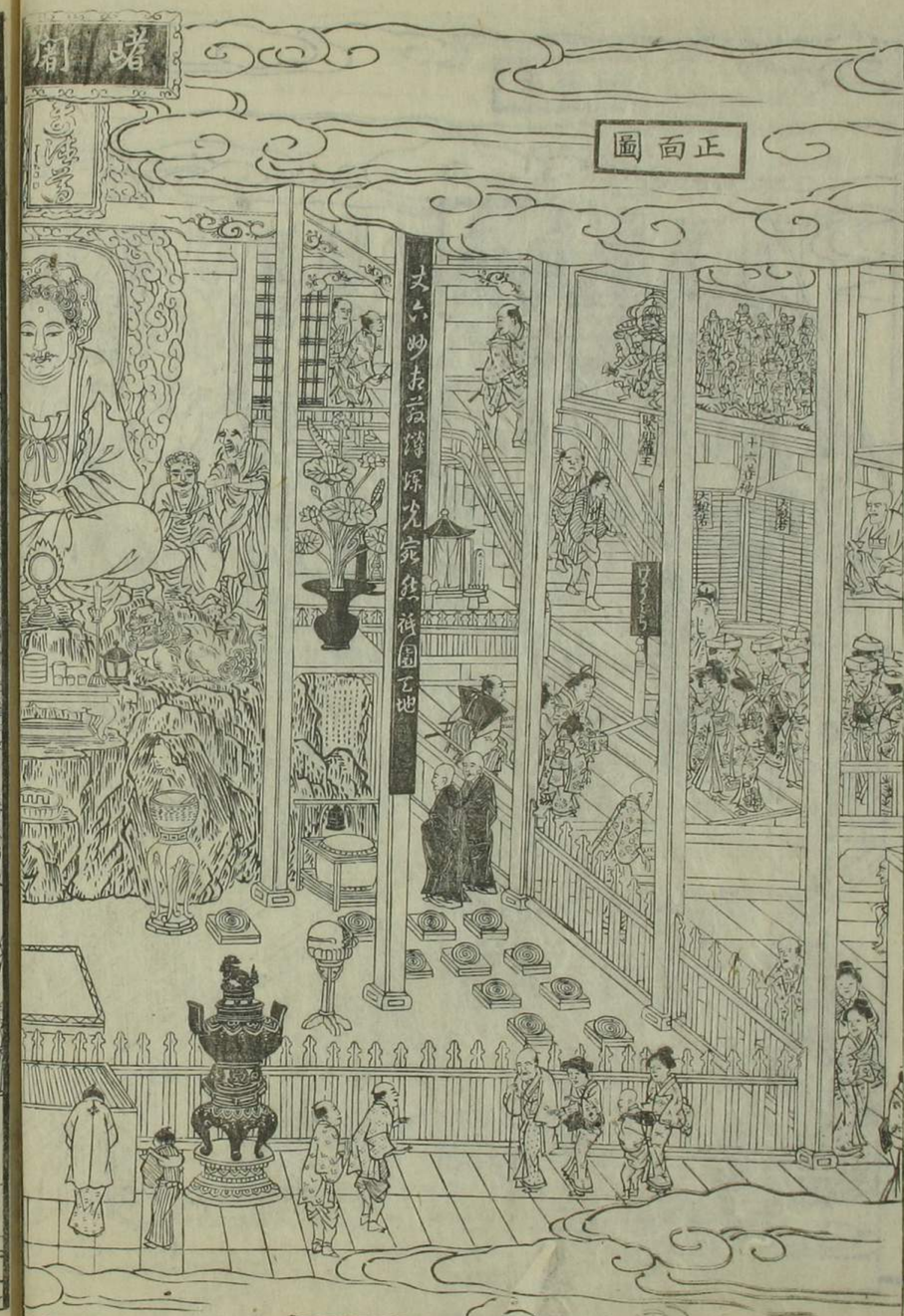
正面圖



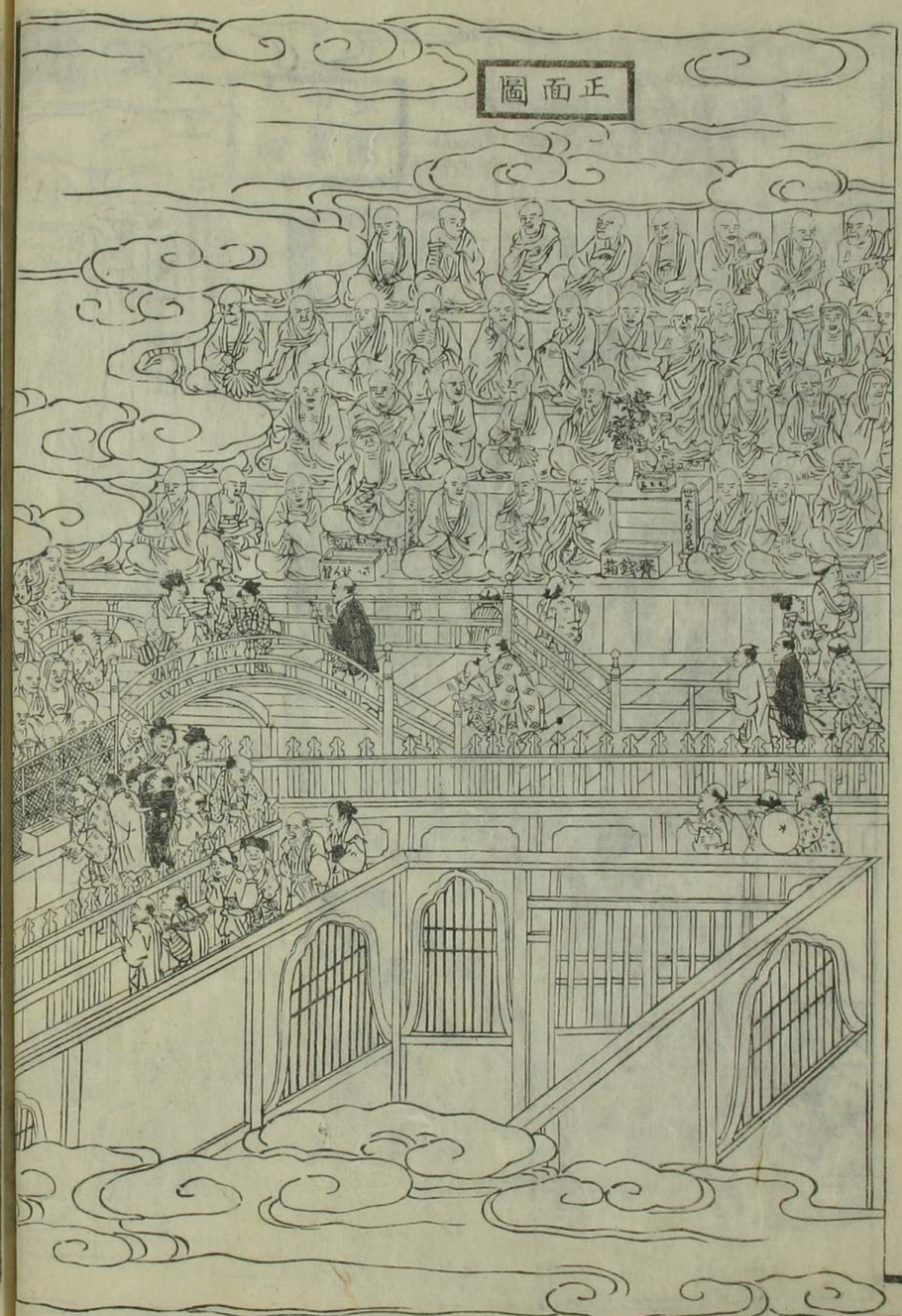
正面圖
賽錢箱


東漢西羅堂面之圖

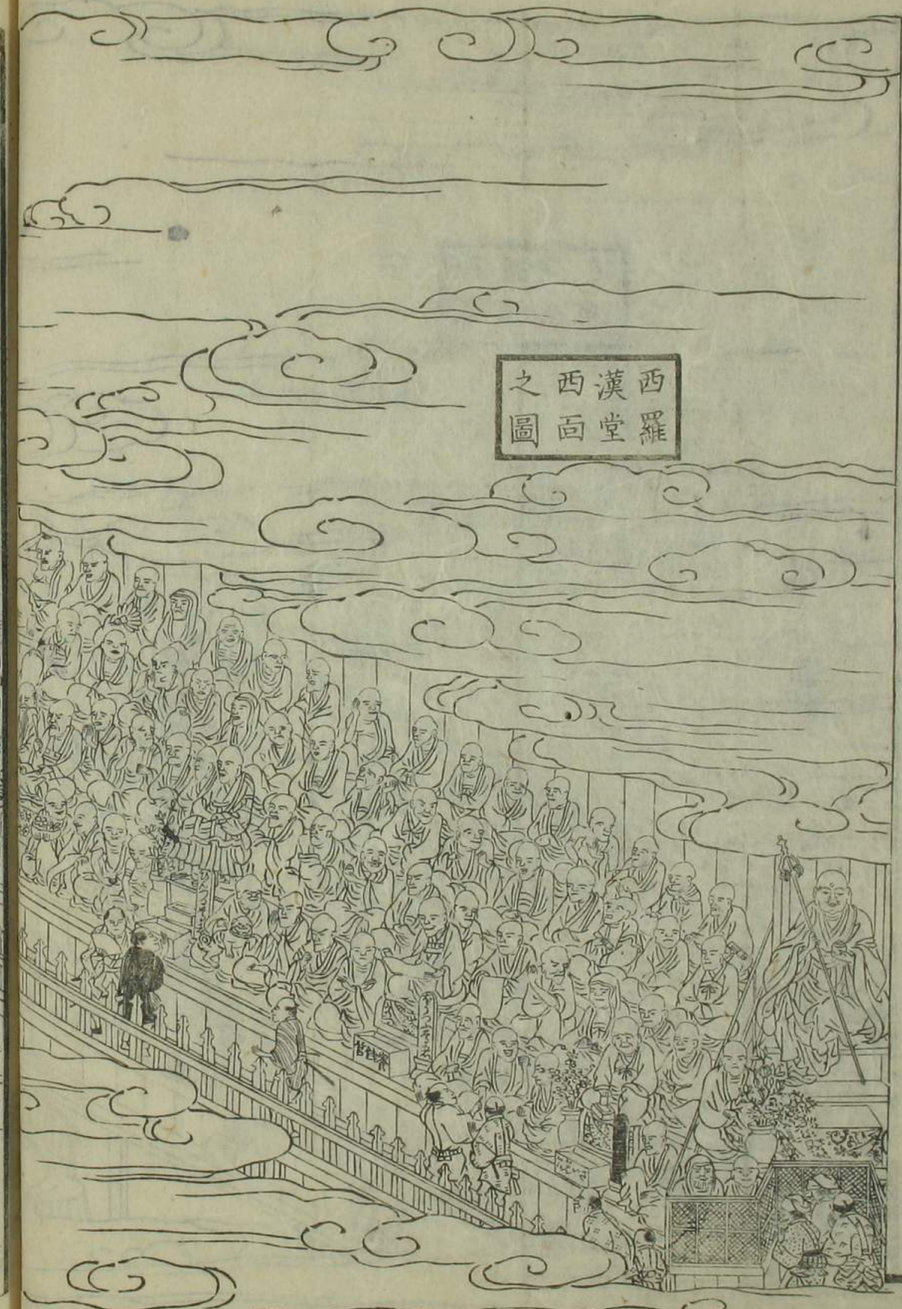
正面圖
正面中尊之圖


正面圖

西羅漢堂東面之圖


正面圖

正面圖


西羅漢堂西面之圖

慧作尊者　助歡尊者　難勝尊者
善德尊者　寶涯尊者　觀身尊者

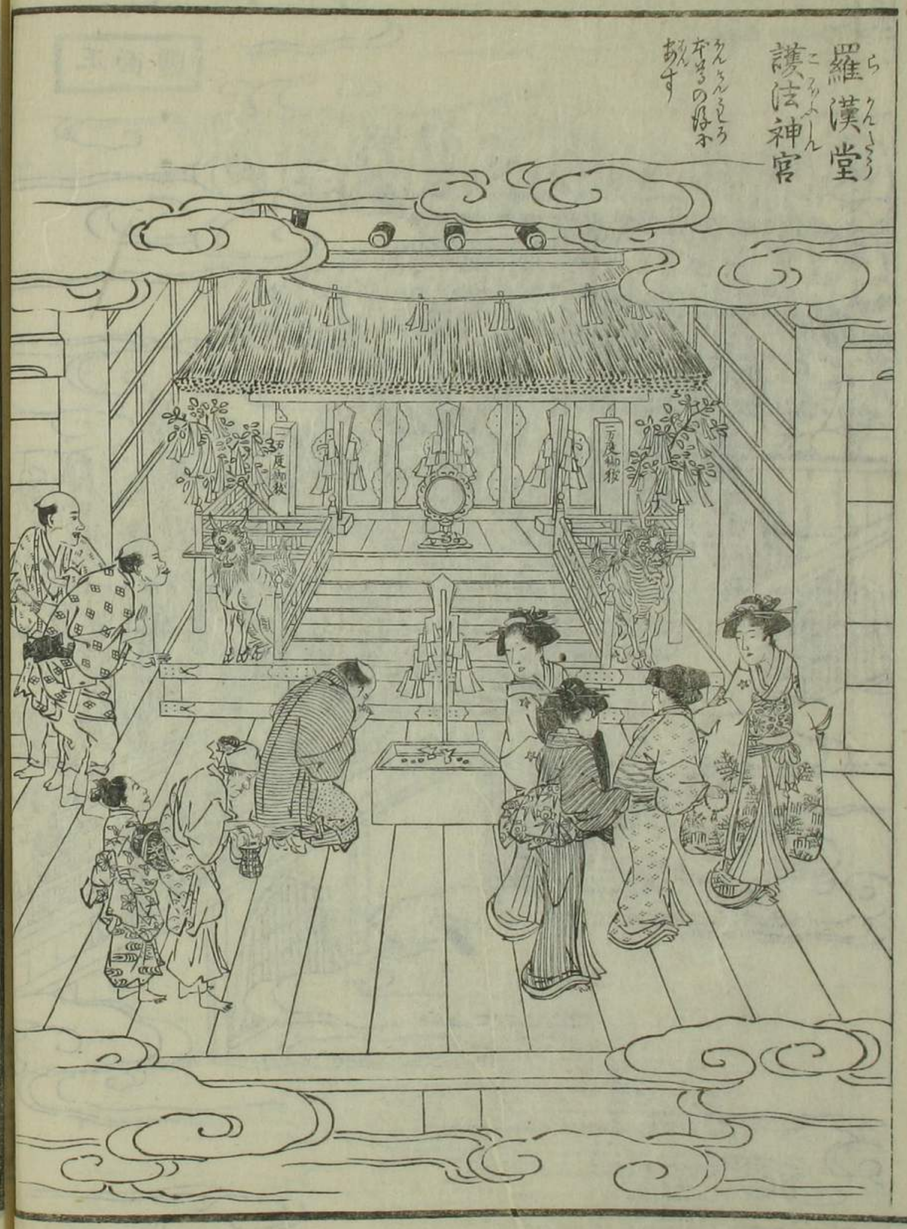
第百七十一
花王尊者　德首尊者　善宿尊者
善意尊者　喜見尊者　花光尊者
善見尊者　燮光尊者　德項尊者
妙臂尊者　善根尊者

第百八十一
龍盌尊者　弗沙尊者　德光尊者
散結尊者　淨正尊者　善觀尊者
大力尊者　電光尊者　寶伏尊者
善星尊者

第百九十一
羅旬尊者　慈地尊者　慶友尊者
世友尊者　滿宿尊者　闍陀尊者
月淨尊者　大天尊者　淨藏尊者
淨眼尊者

第二百一
波羅密尊者　俱那含尊者　三昧聲尊者
菩薩聲尊者　吉祥兄尊者　鉾多羅尊者
無邊身尊者　賢劫首尊者　金剛味尊者
來味尊者

第二百十一
婆私吒尊者　心平等尊者　不可比尊者
樂覆藏尊者　火焔身尊者　頗羅墮尊者



斷煩惱尊者　薄俱羅尊者　利婆多尊者

第二百二十一　護妙法尊者

寂勝意尊者　須彌燈尊者　沒特伽尊者

彌沙塞尊者　善圓滿尊者　波頭摩尊者

智慧燈尊者　楠檀藏尊者　迦葉留尊者

香焰幢尊者

第二百三十一

阿濕卑尊者　摩尼寶尊者　福德首尊者

利婆彌尊者　舍遮獨尊者　斷業尊者

歡喜智尊者　乾陀羅尊者　涉伽陀尊者

須彌望尊者

第二百四十一

持善法尊者　提婆具德尊者　水潮聲尊者

智慧海尊者　尼默伽尊者　不思議尊者

彌遮仙尊者　首正念尊者

淨善提尊者

第二百五十一

梵音天尊者　因地果尊者　覺性解尊者

精進山尊者　無量光尊者　不動意尊者

脩善業尊者　阿逸多尊者　孫陀羅尊者

聖峯慧尊者

第二百六十一

曼殊行尊者　阿利多尊者　法輪山尊者

衆和合尊者　消光焰尊者　天鼓聲尊者

如意輪尊者　魚比校尊者

多伽樓尊者

第二百七十一

利婆多尊者　普賢行尊者　持三昧尊者

威德聲尊者　普勝山尊者　名魚盡尊者

阿那悉尊者　辨財王尊者

行化圖尊者

第二百八十一

聲龍種尊者　誓南山尊者　冨伽耶尊者

行傳法尊者　香金手尊者　摩挲羅尊者

光普現尊者　慧依王尊者　降魔軍尊者

首飯光尊者

第二百九十一

持大醫尊者　藏律行尊者　德秦摩利尊者

服龍王尊者　闍夜多尊者　自在尊者

義法勝尊者　施婆羅尊者　闡提魔尊者

王住道尊者

第三百一

無垢行尊者　可波羅尊者　聲皈依尊者

禪定果尊者　不退法尊者　僧伽耶尊者

達磨眞尊者　持善法尊者　受勝果尊者

第三百十一

心勝修尊者　常歡喜尊者　威儀多尊者

會法藏尊者　讖洗腸尊者　德淨悟尊者

頭陀僧尊者　降伏魔尊者　阿僧伽尊者

無垢藏尊者

金冨樂尊者

第三百二十一
頓悟尊者　周陀婆尊者
燈導首尊者　耳露法尊者
須達那尊者　超法兩尊者

第三百三十一
堅固心尊者　聲響應尊者
塵劫空尊者　光明燈尊者
功德相尊者　悉生心尊者
白香象尊者

第三百四十一
識自生尊者　讚歎願尊者
聲引衆尊者　離淨語尊者
鬱多羅尊者　福業除尊者
大藥尊尊者

第三百五十一
勝解空尊者　修無德尊者
月蓋尊尊者　栴檀羅尊者
菴羅滿尊者　項生尊尊者
直福德尊者　喜見尊尊者

第三百六十一
須那刹尊者　戍大利尊者
提婆長尊者　衆德首尊者
蘇頻陀尊者　住世間尊者
瞿伽梨尊者　自在王尊者

第三百七十一
德妙法尊者　應赴供尊者
執寶炬尊者　阿氏多尊者
喜心定論尊者　薩和壇尊者
定拂羅尊者　羅餘習尊者
鳩舍尊者　羅尊者
喜無著尊者　法首尊者
韋藍王尊者　金剛藏尊者

日照明尊者　無垢藏尊者
無量明尊者　無除衆憂尊者
光明網尊者　善修行尊者
無憂眼尊者

第三百八十一
去蓋障尊者　除疑網尊者
淨除垢尊者　無垢德尊者
無盡慈尊者　坐清涼尊者
行願持尊者

第三百九十一
天眼尊尊者　和倫調尊者
寶蓋尊尊者　慈仁尊尊者
喜信靜尊者　那羅達尊者
金光慧尊者

第四百一
伏龍施尊者　編貝足尊者
蓮花淨尊者　思善識尊者
利亘羅尊者　無量光尊者
天音聲尊者

第四百十一
大威光尊者　金剛明尊者
寂上尊尊者　賢首尊尊者
最無比尊者　無垢稱尊者
持世界尊者

第四百二十一
定花至尊者　無邊身尊者
明世界尊者　最勝幢尊者
燭慢意尊者
月菩提尊者

棄惡法尊者　無礙行尊者　普莊嚴尊者
無盡慈尊者　常悲愍尊者　大塵障尊者
光焰明尊者

第四百三十一

智眼明尊者　堅固行尊者　澍雲雨尊者
不動羅尊者　普光明尊者　心觀淨尊者
那羅德尊者　師子尊尊者　法上尊尊者
精進辯尊者

第四百四十一

樂說果尊者　觀無邊尊者　師子翻尊者
破邪見尊者　無憂德尊者　行無邊尊者
慧金剛尊者　義成就尊者　善住義尊者
信證尊尊者

第四百五十一

行敬端尊者　德普洽尊者　師子作尊者
行忍慈尊者　無相空尊者　勇猜進尊者
勝清淨尊者　有性空尊者　淨那羅尊者
法自在尊者

第四百六十一

師子頰尊者　大賢光尊者　摩訶羅尊者
音調敏尊者　師子臆尊者　壞魔軍尊者
分別身尊者　淨解脫尊者　質直行尊者
智仁慈尊者

第四百七十一

具足儀尊者　如意雜尊者　大熾妙尊者
却賓那尊者　普焰光尊者　高遠行尊者

得佛智尊者　寂靜行尊者　恰真常尊者
破宛賊尊者

第四百八十一

滅惡趣尊者　性海通尊者　法通尊者
慾不息尊者　投衆心尊者　導大衆尊者
常隱行尊者　菩薩慈尊者　拔衆苦尊者
尋聲應尊者

第四百九十一

數却定尊者　法水尊者　得定通尊者
慧廣增尊者　六根盡尊者　拔度羅尊者
思薩埵尊者　注茶迦尊者　鉢利羅尊者
願事衆尊者

以上第五百竟

十大第子

大迦葉尊者　舍利弗尊者　目揵連尊者
阿那律尊者　須菩提尊者　迦旃延尊者
阿難陀尊者　富樓那尊者
優波離尊者　羅睺羅尊者

十六門羅漢

賓度羅跋囉墮闍尊者　迦諾迦伐蹉尊者
迦諾迦跋黎墮闍尊者　蘇頻陀尊者
諾矩羅尊者　跋陀羅尊者　迦理迦尊者
代闍羅弗多羅尊者　戍博迦尊者　半諾迦尊者
羅怙羅尊者　那伽犀那尊者　因揭陀尊者
伐那婆勢尊者　阿氏多尊者　注茶半託迦尊者

以上十六竟

三帀堂　絡門の内左の方天王殿より観音奥院観音をゝひ泥陀羅玉
観音の霊験を模擬して百軀の観音を上絞い西國中絞い坂東下絞い秩父以上百番の札所
當寺中興象先和尚立支を凝しを上の法式い右絞三帀より左絞帀を最勝第一とすることゝ
とゝて寛保元年辛酉冬を造立せられたり右絞三帀より左絞帀を最勝第一とすることゝ
ものを得たり　俗同巣螺堂と唱く後世三帀堂を造の規範とゝ其機巧称するに堪たり

額　同堂の二階の軒より掲る當寺象先和尚の筆なり

額　向拜の内に掲る當寺雪村和尚の筆なり

右絞三帀堂

天王殿

日所右より並ぶ内より仰山寺の布袋和尚護法
関帝を偉駄天昆沙門潅長寿の三天なり
より堅那羅王の木像を安置せり各松雲禅師
の作なり享保十六年の造立なり

額　天王殿の軒に掲る當寺笠別和尚の筆なり

天恩山

禁石　羅漢堂の上にあり

刹竿篠　日所左右より並ぶ享保十三年三月より建初るなり

禪堂　日所右の方の後にあり

額　はし堂の軒より掲る黄檗木庵

遊佛場

摂待所　日所にあり

額　軒より掲る細井九皐の筆なり

藤棚　仰嘆掛の傍にあり元文四年己未是を栽しめたりと

鐘楼　庫裡の前にあり元禄九年牧野備後侯成貞の令室高祥院殿これを建
立せられる後い弘福寺の鐵牛和尚撰する所なり

玄関

天恩山五百大阿羅漢禪寺鐘銘並引

武蔵國天恩山五百大阿羅漢寺者元孫年中沙門
松雲創建也辛未春松雲從京師來謂老僧云第子福
自幼好彫像今發志願欲刻五百應真爲衆生之福
田然福菲緣微仰冀和尚慈悲運大方便俯賜冥庇
老僧嘆曰此願甚難得成與不成必不在福緣多少
全在願心實與不實耳厥志誠實則福緣在衆生莫
慮之矣老僧應爲子發軫也遂捨衣資彫第一尊又
勸諭瑞聖極法筭彫一尊至癸酉孟春成五十尊請
老僧默眼供養有震動飄雪之瑞此日經始丈六拈
華之像甲戌三月國母桂昌院大夫人得賜金彫菅
十尊也自爾展轉勸化三五年之間其願殆乎成實
不可思議哉功既聞上乙亥秋七月遂至賜地八月
黄檗高泉和尚偶在官府請點眼供養丈六拈華之
像丙子夏四月就新開大阿羅漢寺啓建旬日之法
會項禮三千之聖號普請四衆大伸供養亦請老
拈香凡百官士庶長幼皂白皆趨赴勝會而隨喜之僧
豈非希世之盛事乎哉松雲者乃予法孫鐵眼和尚
之從旦爲人淳朴寛量大度百支競來絶無疲倦之
色若不如是馬得全這牧野氏從四位下備前大守
成貞公室氏法諱高祥院殿靈巖慈大姉銘曰
銅鐘成之日請老僧始撞之殿靈巧銘曰

欲鑄蒲牢鳧氏丕屯
大千是口山河倒吞

一音纔動警覺曉昏　修洪規範解塵勞煩
観音大士如入此門　回通無礙卻慈聞根
幽明莫滯功德難論　由聲生悟直證本源
存没俱利消融百寃　國平民豢斯子斯孫
雲禪功烈函盍乾坤

元禄九年丙子四月穀旦　牛頭鎮牛機謹誌

掾樹

境内よりゝ元文五年庚申掾樹九十餘株を植るとゝろ是を桃の古手と元文紀元丙辰當寺の境外南の方のこゝろよこれを

閑山堂

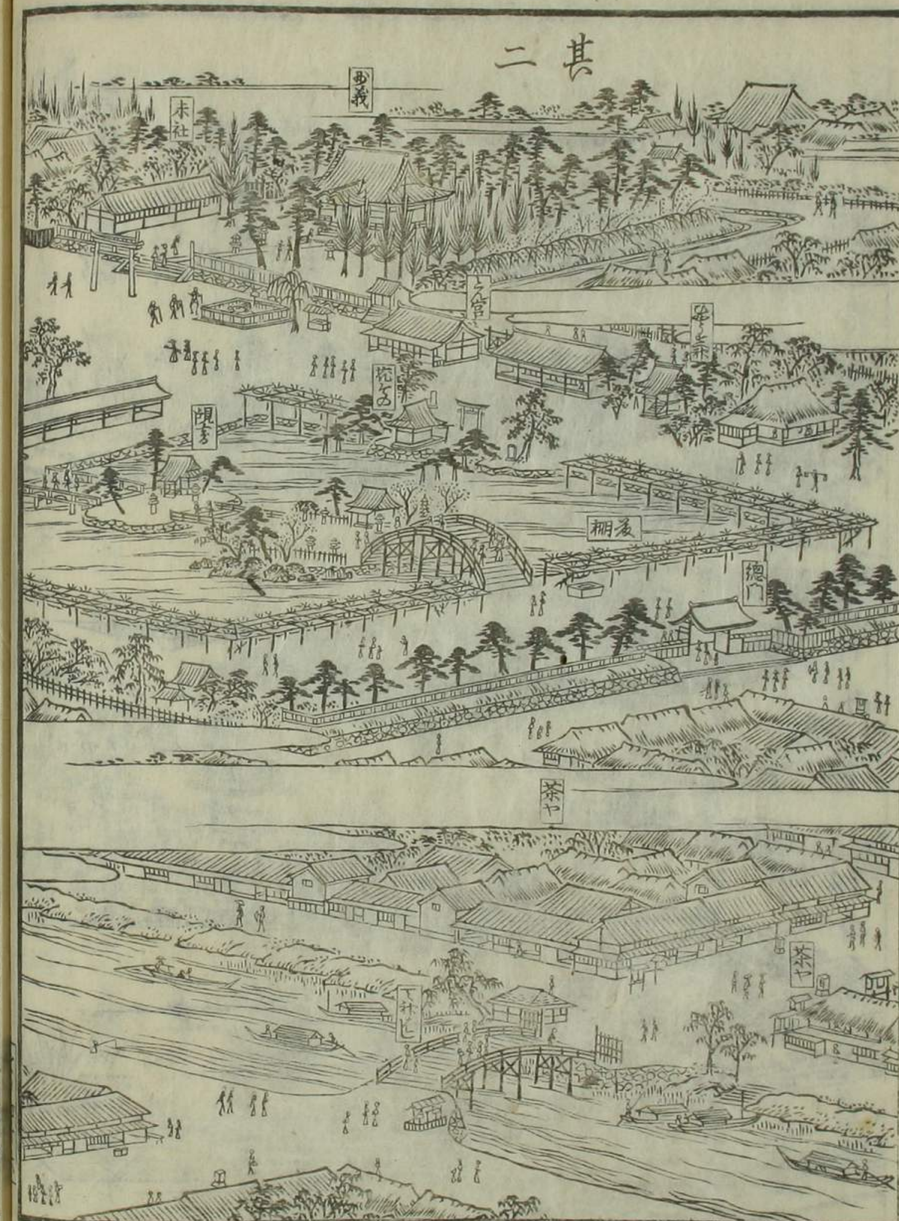
方丈の東よりゝ少北い京の保十八年の頃鐵眼禪師當寺を退玄の後隱栖の地すゝとゝろ鐵眼師をこゝに象先和尚ゝ松雲老人ホの像を置ゝ三代堂とも唱ゝ禪師の行狀列祖の祥瑞等の禪文に詳ゝ

中興象先和尚ゝ黄檗四世の法孫ゝて鐵眼禪師の法脈たり當時松雲禪師化寂の後ゝ假堂も破壞し佛像も雨露の侵されたりしを深く患ゝ正德三年癸巳本師鐵眼和尚の命を受始て大江戸ゝ来り當寺ゝ住し享保二年丁酉正月ゝ十有餘年の間心肝を碎き寒暑風雪の厭ゝ

日々に家々の街市よりて行乞し既ゝて勸進の功成募を受る所の一握一投の米錢を積て甚料に況同十年乙巳ゝ至り今存する所の佛殿僧房悉く建立成就せり依同十四年巳酉二月閑堂惣供養の大法會を行ひゝ盂蘭盆の大施餓鬼會を閑く當寺閑山ゝ象先和尚たるゝ甚だ顯益たりとゝも故ゝて鐵眼禪師を開山とし自の師寶刹和尚を二代とし又松雲禪師創業の大功あるを以一代開基と稱し自三代の席ゝ坐せるゝ隱元禪師歸化の後ゝ持齊一食うして深く貧者をのゝれを佛像經卷と言た袈裟の外ゝ聊も乖ゝ貯ゝる事なし日々の勤行ゝ般若經分五卷と花嚴經行願品百五十卷とを讀誦し觀音の尊号を書寫せるゝ甚敎積て山の如し又大般若經一部六百卷一字百禮ゝて是を書寫し甚先出家得道の時拂塵紙寺ゝ入て法道成

就の誓願を發し三年の間双手の指皮切八十巻の花嚴經を
血書せ其後當寺殿堂の嘗大手成といへども宗門の坐禪
夏冬の結制行れさるを闕典なりとて依後住栄朝所命
を受て文二年丁巳の冬洞渟両首座を立て五千指の僧を
集め江湖の大會を行ふ班時・大樹ていとせたまひ
坐禪の行相成ていとを則江湖の僧財として米五百俵
をたまふ支ふるの後般若の全文を真讀して御れを我す
竟て寛延三年巳丑六月五日七十三歳にして涅槃の大定
に入貴綫香花を捧ひて棄ること三日三夜奏暑甚
しといへども遺骸卵変る色なく茶毗して全身舎利となる
其舌根は宝塔に収て今於中興堂に在り
當寺は黄檗流江戸最大の禪園にして佛閣の巍々たるこ
日域にもまれなり元禄年間寺領山号等を賜り享保九

別當
本社
神馬
手水
紅梅神
老松宮
茶や
茶や


二其
曲殿
本社
上宮
梅名
閑
棚後
御門
茶や
茶や
茶や

年甲辰十二月　大樹始て當寺へのぼられ其後同十五年ニ
月晩課　御聽聞翌年十二月方丈より於隆坐住持象先是を
勤む同十九年甲寅三千畝の地紙漉ゆひ同二十年乙卯境
内より新殿を營せられ夫より後此地より　御放鷹のあるを
ゆるゝとて當寺へ立寄せらるゝ月毎の朔日より
觀音懺法を修行し十六日より大般若經轉讀あり七月
より毎れい毎夕施餓鬼を修し十六日廿一日廿五日晦日ハ殊より
道俗羅漢を象先師より已来當寺の住持ハ風雨寒暑
を厭ハすに大江戸の市中を行乞するをもつて勤行
とす

宰府天満宮　亀戸村より坂より亀戸天満宮とも唱ハ
別當を天原山東安樂寺聖廟院と号ス司務兼宮司
大鳥居氏奉祀せり　當社別あい押宮御連歌の列より加へられ毎年
晋月十日當中の歌より御連歌百韻奥行ス

所ハ當社の南竪川通北松代町四丁目にあり　祭礼の時神輿を
此処より迎ひ奉る

本社　祭神　天満大自在天神　相殿　天穂日命　土師宿禰　三座

紅梅殿　本社の前右の方にあり紅前太宰府より載せ所の赤梅の雑木なり

回廊　瑞門　四廊あり四面の門を出ル右より隨身の木像を置

御嶽社　本社の右にあり藏山の座主法性坊なる意僧正の靈を勸請

老松殿　日光の方にあり一夜にして栽し植へり

頓宮明神　日吉より昔菅神流罪の時頓宮へ立ち寄り給ふ

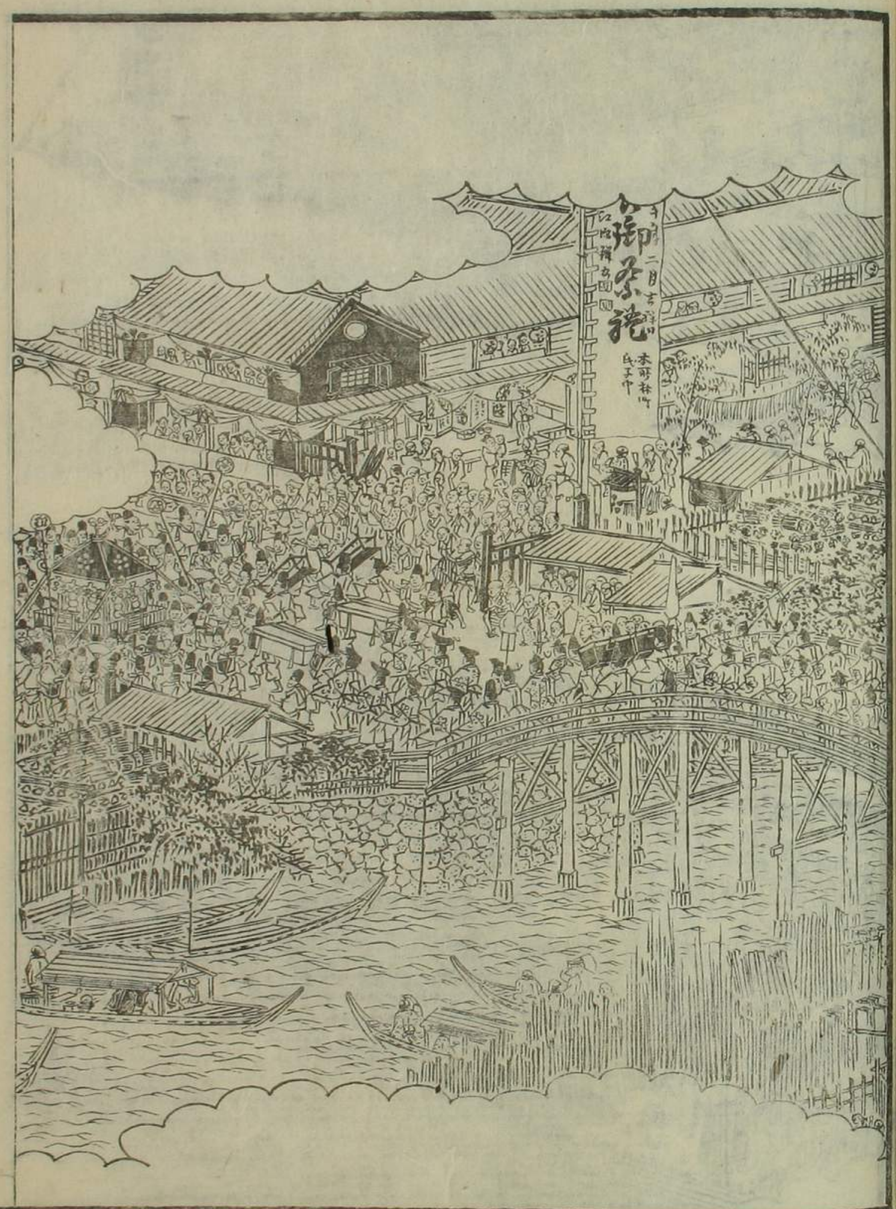
花園社　本社の北の右

裏白連歌會　四月二日連歌あり

菜種神事　二月廿五日菅神の御忌より二十四日迄毎夜連歌
奥行二十五日午時より神前よりひて社人等梅の

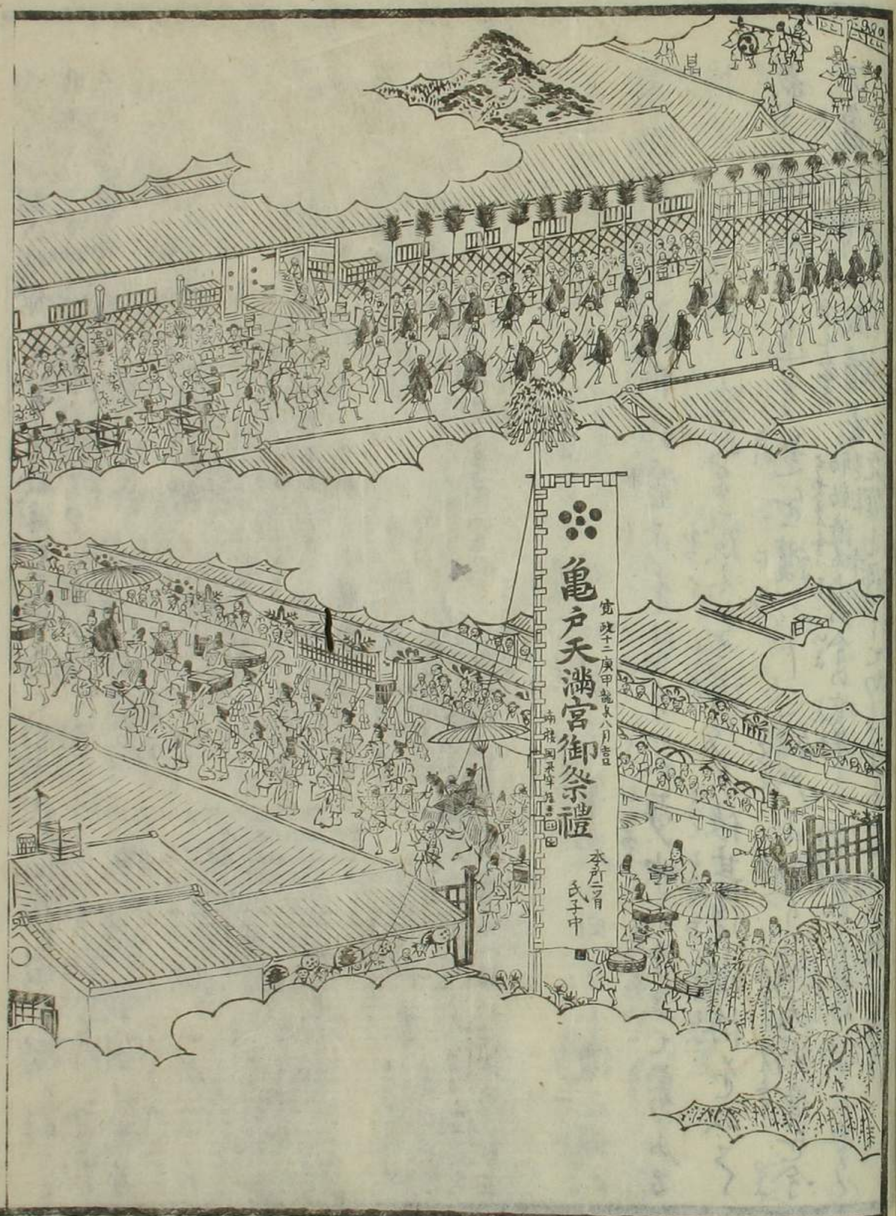
五之集
元禄十四年
二月二十五日
聖廟八百齡
御年忌於
亀戸御社詩
歌連俳会興
行一座
梅松
二月二十九日
菜種神事

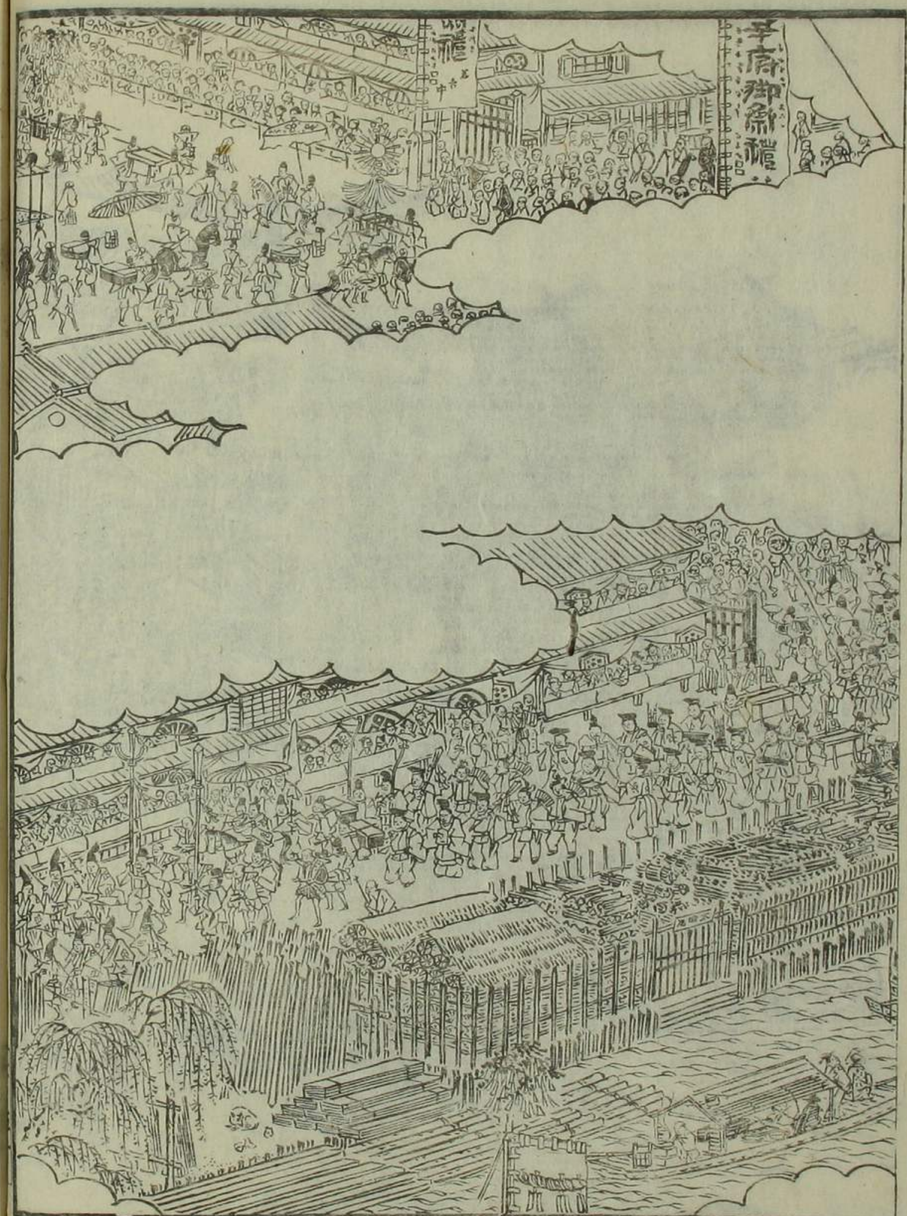
あかひる
枝も
八百不
其角



亀戸天満宮祭礼
神輿渡御行列之図

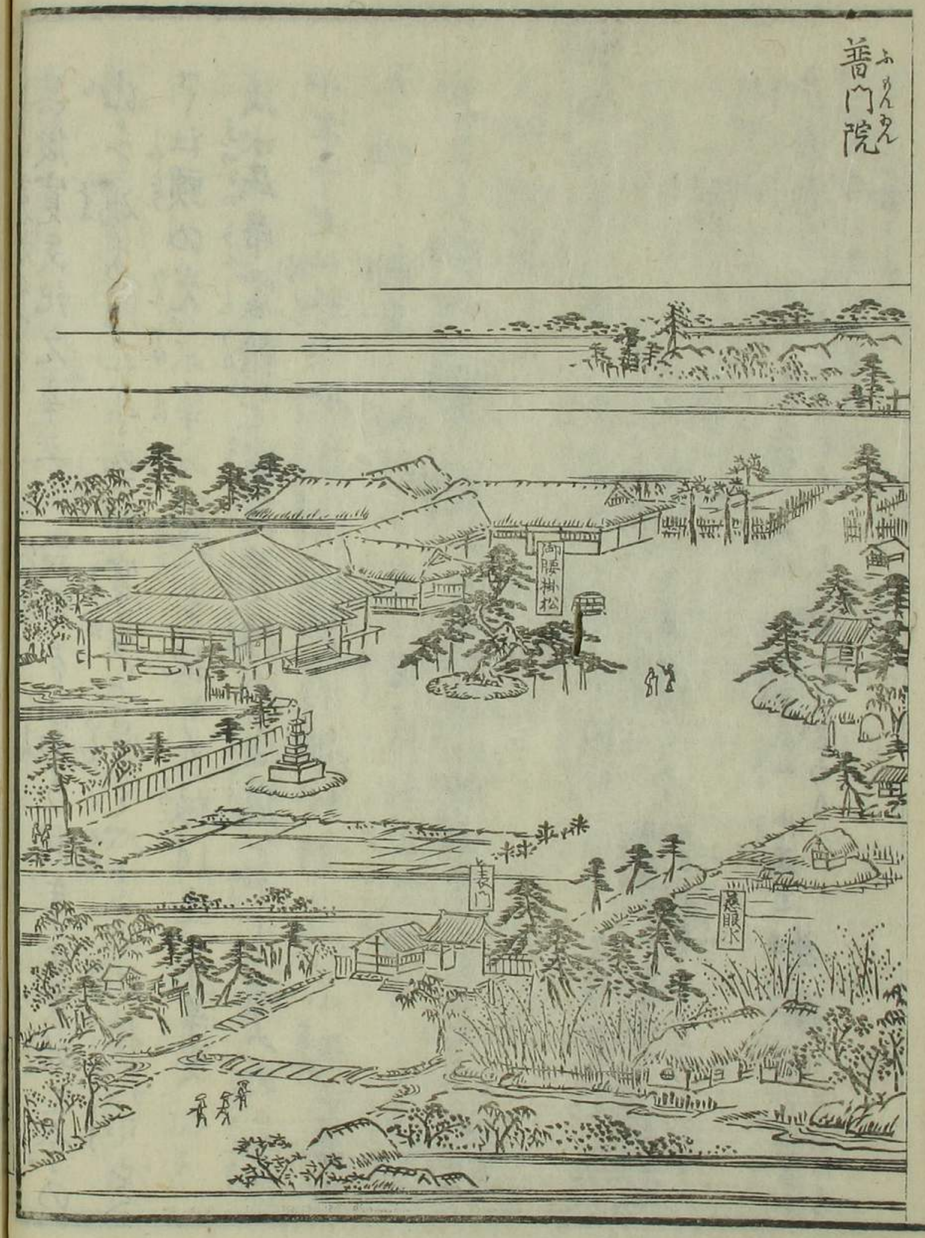
毎歳八月廿四日亦は代町の山旗ひらへ神幸いのりて行粧賑まるり
産子の町も練物を出し都鄙のまち繰群集て
けさの一盛りなり


亀戸天満宮御祭禮



枝を折梅花の神孫二十八首を披講せり又夜に入て宮司仕人松明を燈し榊を持て幣帛を
神殿より本社に至る心字の池をめぐり楼を渡て幣門より〻社頭に松明を積て篝を焚
ちの祭り〻宰府の形を　雷神祭　四月朔日より至
うせ所うせうしと　神御衣　四月毎日と九月
なをまの　若紙　六月二十五日　毎日の夜御衣を
にる　祇　七夕和歌連歌會　七日に
祭禮　開年八月二十四日より　後水尾帝の勅許よりて神輿供奉の行粧を宰府の例式に
准じて壮観なり　初当大鳥居氏東車と生子の町の間張所へ神幸の日扈輿
つきを　翌二十五日より五日まで神輿渡御　練物車楽等を出して甚
月見連歌會　九月十三日より　追儺神事　火燒神事　十月廿五日より　年祝神事　十二月晦日
より　追儺神事　節分の夜猩々　当社の祭式いとて宰府の例に准ふ　一社の法式あり　古
雅なる作法異なる
社記云用祖信祐　菅原善外　始祖前大宰府よりし頃正保三
年丙戌一夜菅神の霊示を蒙る　其夢中　十立て梅
梅の種枝を　とる　發句を得たり　依其後赤梅を以て
新に神像を造り是を護りて江戸より彼天満宮を今
の亀戸村に勧請せ　初勧請の地今の宮居より東南の方耕田の中にあり
今に菅神の叢祠あり

其後寛文紀元辛丑　台命を蒙り同年壬寅始て今の
地を得の同三年癸卯宮居を営む心字の池楼門赤
て社頭の光景宰府の体を模せり依日十一年辛亥
後水尾帝震翰を灑ぎ菅神の号を下しあり又元禄
十年丁丑一社の神事法式等宰府本宮の例に准ぶ
む　同帝の勅許を蒙る爾来神威顕赫として霊験眼
著なり　当社至寶と称するのい菅神佩せるところの天図
の寶劔なり
福聚山普門院　善應寺と号す　同所一丁ばかり東の方にあり
其云宗の開て今大日如来を本尊とす
浮て寺産若干を湯に永く
番燭の料に充　堂前にあり昔　大樹　所腰を　慈眼水　日所
所腰懸松　所放鷹の初　慶安二年己丑住持沙門栄賢情
給の誉あるとて
又用る番門慈眼の意を
とりて名とせ



身代觀世音菩薩 當寺ハ安慈大師の傳教大師の俤よりて
縁起云大永二年壬丑千葉氏の末裔 自胤 兼胤の孫 季胤の三男より 三胯の城中より
一宇の梵刹を開創し此霊像を安置し長賢上人をして始祖
たらしむ 今の普門院これなり 三胯とは隅田川荒川荒川の落合ひ三俣
なり 昔千葉氏在城の地なり 其比普門院の鐘と称し
沈没し其鐘を若つぐ 撞木倒と呼ひ元和二年域主住持 真法印
地を移して寺院を今の亀戸の邑に移し 新撞の縁より 撞一口隅田川より
既当寺縁起 詳なり
善次盛光 後薙髪して 慧と号せり 虚名の罪にして 誘に伏せ時日頃念する
不の此霊像の加護によて其白刃殿に壊し危難を逃れたり
此霊験あらたなり 自胤三胯の城主より当寺を
創し長賢上人を導師として 旦開祖 又天文三年国中大に疫疾流行
し死に至る者少なからさりしと此霊像を念する輩の悉く病
革愈し病者と庫を等しくとも敵て深
延の患なし 其後住持長栄上人睡眠の中一老翁の来るあり
告て曰 汝大士なり あくの人に代り疫病を受故に病苦

亀戸邑
道祖神祭

毎歳正月十四日
よりこれを興行せ
此地の童子多く
あつまりて菱埴
造りよりたる
いきほひ船よりの彩の
幣帛を建松竹杯
をも組飾り其中
夫より紙舟とゝ
を流くる撒を建
たるを弄撥す音よ
唄ひ連て此辺を
持歩行あり其夜
童子集會して祝ひ
戯るゝを
恒例とせ

一身に逼まり上人願い我法一千座を修して予ら救世の加彼
力とのたへ〳〵と夢覚て後益救重を加く幸そを祈り奉る
佛躰より汗ながして蓮臺より法る感涙肝に命〳〵支より昼夜不
退に一千座の観音供を修しられい四中頓に疫疾の患ひを
逐ひ去ることを故に世俗身代現世音と唱へまるとなり

卧龍梅　同所清香庵にあり俗間梅屋敷と稱し其花一品
にして重瓣絜白なり薫香至て深く形狀宛も龍の蟠卧
如し　園中四方数十丈に周て拯高〳〵と枝茂り羊い
地中に入地中を出て枝莖を生し何を幹とも分きて定り
難し屈曲ありて自其勢を彰と仍卧龍の号あり
とり梅譜に所梅梅龍杯いふるよしあるなり

梅譜曰　会都城二十里有卧梅偃蹇十餘丈相傳唐物也　謂之梅竜好事者載酒遊之云云

神明宮　同所にあり宮居い一堆の塚上にあり相傳ふ上古此地い
一の小嶋にして其繞りい海面なりしと其頃渡海の船風浪の
難に逢ひて漂ひ勢両皇太神宮の加護により命を全ふせし
報賽のため此地に山神を勧請なしまつり宮居を営し
といふ　往古此地船着場にて海に入と唱へしをもて今も船を失ひし者の
の傍にありて神木とす　網干摸と云ハ社　昔山辺ひとはくきの海なりし頃漁者の網を干たる故に
穿ち土中より漁網に具せる不の礎と名つくるなり依海辺なりしを詳とする
ふ古人云ひしかりけ摸の一名を大平摸と号く社地を大平摸と稱ちり

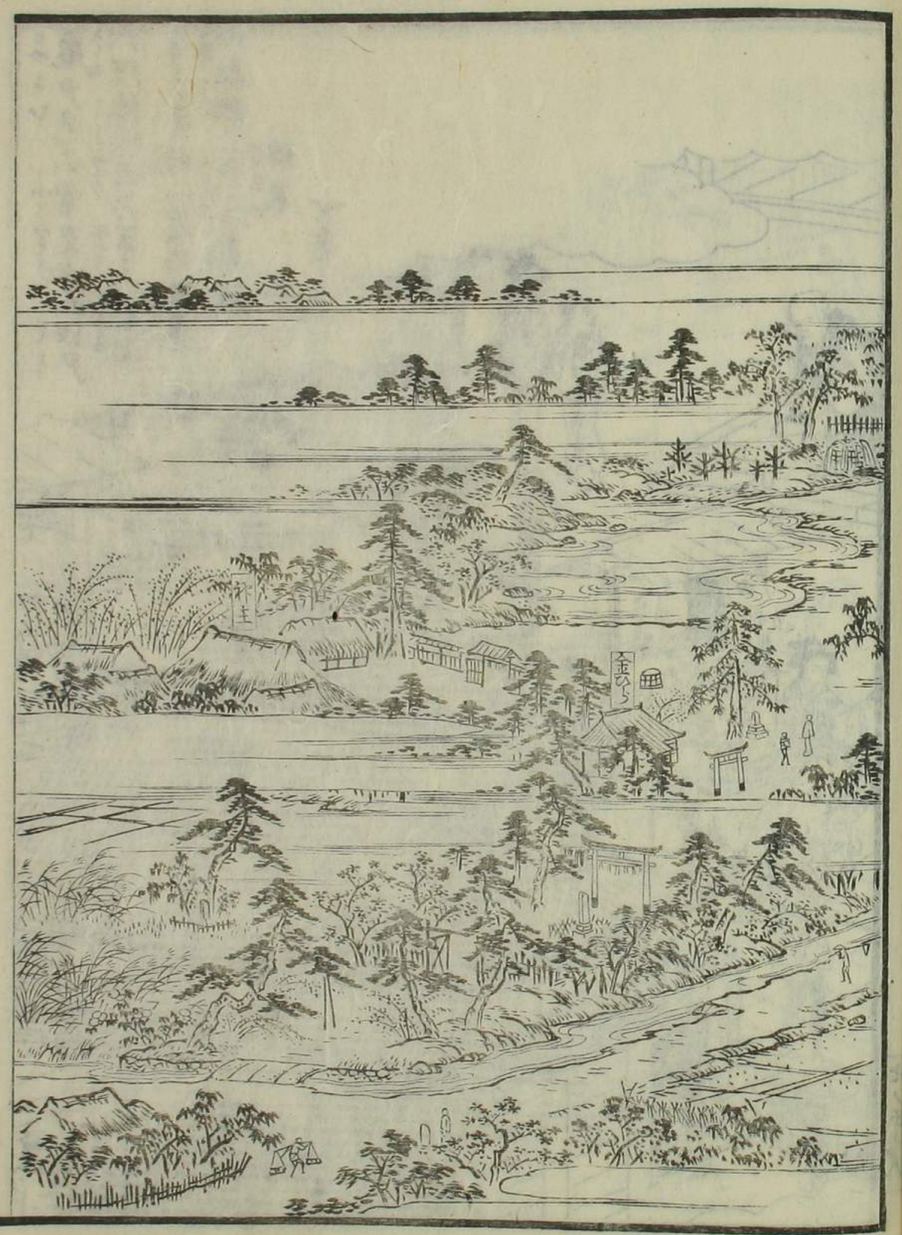
明王山東覚寺　同所南の方にあり真言宗にして寺嶋の蓮
義寺に属せ本尊い弥陀観音勢至の三そなり　當寺山号禄
四年辛卯草創せる所の寺院にして雨山を玄賞法印と号せ
僧都の彫像にして相列大山寺の本尊とは殊
不動堂　當寺に安置せ良弁僧都の彫像にして相列大山寺の本尊とは殊
縁起曰當寺往古草庵なりし頃雨山玄賞法印ここに住ちらる拙ろ一宇禄四年
辛卯或時貢茭の優婆塞来りて投宿を乞ひ法下許諾し其夜は床に安卧
しぬ翌朝法下疾起て仏前に入ひとすると傍に一人の壮夫と〳〵ゐる
法下怪み其名を問とも壮夫い聲唖の如くさして答る不るし其時投

梅屋敷

白雲の
龍を
ぼ
む
や
梅の
花
嵐雪

如月の花盛
よい袋色
積の雪紙
敷き餘香い
芳こしとして四方よ
顔まる花の
後実をむすよ
を採収て日よ
乾し陰漬
とて常よこれ
を賈ふ味ひ
殊よ丑美
るれいくよ
称賞する人
うれらを
はて
れ土産
とを

前の優婆塞これをけ立ちて〻〻〻〻と云て即笑の形よりひさまづきて
不動〻〻と云て即笑の形よりひさまづきて漸く念じて彼仕丈泉林の自由なる
ものをかえりみて語を發せるを怪しく大なる故なり〻〻四盗賊なるものを
其罪を謝して和く良久しくひるがへりて紙法印られを奇とし其なるの由縁
を問優婆塞こたへ云く〻〻良年伝都相列大山を元基〻〻より須我始祖其樵夫の
子安村より伝せしを其時伝を伝へ〻〻
玉〻〻むこれ相列大山寺の真基なり其後伝を隨修の労を謝して此本尊を我始祖
に附属せしなり〻〻ひ昔〻云〻人界の大患い盗難難のふるへるを〻〻此霊像を優婆塞
ぜい永く此ろの子孫おのひ見守結縁の輩も又其難を免れたるなんと云云ろの〻〻より
紀寿より相伝せ〻〻今より五代二十五代を経て田四の間も路中危難を逃れしの憂多
くり〻もこの霊像の感應による所なりと語られい法印感歎〻この霊像を永く
此地に〻〻一堂を建立〻〻普く衆生を結縁せんと欲し頻に此霊像を乞求む
優婆塞も深く其意に感〻このそる像を玄学に附よと玄学由より一宇の香堂を
営ひ〻〻此霊像を安置奉られなり故に世人盗難除不動尊と称し〻〻〻〻〻〻〻〻
此地も昔い大平榎より笠〻〻く海
香取大神宮　同所二丁許乾の方にあり　して一の離嶋なり亀の窟〻〻
似〻〻〻〻四名を亀津嶋と
唱へたりといふ
本社　祭神　經津主命　中徳一宮の神同躰　相殿　武甕槌命　鹿嶋大神宮
猿田彦命　大枝大明神　二坐
當社い亀戸村草創〻りの勧請〻て此辺第一の古跡なりと
〻〻り　或伝に當社い大職冠藤原
公の勅願なりとい
行と薬所い吾妻森より二三十歩東の方田の中にあり往古
例祭い毎年六月十四日十五日に後



香取大神宮

亀戸邑の常光寺江戸
六阿弥陀回の第六番目
ゑり巻秋二度の彼岸
中都鄙の老若参詣
群集
せんそう
本堂建立
賽銭

祭礼を行いむとせ〜頃い此辺なくて海面すり〜うい春を流し
甚止る地を吹猿所と定へ〜と誓ひたり〜小其春めとる止を
〜となり故と今も昔の例よりより僅の間すうも十間川と亟り
て神輿を船と移し猿所へ神幸なるまうを

東林山寶蓮寺　墓藏院と号と真言宗にて寺鳴の蓮と毎
寺と属と寺そる虚空藏菩薩い行基大士の作り（江戸三虚空藏の一貫り小菅白山西福寺鼎川養願寺等なり）当寺い吾嬬権現の別当寺り相傳嘉元元年
癸卯俊鑁法印草創と寺の精舎すして始い相列小田原と
めり〜となり鎌倉北條家の時此地と移とをいと

西歸山常光寺　同所一丁めり巽の方にあり曹洞の禅刹
よりて撞鳴の總泉寺に属と両山い行基大士中興い勝庵最大
和尚と號す本尊阿弥陀如来の像い即行基大士の作り（六阿弥陀第六番目なり）
来迎松い佛殿の前と存せり（中古火災の時当寺の本尊大焼紀を出〜樹上よりうたふとをいと）

紀州〜松い同〜左の方にあり（時として樹上へ竜燈揚るうり）毎歳二月八月の彼岸

中条請寺〜

亀命山慈光院　同所十間川を隔て向とあり当寺も洞家の
禅林よりて同〜〜徳泉寺に属と永正十一年甲戌葛西出雲守
某の令室慈光院殿草創と寺の寺院たり両山い嵐巖和尚
本尊観世音菩薩の像い此地より東の方の土中より出現
あり〜とい又境内と安置せる辨財天の像い智證大師の作
よりて葛西出雲守某の尊信あり〜霊像なりといり

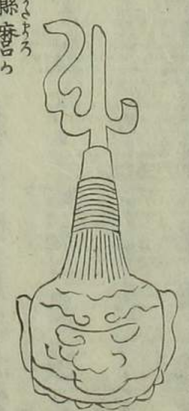
吾嬬権現社　同所十間川の湾よりあり此地を吾嬬森又深川歳
とも號〜別当い宝蓮寺なり

本社　祭神　茅橋媛命　一座　日本武尊初至駿河其處賊
日本書紀神代巻曰陽從之欺曰是野也麋鹿甚多氣如朝霧足如茂林
臨而應狩日本武尊信其言入野中而見獣賊有殺
王之情放火燒其野王知被欺則以燧出火之向燒

而得免

一云王所佩釵蓑雲自抽之薙攘王之傍草因是
得免故號其釵曰草薙也蓑雲此云武羅玖毛
王曰殆被欺則悉焚其賊衆而滅之故号其處曰燒
津亦進相摸欲往上總望海高言曰是小海耳可立
跳渡乃至于海中暴風忽起王船漂蕩而不可渡時
有從王之妾曰弟橘媛穗積氏忍山宿禰之女也啓
王曰今風起浪泌王船欲沒是必海神心也願以妾
之身贖王之命而入海言訖乃披瀾入之暴風即止
船得著岸故時人號其海曰馳水下畧

相生樟 本社の前右のかたより可なる連理と称するのみて一根二幹なりしかるに
社記に往古日本武尊弟橘媛の神靈を
宣ひ御身の自御廟の東の池よりさをゆしの
後枝葉を生し今に至りて栄茂せり又
其傍に又一樟の蘖あり是も一根二幹なり
未代平天下なるんかは此樟二本なりと云

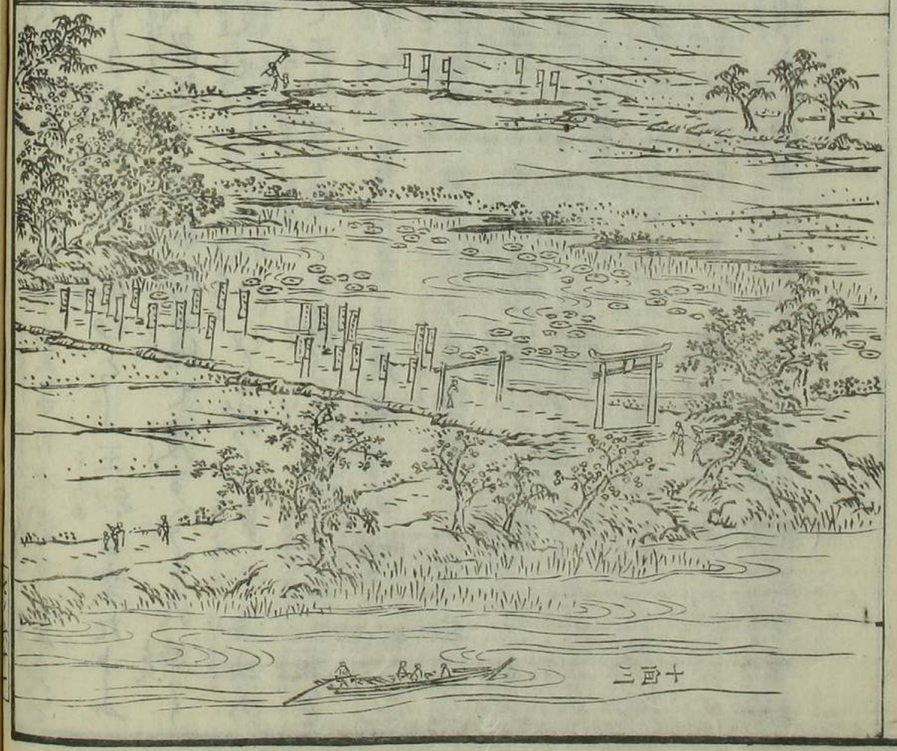


神寶古鈴一口 長さ八寸ばかりあり 銅色愛すべし
是よりしきりの常陸の鹿嶋正等寺の又息男縣麿ら
家のも藏せり其形状大同小異ある故よりを臨し
鹿嶋正等寺藏 藤原縣麿藏

社記曰人皇十二代景行天皇の御宇四十年皇子日本武尊東夷を
征伐しの時相摸國より往むとて王船に乘たりし
海中にて暴風忽起り王船漂蕩て渡るへからす時に
妾弟橘媛曰今風起浪泌して王船沒むと欲す是必海神の
心なり願わ妾か身を以て王の命を贖ひて海に入むと言訖て淵を
披て入るひぬ暴風即止て王船に乘て得たり
今走水と作る 其後弟橘媛の御裳此邊の海上に漂ひ流れ尊群臣に
命して此所に収め壇を築うしめ湍蘿を巡して御廟となしの
る獻の寄る此所を花咲と称す上総國君不去の妻明神是なり 當社古い
又其御櫛の寄りしを取揚て御陵を造る今の相州梅沢の吾妻明神なりと云
荒陵のみなりしを承久元年北条泰時の幕下鈴木隼人正神尾
采女井出大學等の諸士小祠を創營し神領三百石を附したり
しとなり其後永禄の頃も小田原北条氏の長臣山丹波守當社
を再興せしとなり

吾嬬森
吾嬬權現
連理樟

鳥うるく
あれまの
歌枕
えてらせい
月い



入江の
波そ
ちる
ちる
える

蕉雨森光入左

此和歌の戸田茂睡
入道のものなりし
鳥のうとのつる和歌
の集に載たり
自の詠なり その
ちなこの在事の
歌い東人とつるる
住しあるりしより
この東人いりある
人をやいまし
考へを

日本武尊東夷征伐し
たまふ時相模國より上総
國へ往んとし給ひし
其海上暴風忽に起り
王船漂蕩して危うく
うい妾弟橘媛自の御身
をもて贖ひ尊
の命をたすけ
もつらせんとて
海神に献ひ
竟に海に投
て入たまひ
ぬるとかや
日本紀に
みえ
たり

按ずるに小田原北条家の所領役帳にも妻山丹波守殿の中に葛西小村井の地名を挙げ加へ小村井に亀戸村に接して則此社の北の人村とりの黄社地の辺も丹波守の領地なるべきなり故に當社を後世とせり

殖髪聖徳太子堂　同所亀戸天満宮の裏門の通り川端に傍て慈雲山乾眼寺といふる天台宗の寺境に安置せり聖徳太子の御影い太子自親彫造なりとて御長二尺五寸あり其霊像の頃に太子と妃との鬢髪を殖えたりしと云ふ故に殖髪太子と称せり　當寺蔵太子縁起云推古天皇十一年癸亥太子御齢三十二歳同年十二月廿八日檜隈宮におひて霊木を得て自親影像を作り班鳩の夢殿に納たまふ太子傳暦等に此年影像を造るべきを載せたり其後代々の帝王大寺を建て世々の君子堂に移せり仍天智帝の七年に百濟寺を當むて安置奉る慶長七年壬寅に至る迄の間南都大安寺及ひ花洛蓮花王院高雄の神護寺あるひい豆別田方の般若王寺相別鎌倉の法華堂武別小菅の最明寺江別滋賀菅原寺琪別金昭寺等に移し奉り竟に宝暦十二年壬午十月武別荏原郡の清谷寺より移し奉り長く當寺に安置奉ると云

當寺の後園萩を多く栽て中秋の頃開花の時節い壮観なり故に世俗萩寺と字せり

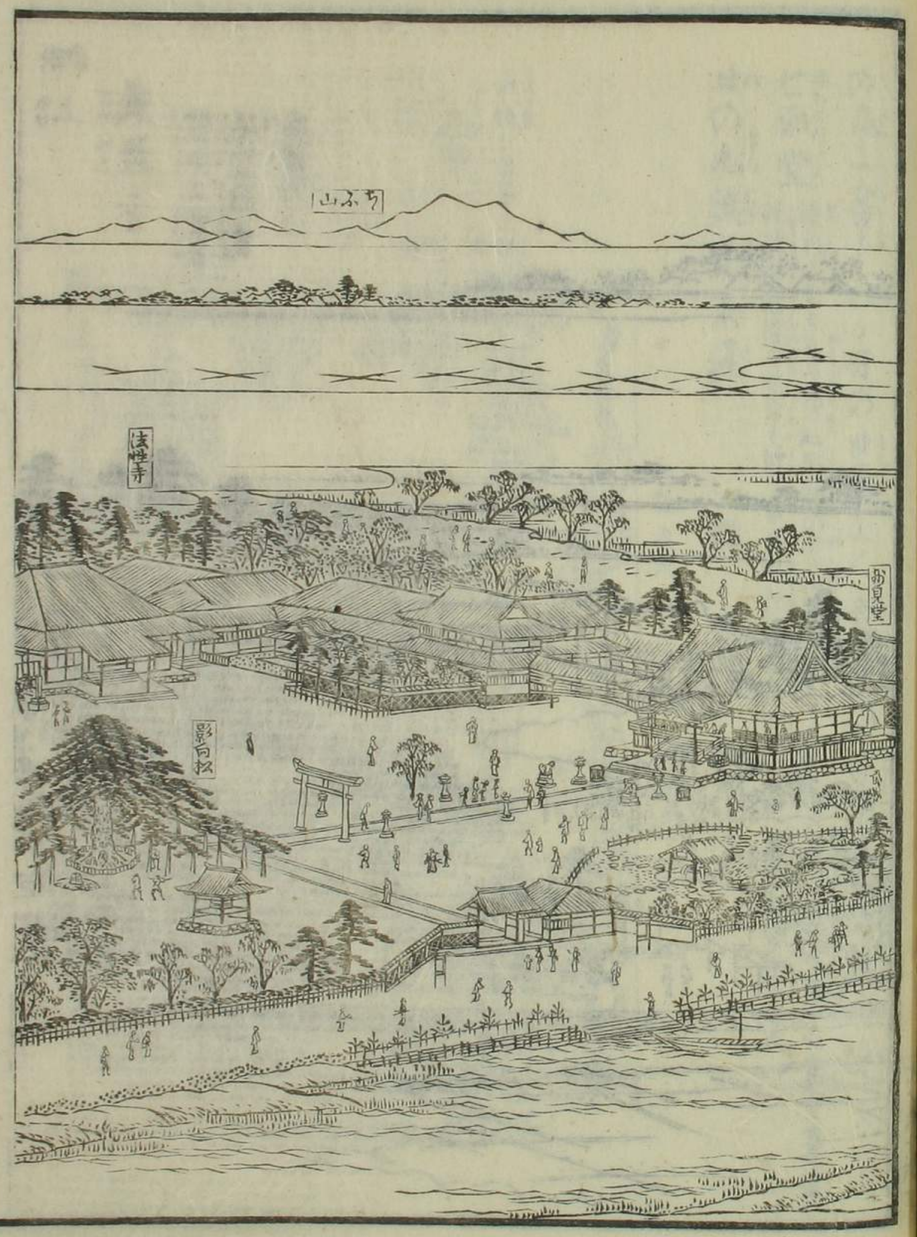
妙見大菩薩　ほし川階橋を越て向の南にあり日蓮宗法性寺に安置本尊の来由詳なる迹霊験著しく諸人常に絶ず堂前に影向松と号る霊樹あり本尊初て此樹上に降臨ありしといふ故に星降松とも千年松とも呼ぶ元和の頃大樹此地に至りてせあひしに頃更て境の松と号を揚ひしと云傳へ

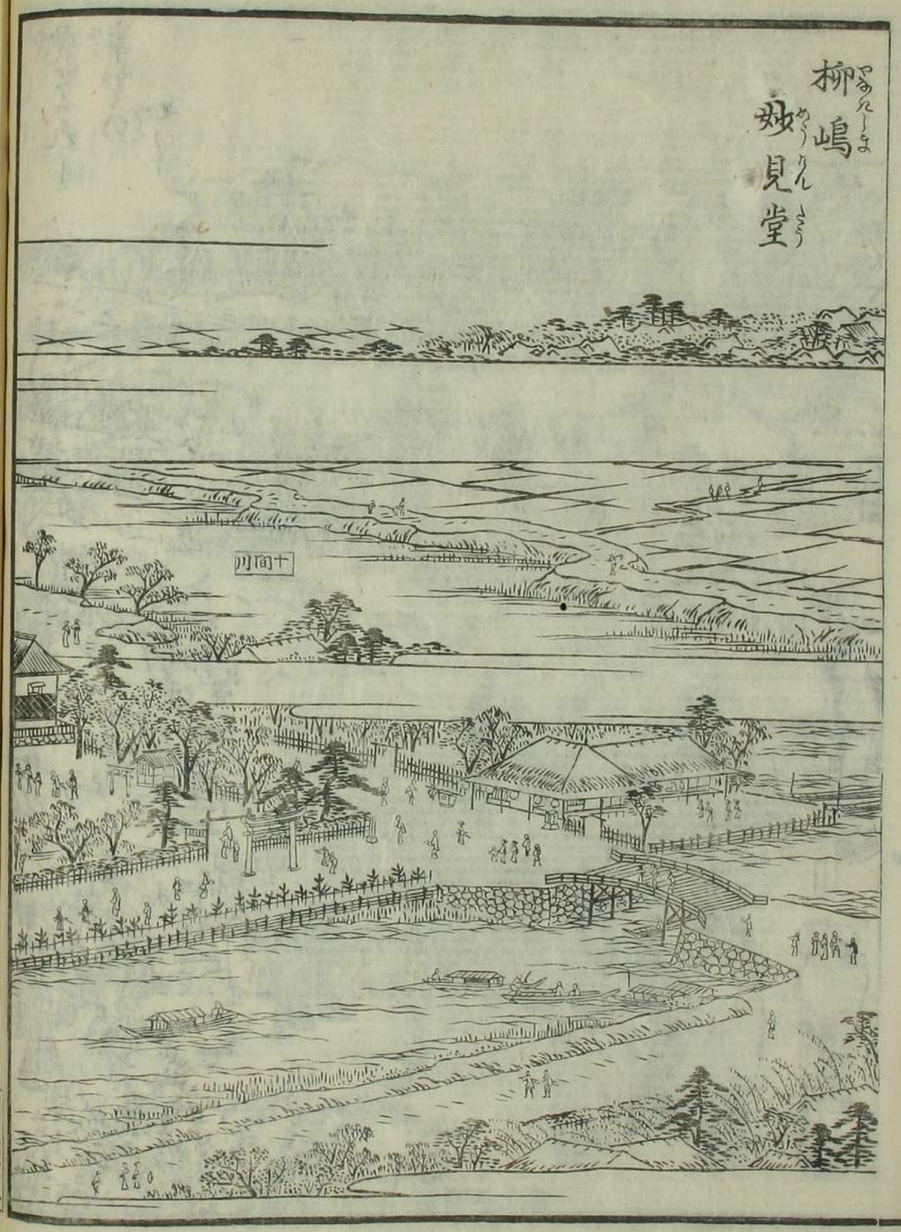
天松山最教寺　同所三丁ばかりを隔て西の方にあり日蓮宗にして本尊釋迦如来の像を安置寛永年間延山二十七世通心院日境上人開基せり當寺に鎌倉将軍惟康親王蒙古鎮制

龍眼寺

庭中萩を多く栽て中秋の一奇観たり故に俗呼て萩寺と称せり萬葉集茅子に作り和名抄鹿鳴草に作る續日本後紀に仁明帝嵯峨天皇八月清涼殿に内宴を景を茅宣華の讃とのたまへり

愛せられし事かの如し


山ふち
法性寺
妙見堂
宮殿


柳嶋妙見堂
十間川

押上

最教寺

當寺ハ蒙古退治の護曼荼羅あり

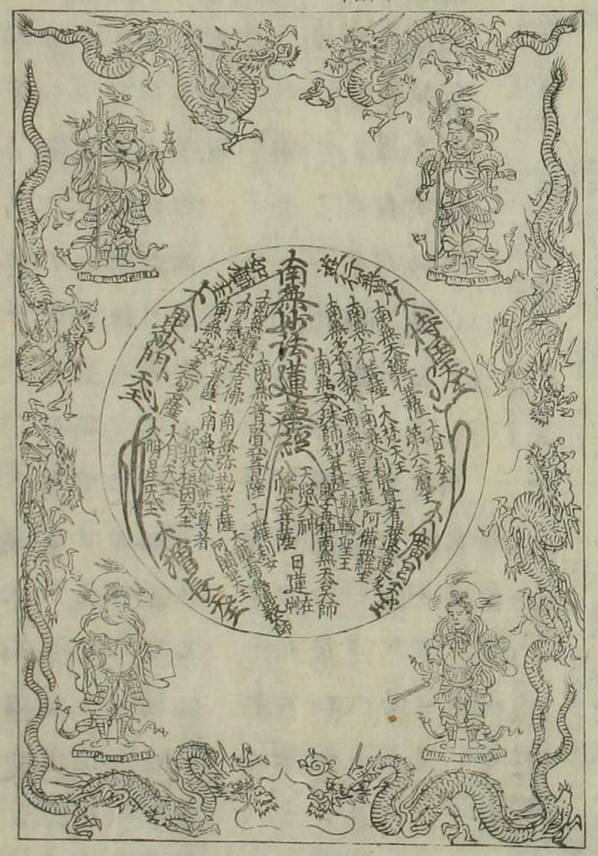
の為ニ書しむる所の日蓮上人真蹟の曼荼羅の旗あり

七面堂　境内にあり本山身延同躰の霊像なりと云三澤流初祖の本尊にして當寺第二世の仏持仙能院日宗なる所二百日加行して池の傍に社殿を建立せしと云

日の丸旗曼荼羅　一幅　竪六尺五寸

毎歳七月十六日より初れし九月中七日虫拂とて七面堂に掲て諸人に示さしむ

月の丸の曼陀羅ハ身延山にあり



幅五尺五寸

兩面之大旗來由記

弘安四年辛巳五月二十一日從大元國蒙古賊船四千余艘人數二十四万余責來七月於九列防戰其時這八大龍王之御旗四方先立向親王九列給時其為大漫荼羅令書此御旗四方霊神擁護有神風吹彼賊船大武之大將至九列則日本亡追拂給目出度旗成故我家是預給畢其人數等不殘破異國

這兩面之大旗者惟康親王所持之御旗也弘安十二月二十一日宇津宮貞綱判

四年五月二十一日從大元國蒙古来船四千艘人數二十四萬人也于時親王此旗四方八大龍王四角四天王中四拍内十界大曼荼羅日蓮聖人仰而令書是為持九列向穢蒙古災給御旗是也

正應元年十月十三日　武州池上村

右衛門太夫宗仲判

蒙古退治蕉曼荼羅来由

三年庚辰春二月　人皇九十代後宇多帝御宇弘安元年

七年に當る

日本文永元年に當る

蒙古の賊高麗人趙良弼日本國に通じ入朝を乞へりと言を以て使を遣はす

高麗人趙良弼日本國に通じ入朝を乞へりと言を以て使を遣はす

者を撰び同三年八月兵部侍郎黒的を以て日本に使せしめ弘安元年迄元使日本に書を送り来る

元王憤て阿剌罕　五倫書巻二十一阿剌罕に作る

阿剌罕途中にて病に臥す

倉に入いて元使杜世忠を殺す　日本

花文虎及竹都洪茶丘等の四將に師十萬を率

しゆて日本を撃むとす　東國通鑑巻の三十八高麗記云茶丘竹都蒙漢四萬の軍を率て合浦を發し花文虎蠻軍十萬を率て江南を發し俱に一岐嶋に會すと太平記

同四年辛巳夏五月　元至元十八年に當る

三百萬騎と云ふ　緣起二十四万人と云ふ　蒙古の賊

東國通鑑戰艘三千五百艘又太平記七萬　元史日本傳六月海に入る七月平壹岐に到り五船

船　緣起四千餘艘と云ふ　緣起一万餘艘と云ふ

の二鴉及び筑前肥前に入る　元史日本傳に云ふ比羅度と云ふ三船

筑前肥前の國にある所なり

督し来て鎮西に寇し壹岐對馬

平壹岐に作る　平戸壹岐通じて平戸に作る　異称日本傳

赤藁島に作る　乾山に鷹鴉なり此鴉は筑前の國にある所なり

天下の人民戰慄せざるなし

征夷大將軍惟康親王蒙古退治

とて鎌倉に於て

の為自九州に向はしむ

ら宇都宮貞綱を以て先陣の大將たらしむ

日蓮上人に命して四月の蕉の四中に大曼荼羅を

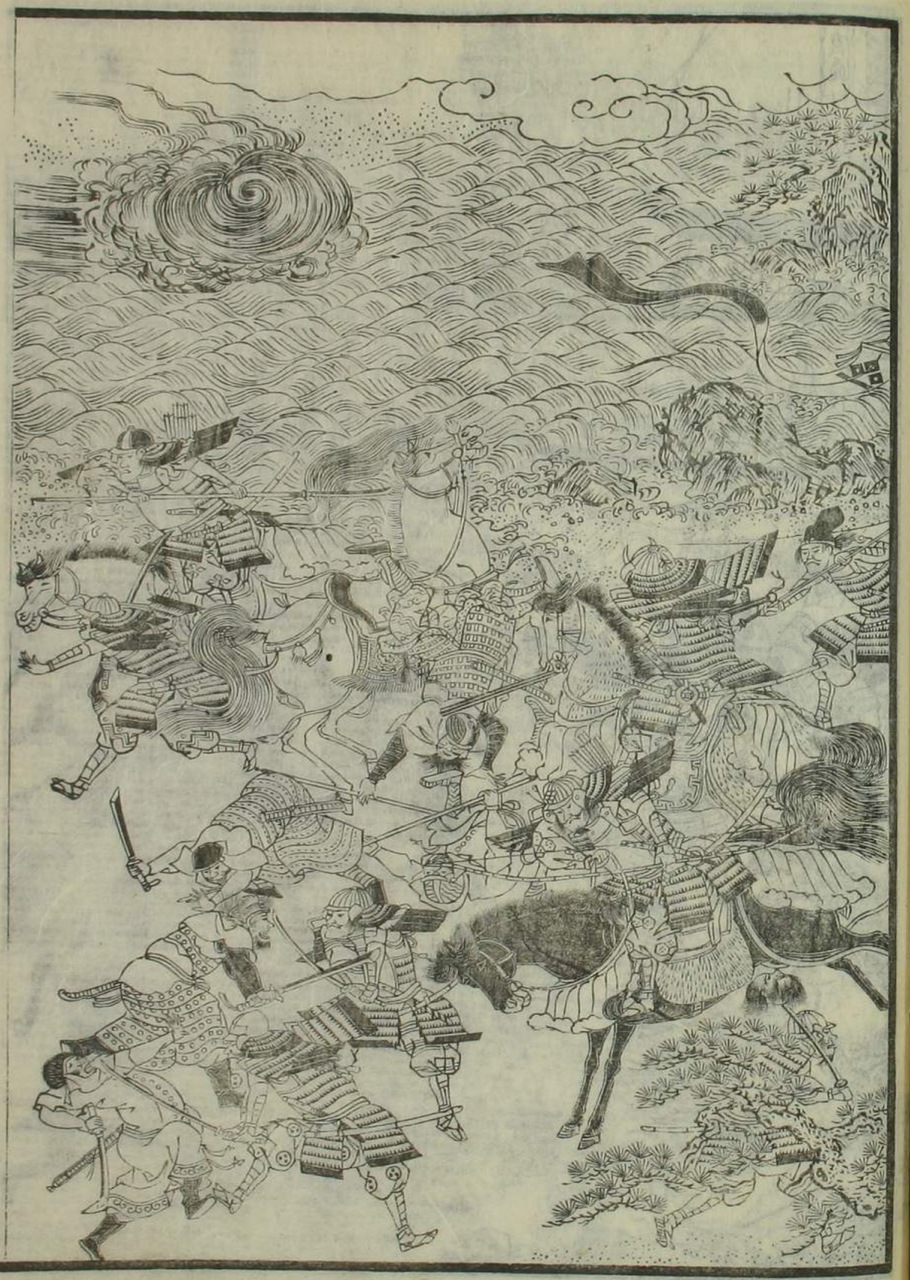
書しめ其蕉を貞綱に與へ西海に發向せしむ其時同年閏七月

一日に貞綱海濱に至り彼蕉を押立るに颶風俄に起り逆

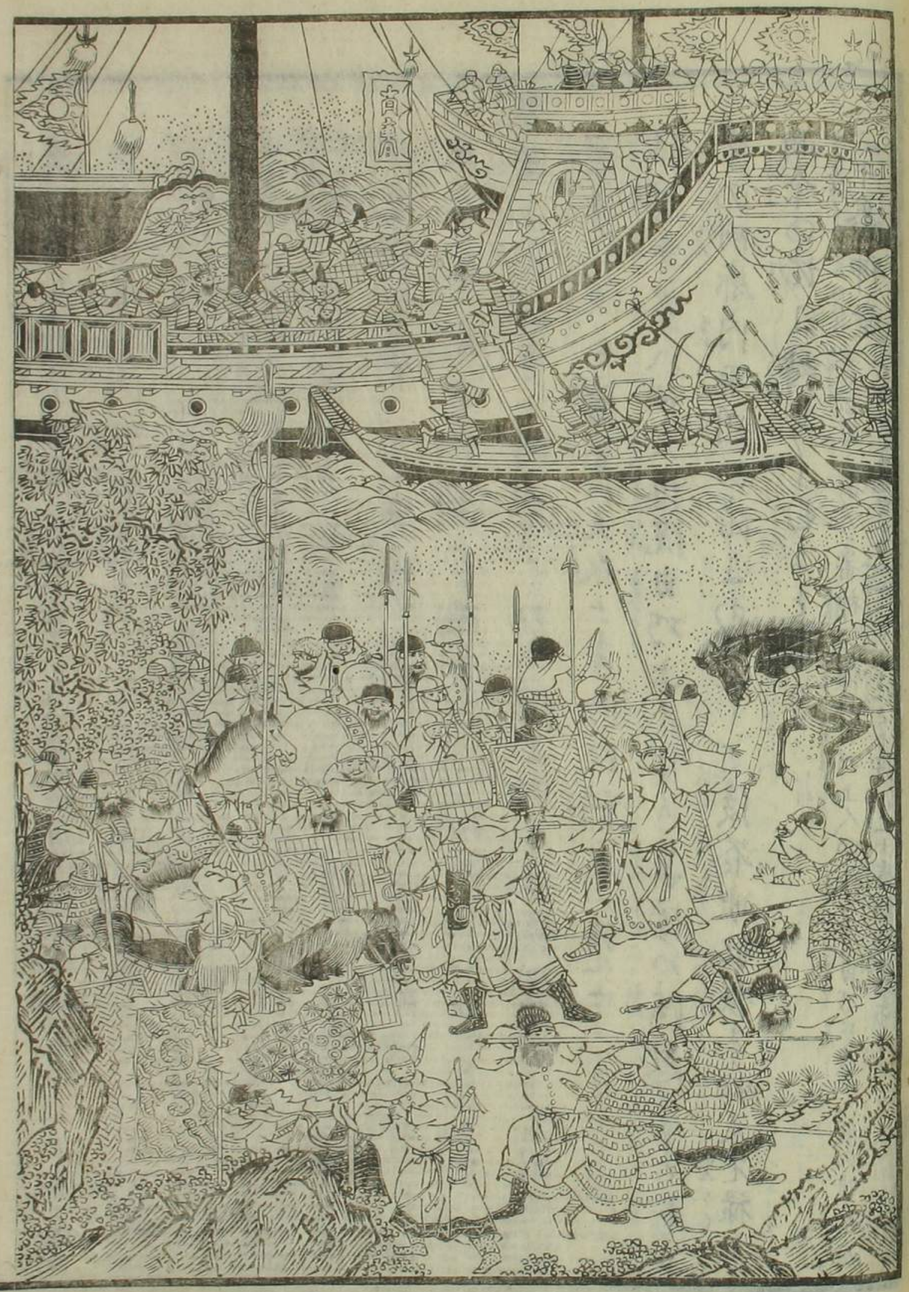
浪天を侵し賊船漂蕩し或い巖崖に觸て多く壞し蠻軍

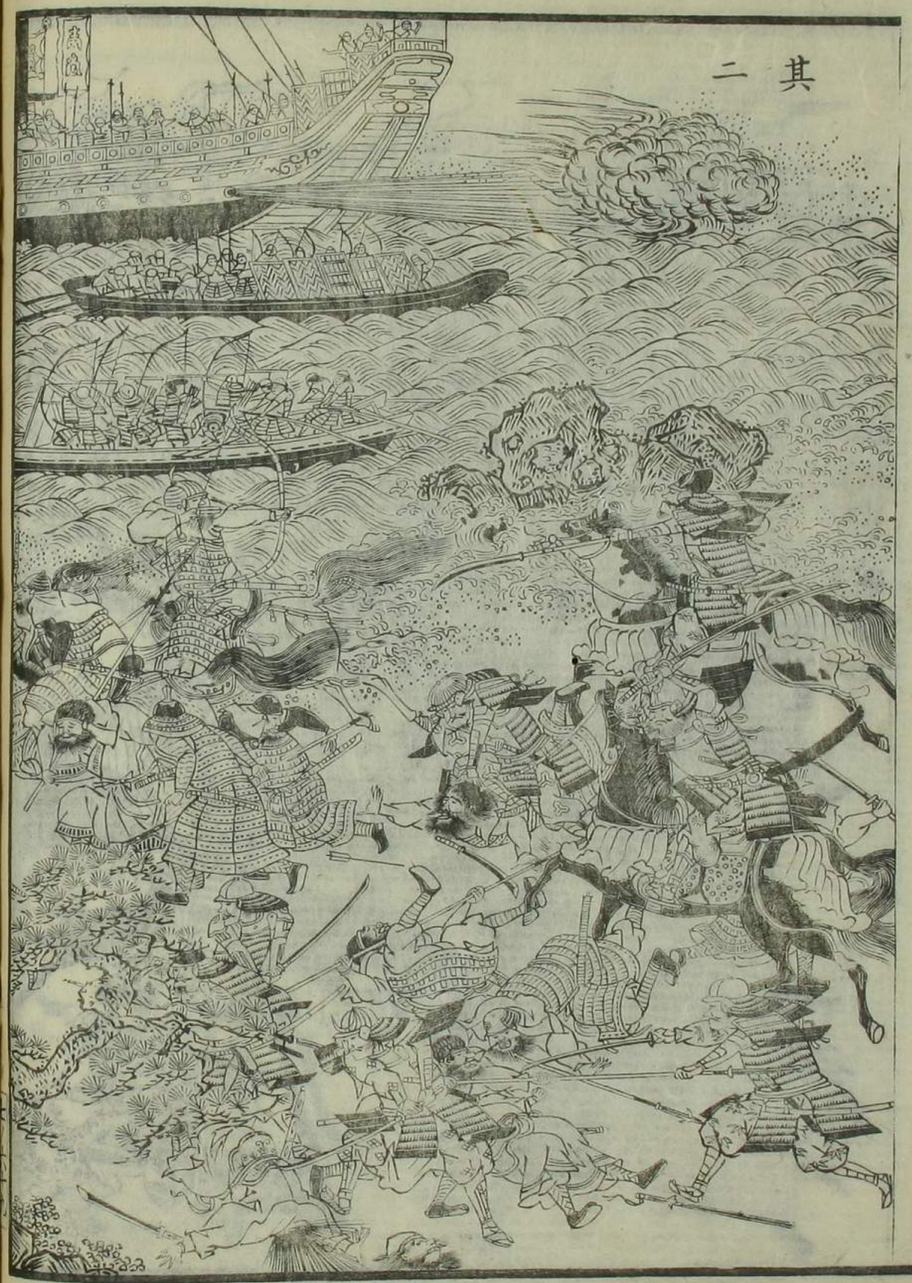
溺死して與腹に葬らるるの其數を知らざる元師大に敗れ

を擾にする者凡三萬人悉く是れ梟首と其餘は于闐莫青呉



鎌倉將軍
惟康親王
蒙古夷賊
退治の図

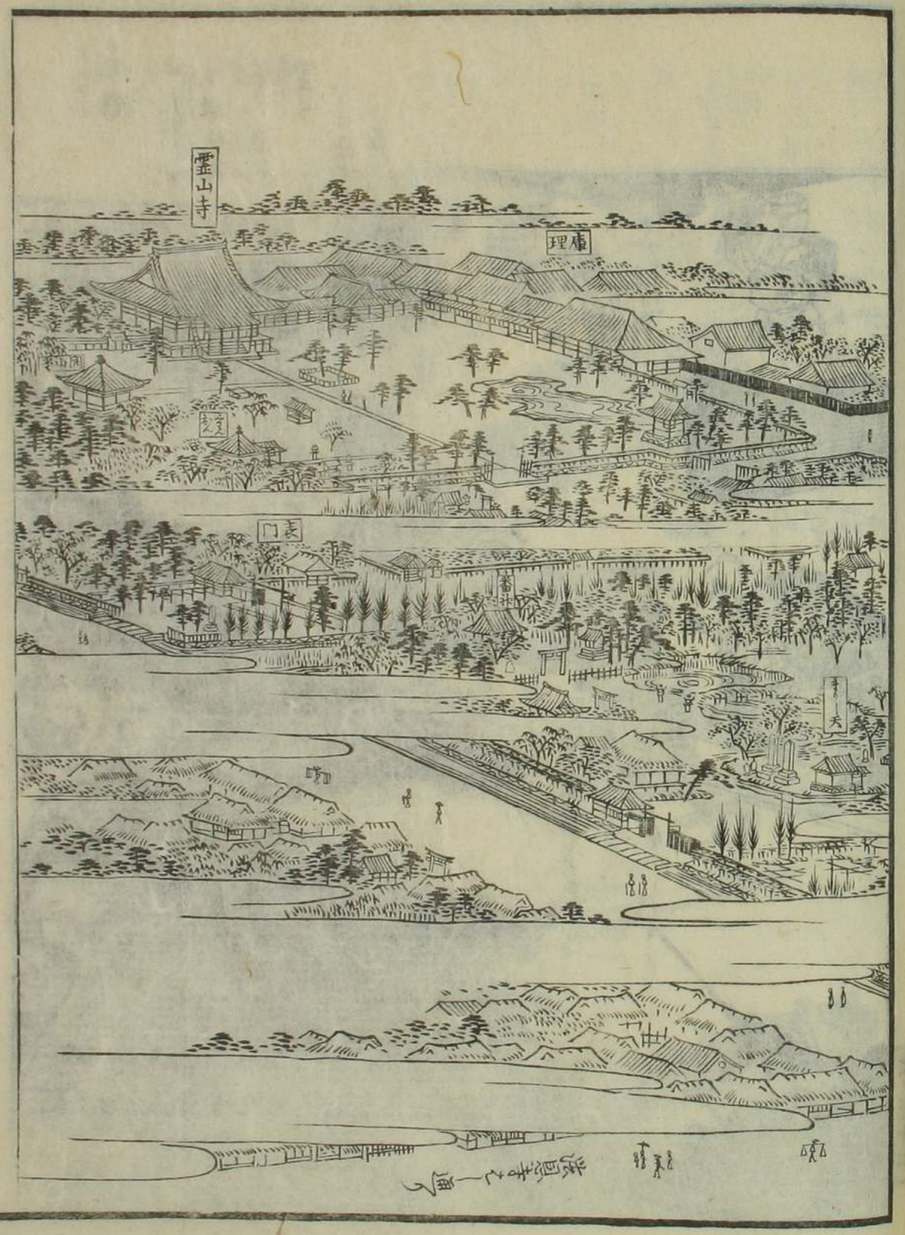


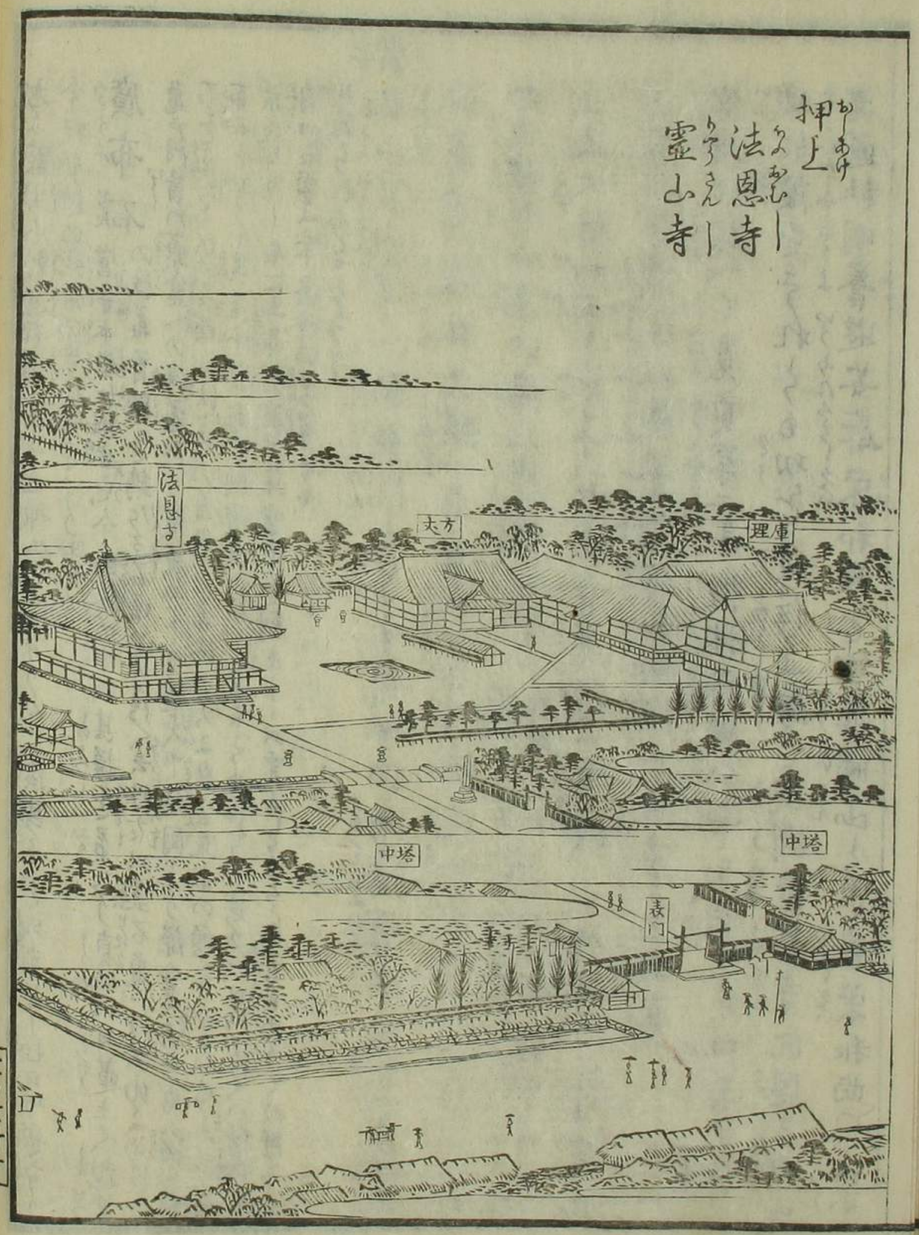

其二

萬五等を赦して國に還らしむ是此事成え主よりたらしめんと
ゐるを蒙古の敗卒還るるを得る者僅に此三人のみ 大學衍義補に
云えの世祖の至元十八年日本を擊兵十餘萬海島に死し還るるを得る者僅に三十人とある
を異称日ひ伝に三十人の十の字に行ずるとあるを史に十萬の兵還るるを得る者三人のみと
ありて三人の名を挙たり曰く于閭曰く莫青曰く吳萬五等なり以上史日本傳東國
通鑑綱資治通鑑綱目大學衍義補五倫書帝王編年集成太平記北条九代記當寺
縁起等の要を摘 依凱陣の後勸賞ありて永く此禍を貞綱に賜ひ貞
綱未由を書して身延山に納む然を當寺開山日境上人身
延より携来まるく永く當寺の什宝たらしむるとなり
寶聚山大法寺 同三丁くり西にあり日蓮宗にして同所法
恩寺に属せ當寺は大永六年丙戌創立の梵字にして開山は
法恩寺第八世大權院日巧上人なり其頃は法恩寺と共に
今の御廓内平川の北に有りしを後谷中に移され又元禄年
間今の地に轉ずるとなり
二十番神堂 本堂の左にあり番神の像は日巧上人の作なり日巧嘗て六歳の時疱瘡
を病ひ死せり又世此に活さる所に二十番神の霊示より良薬を得て

忽に蘇生せり則壇布石に彫る敬神の加護なりと云ふ後默るを出家せしむ日巧題なり
今狀夢想の疱瘡の守れ當寺に當寺本堂に秘安せり今卵塔の中に其摸を置たり眞物は日蓮上人親筆
廣布石 の法華経題を鐫たる石塔なり伝に云ふ件の此霊石亀戸村の北にあり
亀戸村黄の鶴倉への海道たり建長五年日蓮大仏総國より鎌倉へ帰る山頂彼
布石と号く其後千葉氏なりし尉に生れ度の後當寺を創立せり此霊石をもつて安置ありて巧師も又
彫流られ有るとなり

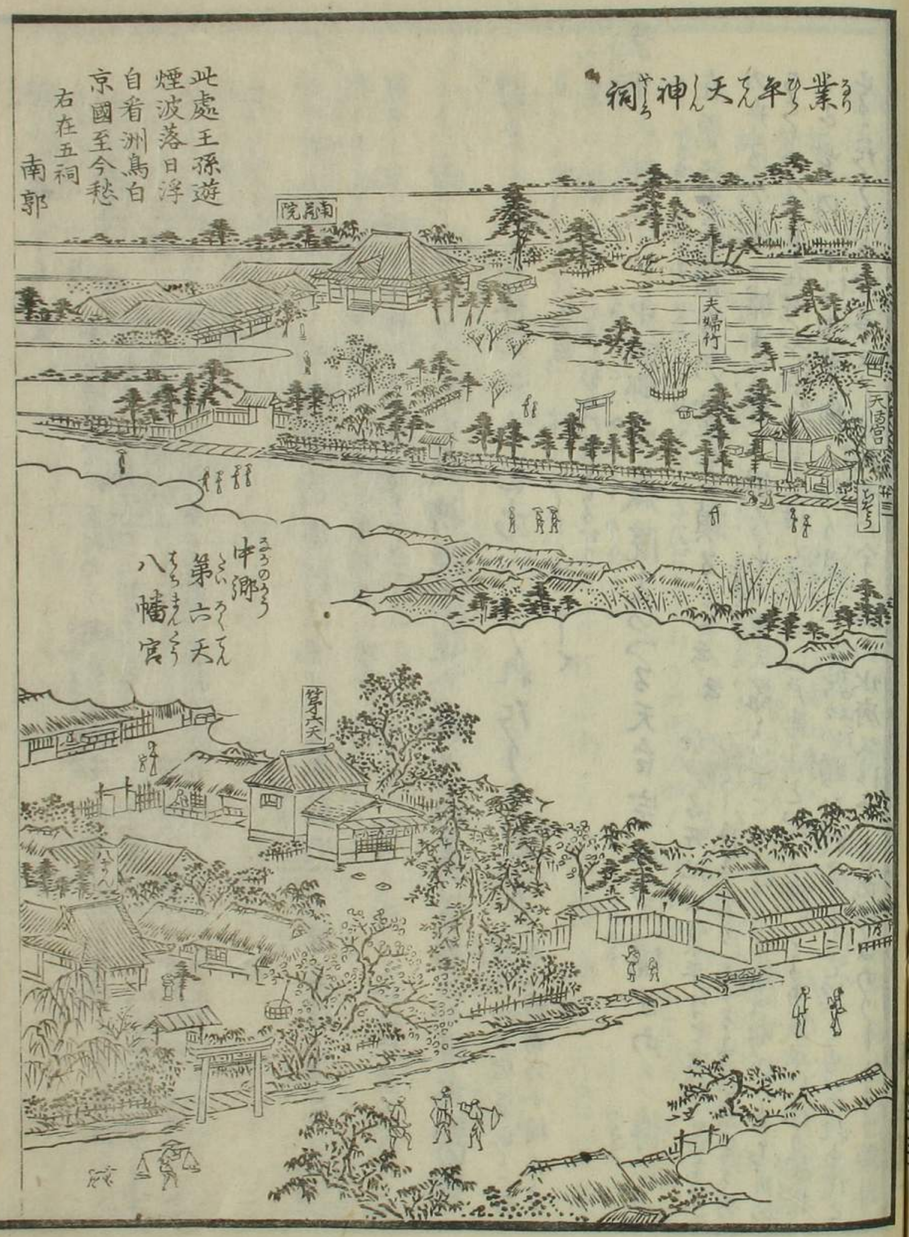
常在山霊山寺 二尊教院と号す同所の南法恩寺の北に隣る
浄家十八檀林の隨一なり本尊阿弥陀如来の像は慈覚大師
の作釋迦如来の像は唐仏なり 教院とは此故に云ふ 開山は念蓮社專誉
上人大起和尚と号す中古寺院既に荒廃して檀林の統脈絶ん
とせしを最蓮社親誉俊應和尚深く此事を慨屢
官府に訴へて竟貞享二年檀林再興の命を蒙りて往昔の浄
域に復せされとも功を後住に譲て武州能谷寺に隠る故に
光蓮社明誉遊安廓栄和尚は中興開山とす廓栄和尚は一宗


霊山寺
庫理
表門
大方


押上
法恩寺
霊山寺
法恩寺
大方
庫理
中塔
中塔
表門

尾師
中之郷の辺
尾師の家
多く見受
業そ
さるものの

の高徳碩学にして往生要集指麾抄を著し大に世に行はる
當寺昔い湯鳴妻恋坂よりしら羽暦火災の後淺草に
移りしより元禄年間今の地にうつる（淺草にありし頃の地い今の誓願寺中安養寺の所なり）
知恩院尊空法親皇御廟（本堂の西にあり尊空親皇ハ浜川小名木川より五本松に所閑居あり其故いにてしるくしるし）
（界内に所影堂い池中恩満院より）
浄土傳燈系圖曰　尊空天蓮社帝譽号照満伏見
守邦親王子入于靈巖室剃染嗣法住洛知恩院元
祿元年十一月七日寂
観音堂（本堂の前右にあり本尊慈覚大師の作にして
桂昌一位尼公信念持佛なりしとぞ）
平河山法恩寺　押鳩出村所にあり日蓮宗にして花洛本國寺
の觸頭江戸三箇寺の一員たり本堂に宗祖上人の像を安置
日法上人の作なり相傳ふる當寺い太田大和守資高（道灌の孫なり法華靈場記日悦の靈なりと云云）
十三回忌追悼の為に三田村の内を寄附し日住上人を開祖とし
（先考六郎左衛門尉資康入道法恩寺日恩と号）
則大永四年甲申武州江戸下平河に精舎を營建し一家の靈



牌を居るとぞ云云

三十番神堂　本堂の前左の方にあり関東古戰録といつるものに云僧に三十番神の堂に資高北条家を崇き里見義弘に刀をあたへ永く豊潟郡の地を知行せんとて誓約ありしかども番神堂の前にて神あらを吞けるゆゑ思ひ定めるうらを再びをへしと誓約ありしと記せり甚だ古今の所城内平川の地にあり

當寺往古い今の御城内平河にありて本住院と号せしとなり北条家の所役帳に本住院寺領三田内為所分の地を法恩寺と改しい後迄のこりとあり別に役場い本住院のあるを云なるべし

こえたり遥に天正の後柳原の辺に移され其後谷中清水坂の地に轉ぜられ元禄の初今の地へひきうつされたりといつる境内に平河清水と称する稲荷の小祠あり是乃ち平河より清水坂へうつりたりし徒まちふたつの地名をあらせしかい称せるなり

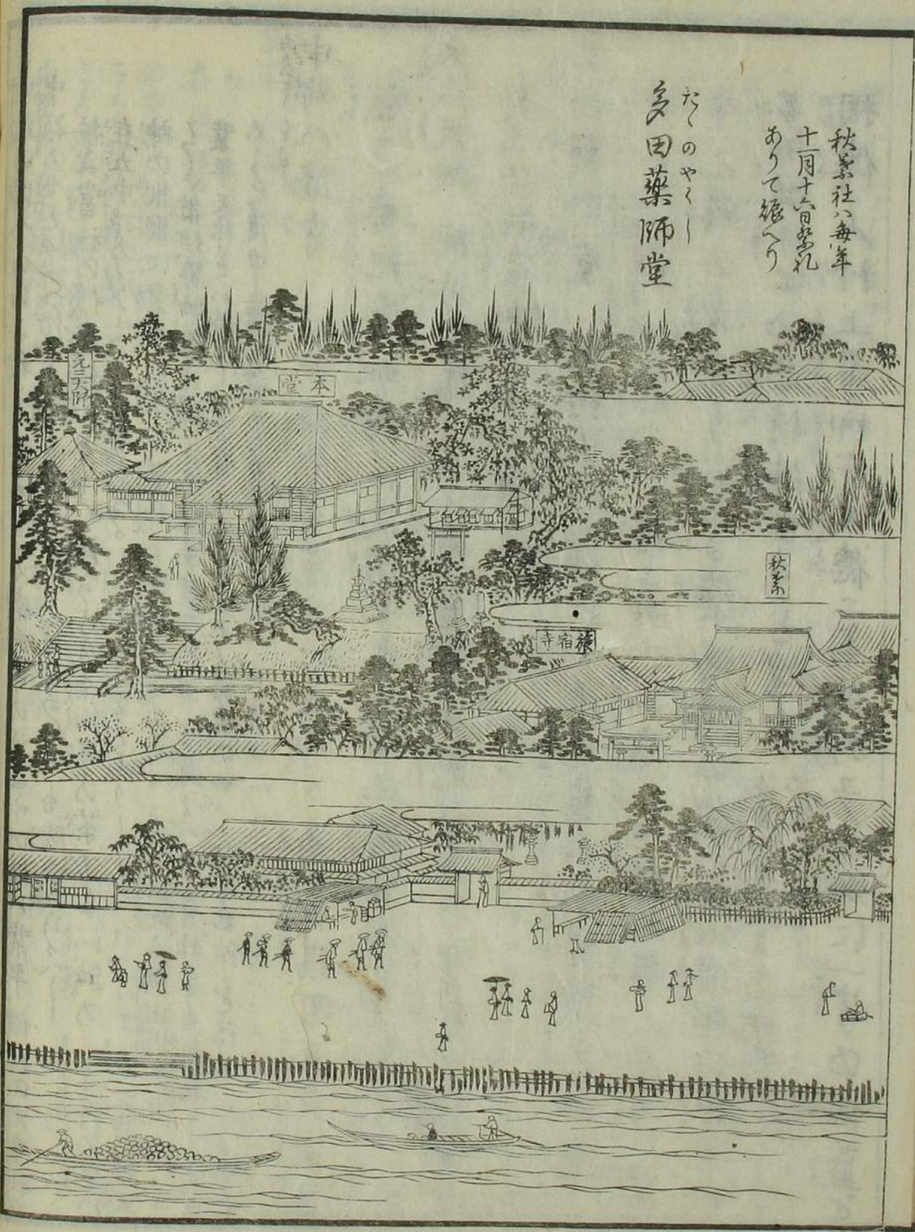
葉平天神社　中の郷南藏院といつる天台宗の寺境にあり傳いふ在原業平朝臣の霊を鎮ると云云江戸名所記に業平すでに都よりのがれの舟にのりて浦まで覆り溺死せし乃里民冢に葬こあたりに故に冢のうちに舟のうつなり其在所を今も業平村と云と又江戸鑑にもつる冊子にも成平に作り相撲とも紫の一本にも業衡に作り武夫とあるの類ひ非多しといへともいつれも徒と云るにたりとも永涼亭云く此祠昔い今小梅の水府公はせきの地にあり横川の頂今の地に移さるとあり又南向亭の説に中の郷い業平似住の地なれい中ゐの名といふへしを誤りて中の名と云とあれとも附會なるへし按に當社の伝説紛々として伴なるへし南向亭の茶話に紙の三吉所の里い在五中ゐの所にあるとなるへしいたれいかや後三吉野天神の相殿に業平の霊と菅祢とを合せまつりされい此地も隅田川の流迫くて彼伊勢物語に因りてなるも業平の霊を齋まつり菅祢をも勸請せし命に業平天神といい称しなるなりとあり此説の如く伊勢物語を作りたるものと後世に附會せしものなるべし

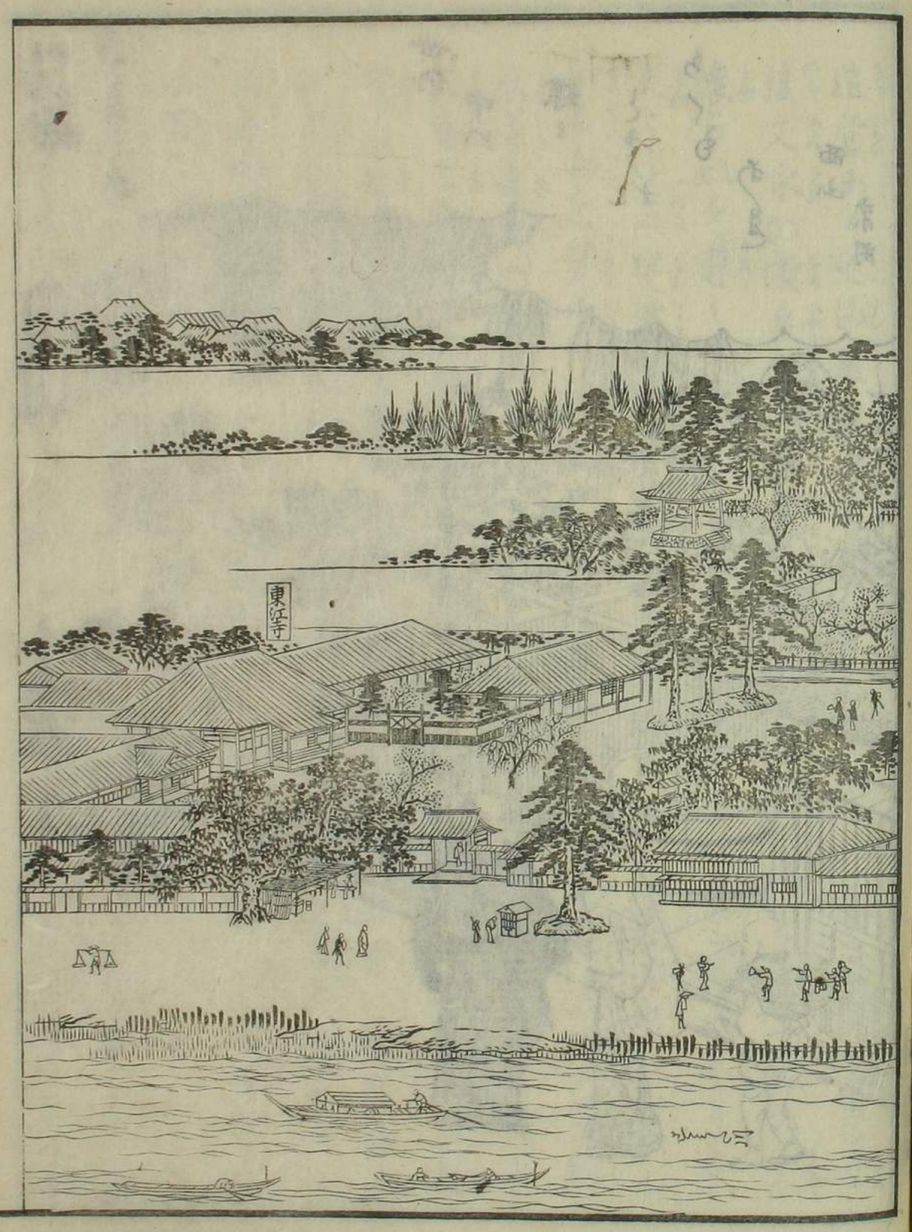
中郷八幡宮　同所南の方荒井町にあり南番場町天台宗泉龍寺奉祀ゆ相傳に文明七年乙未の鎮坐なりといつる大六天祠　同北に隣る大川端普賢寺別當たり當社も文明五年癸巳の勸請なりと云傳に

多田藥師堂　同所大川端にあり如島山明星院東江寺と号ゆ天台宗東叡山に属ゆ　惣門に掲る所の玉島山の額い韓人雪月堂李三錫の筆なり本尊藥師佛の像い恵心僧都の作なりて多田満仲公の念持佛なりといつる左右の脇檀に十二神将の像を置く相傳に村上帝御宇天徳二年摂別当多田郷に一宇の伽藍を

秋葉社ハ毎年
十月十六日祭礼
ありて賑へり

たゝのやくし
多田藥師堂





中之郷

さらゝ井

世の
中ハ
蝶ゝ
とまれ
ろくも
あれ

西山
宗因

造営ありて沙羅連山石峰寺と號し此本尊を安置す其後文永の頃兵火に罹て諸堂悉く回禄に依て一山の大衆ら れを悲み此本尊を石函に収めて山中に埋め奉り然 丈より後星霜を経て慶長元年郷民等沙羅山中におひて 此石函を穿出せり蓋に沙羅連山石峰寺薬師の銘あり郷 民等奇異の思ひをなし一堂を営て是を安置同八年 其庵主宗玄と云者に本尊告めのゆありて京師五条の因幡 堂に暫く安置し又五條の橋詰東の方若宮八幡宮の辺 に堂舎を建て石峰寺と号し寶永の頃彼寺の黄檗の千 呆和尚深草に移し其時故ありて本尊薬師佛を當寺に 安置なしまるといひり

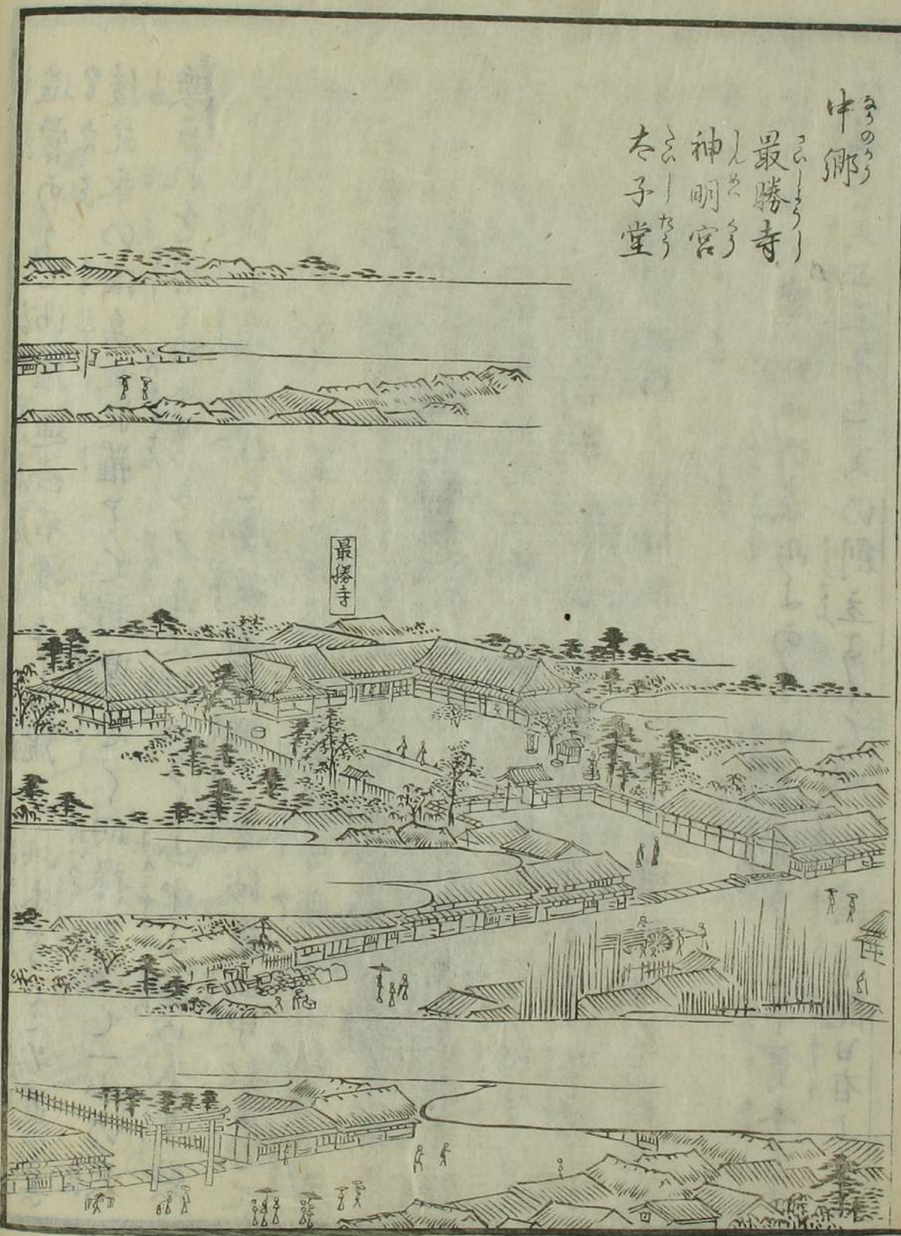
照法山本久寺　北本所表町よりあり日蓮宗にして平賀本土寺 に属し天正三年乙亥の創立にして開山清眼院日有上人と

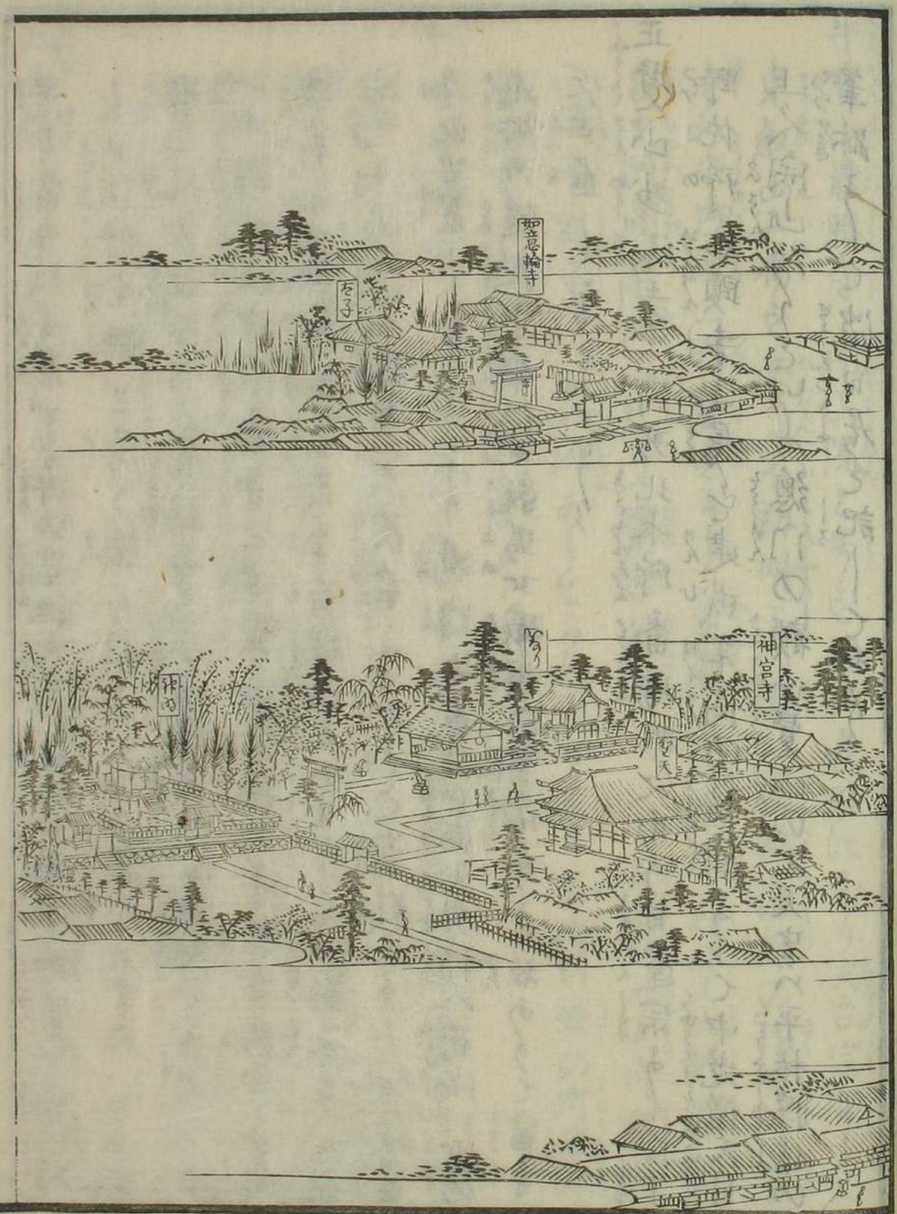
中郷

最勝寺

神明宮

老子堂





号を當寺に安置する所の宗廻大士の像ハ日朗所御首を彫刻
し日法所全體を造り添られしとの體中三すに六すの首
題の札を收めたり日朗日法等の真跡なりとの
此御影始谷中感應寺に安置を元禄四年彼寺改宗の時
檀家ハ八牧弥宗と云る有信の人ありしか此影像あらひに
三光天子大黒天等を其家ようつして崇敬ありしを後當
寺に安置しなりとなり境内安置の七面大明神ハ花洛村雲の
尼御所隨龍寺殿仕女數馬女感得の霊像なりて故ありて當寺
に安置しなりとなり

正覚山妙源寺　同所北本所番場町にあり日蓮宗なりて下
野佐野妙顕寺ハ屬を建武年間の草創なりて中老僧天目
上人開山たりとの總門の額正覚山の三大字ハ平林惇信の
筆跡なりて洪日居と記してあり

牛寶山最勝寺　明王院と号を同所表町にあり天台宗なりて
東叡山ハ屬を本る不動明王の像ハ良辨僧都の作なり當
寺ハ牛御前の別當寺なりて貞觀二年庚辰慈覚大師草創
良本阿闍梨開山たり寛永年間　大樹　此辺所遊猟
の頃屢當寺へ　入御あらせられしより其頃ハ假の御殿抔
営構なりしとなれたりとなり　山王権現を観清を
牛嶋神明宮　同所ハ並の相傳ハ貞觀年間の法座なりと別
當を神宮寺と稱して最勝寺より兼帯を
夢　伊勢大神宮虚空より大光明の間に微妙の御声まして我いらんと云法華経無量寿の文を唱へ我は
元興寺と云法華経無量寿の文を唱へ我は
伊勢の御神を勧請しなりとなりたり
因ハ云牛島ハ北条家の領地なりしもの江戸牛島四ヶ村とありて寛永年間に郎の所の中
より今も本所中のその辺より江戸の古絵に回向院の辺より牛島と記してあり

太子堂　同所元町にあり天台宗如意輪寺に安置を本る聖徳太子

の像は十六歳にして七の時自親造りなりし當寺は淳和
天皇の嘉祥年間慈覺大師東國遊化の頃の創建なりと帝百
畝の水田を寄附しなり天文の頃此地領主氏の災に
あひて太子の靈像は自火焔を逃れ出ひて恙なりしとも
江戸名所誌